

西浦遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ



2016.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

西浦遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ

2016.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

西浦遺跡は、国土交通省が進める高知西バイパス(一般国道33号バイパス)建設に伴う緊急調査として、平成23年度に調査を行いました。この事業は、高知県東部に計画されている高知南国道路と南国安芸道路の二つの自動車専用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査とほぼ同時進行で実施されたものです。

今回報告する西浦遺跡は、いの町枝川地区に位置し、試掘調査によってはじめて遺跡の存在が明らかとなりました。調査では、中世から近世、そして近代に至るまでの遺構や遺物がみつき、枝川地区における歴史的な変遷の一部がみえてきました。

本書が豊かな地域史の復元に寄与し、地域の再発見に繋がると共に、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、そして埋蔵文化財への深い御理解と御協力を賜りました地元の皆様方に心から謝意を表すと共に、発掘調査に従事して頂いた現場作業員の皆様方、報告書作成にあたり御指導ならびに御教示頂きました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 松田直則

例言

- 1.本書は、高知西バイパス建設に伴い、平成23年度に実施した西浦遺跡の発掘調査報告書である。
- 2.本調査は高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
- 3.西浦遺跡は、高知県吾川郡いの町枝川字西浦に所在する。
- 4.発掘調査は3ヵ月にわたって実施し、発掘調査延べ面積は1,500㎡である。
- 5.調査期間は、平成23年4月25日～8月9日にかけて発掘調査を行い、併せて基礎整理を平成24年3月31日まで行った。また、本報告書刊行及び整理業務を平成26年4月1日～平成28年3月31日にかけて実施した。
- 6.発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成23年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務：同次長 嶋崎るり子 同総務課長 里見敦規 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査第四班長 吉成承三 同専門調査員 武森清幸 技術補助員 大原直美 測量補助員 横山藍

平成26年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務：同次長兼調査課長 松田直則 同総務課長 野田美智子 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長 松田直則

調査担当：同調査第三班長 吉成承三 調査補助員 横山藍

平成27年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 松田直則

総務：同次長兼総務課長 東勝彦 同総務係長 吉森和子 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長兼第一班長 吉成承三

調査担当：同調査第一班長 吉成承三 同主任調査員 筒井三菜 調査補助員 横山藍

- 7.本書の執筆は吉成・筒井・横山が行い、調査補助員の横山が編集した。遺物の写真撮影は筒井が行った。現場測量、遺構図等の作成、及び報告書掲載の遺構・写真等の図版作成は、調査補助員大原・横山の補助を得た。
- 8.遺構については、SB(掘立柱建物跡)、SA(柵列)、SK(土坑)、SD(溝跡)、SX(性格不明遺構)、P(ピット)とし、遺構番号は、調査区ごとに通し番号を付した。掲載している遺構図の縮尺はSB・SAは $S=1/100$ 、SK・SD・Pは $S=1/40$ ・ $S=1/60$ ・ $S=1/100$ で作成しそれぞれに記載しており、方位(N)は世界標準座標方眼北である。
- 9.遺物については、原則 $S=1/3$ とし、法量の大きさによって $S=1/4$ 、 $S=2/3$ 、 $S=1/1$ で掲載し、各遺物にはスケールバーを掲載している。

10. 基準点設置及び航空写真測量については株式会社四航コンサルタントに委託し業務を実施した。記して感謝する。

11. 現場作業及び整理作業については下記の方々に行って頂いた。(敬称略, 五十音順)

発掘調査作業員

井沢俊一・大原栄美・尾崎毅・川上公雄・北岡由美・塩見朗・渋谷茂弘・中島美恵子・西内園・仁野村かゆり・橋村康之・林孝明・原田憲二・藤山三和・町田憲嗣・宮添彬・村松広海・山口壽子・山口優幸・横山正宣

整理作業員

岡崎千枝・高橋由香・永森亜紀・橋田美紀・畑平裕美・松山真澄・吉本由佳

また, 報告書作成にあたっては, 埋蔵文化財センターの諸氏の協力と援助を得た。

12. 調査の実施にあたっては, 国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所, いの町, いの町教育委員会, 工事関係者の協力を得た。また, 地元の方々の絶大な協力と援助を得た。

13. 出土遺物の注記は, 出土略号を11-4INとし, 図面, 写真資料とともに高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第 I 章 調査に至る契機と経過	1
1. 調査に至る契機	1
2. 試掘調査の概要	2
第 II 章 地理的・歴史的環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境－西浦遺跡周辺の遺跡－	6
第 III 章 調査成果	9
1. 調査区の概要と調査方法	9
(1) 調査区の概要	9
(2) 調査方法	10
2. 基本層序	10
(1) E 区	10
(2) W 区	11
3. 検出遺構と出土遺物	13
(1) E 区	13
(2) W 区	26
第 IV 章 考察	49
1. 検出遺構について	49
(1) E 区	49
(2) W 区	49
2. 出土遺物について	50
(1) 中世	50
(2) 近世	50
(3) 近現代	50
3. ガラス瓶からみる近代の高知	51
(1) 牛乳瓶	51
(2) 汽車茶瓶	53
4. 枝川の変遷	53

挿図目次

図1	いの町位置図	1	図28	E区Ⅲ層遺物実測図1	23
図2	西浦遺跡位置図	2	図29	E区Ⅲ層遺物実測図2	24
図3	高知西バイパス路線図	3	図30	E区Ⅳ層遺物実測図	25
図4	試掘調査位置図	4	図31	W区遺構配置図	26
図5	試掘トレンチ柱状図	4	図32	W区SB1遺構図	27
図6	いの町地形地質図	5	図33	W区SB2遺構図	27
図7	西浦遺跡周辺の遺跡地図	7	図34	W区SB4遺構図	28
図8	調査区位置図・グリッド設定図	9	図35	W区ピット出土遺物実測図	28
図9	E区調査区セクション図	10	図36	W区SK8～10遺構図	29
図10	E区遺構配置図	12	図37	W区SX1遺構図	29
図11	E区SB1遺構図	13	図38	W区Ⅰ層出土遺物実測図	30
図12	E区SB2遺構図	13	図39	W区Ⅲ層出土遺物実測図	30
図13	E区SB3遺構図	14	図40	W区Ⅳ層出土遺物実測図	31
図14	E区SB4遺構図	14	図41	表採遺物実測図1	33
図15	E区SB5遺構図	14	図42	表採遺物実測図2	34
図16	E区SAエレベーション図	15	図43	表採遺物実測図3	35
図17	E区ピット出土遺物実測図	16	図44	表採遺物実測図4	36
図18	E区SK1・5遺構図・遺物実測図	17	図45	表採遺物実測図5	37
図19	E区SK7遺構図・遺物実測図	18	図46	表採遺物実測図6	38
図20	E区SK9遺構図・遺物実測図	18	図47	表採遺物実測図7	39
図21	E区SK11・12遺構図・遺物実測図	19	図48	表採遺物実測図8	40
図22	E区SK16遺構図・遺物実測図	19	図49	表採遺物実測図9	41
図23	E区SK17遺構図・遺物実測図	20	図50	表採遺物実測図10	42
図24	E区SD1遺構図・遺物実測図	21	図51	表採遺物実測図11	43
図25	E区SD2・6遺構図・遺物実測図	21	図52	ガラス瓶実測図1	44
図26	E区SD4遺構図・遺物実測図	22	図53	ガラス瓶実測図2	45
図27	E区Ⅰ層遺物実測図	22	図54	田村遺跡群出土ガラス瓶遺物実測図	52

表目次

西浦遺跡出土ガラス瓶1	46	西浦遺跡出土ガラス瓶3	48
西浦遺跡出土ガラス瓶2	47		

遺構計測表目次

遺構計測表 1	E区SB	57	遺構計測表 12	E区SA5ピット	60
遺構計測表 2	E区SB1ピット	57	遺構計測表 13	E区SK	60
遺構計測表 3	E区SB2ピット	57	遺構計測表 14	E区SD	60
遺構計測表 4	E区SB3ピット	58	遺構計測表 15	W区SB	61
遺構計測表 5	E区SB4ピット	58	遺構計測表 16	W区SB1ピット	61
遺構計測表 6	E区SB5ピット	58	遺構計測表 17	W区SB2ピット	61
遺構計測表 7	E区SA	58	遺構計測表 18	W区SB3ピット	61
遺構計測表 8	E区SA1ピット	59	遺構計測表 19	W区SB4ピット	62
遺構計測表 9	E区SA2-a・bピット	59	遺構計測表 20	W区SK	62
遺構計測表 10	E区SA3ピット	59	遺構計測表 21	W区SD	62
遺構計測表 11	E区SA4ピット	59	遺構計測表 22	W区SX	62

遺物観察表目次

遺物観察表1～23	65	遺物観察表116～138	70
遺物観察表24～46	66	遺物観察表139～161	71
遺物観察表47～69	67	遺物観察表162～184	72
遺物観察表70～92	68	遺物観察表185～208	73
遺物観察表93～115	69		

図版目次

- 図版 1 西浦遺跡遠景(北西より)
図版 2 西浦遺跡全景(西より)
図版 3 E区調査前状態(南西より)
調査区設定状態(北東より)
図版 4 E区南部遺構検出状態(北東より)
E区北部遺構検出状態(南東より)
図版 5 E区遺構完掘状態(北東より)
E区遺構完掘状態(東より)
図版 6 E区調査区西壁セクション(南東より)
E区調査区北壁セクション(南より)
図版 7 E区P58土師質土器鍋(7)出土状態
E区P79陶器皿(10)出土状態
E区P93陶器播鉢(16)出土状態
E区P84土錘(17)出土状態
E区SK1青磁碗(20)出土状態
E区SK12銭貨他(29~33)出土状態
E区SK16刀子(35)出土状態
E区SK17磁器碗(37)出土状態
図版 8 E区Ⅲ層陶器皿(46)出土状態
E区Ⅲ-2層陶器碗(51)出土状態
E区Ⅳ層青磁碗(64)出土状態
E区SK5セクション(西より)
E区SK7セクション(北西より)
E区SK9セクション(南西より)
E区SD1セクション(南西より)
E区SD3セクション(南西より)
図版 9 W区調査前状態(北東より)
W区近現代遺物出土状態(南東より)
図版 10 W区遺構検出状態(北東より)
W区遺構検出状態(南東より)
図版 11 W区SB4検出状態(西より)
W区SB4完掘状態(西より)
図版 12 W区遺構完掘状態(南東より)
W区遺構完掘状態(北東より)
図版 13 W区P 41土師質土器杯(69)出土状態
図版 13 W区P 28土師質土器杯(73)出土状態
W区Ⅰ層鉄製品鏝(78)出土状態
W区Ⅲ層土師質土器皿(83)出土状態
W区Ⅲ層陶器播鉢(86)出土状態
W区Ⅳ層土師質土器杯(90)出土状態
W区SK8セクション(北東より)
W区SK9集石検出状態(東より)
図版 14 E区P21・45・98・108, SA2-P7土師
質土器(皿・小杯・杯)(内面)
E区P21・45・98・108, SA2-P7土師
質土器(皿・小杯・杯)(外面)
図版 15 E区P58・112土師質土器(羽釜・鍋)
E区P79陶器(皿)(内外面)
図版 16 E区P55・65・110陶器(皿)(内面)
E区P55・65・110陶器(皿)(外面)
図版 17 E区P38・89磁器(碗)(内面)
E区P38・89磁器(碗)(外面)
図版 18 E区SK1・5青磁(碗), 陶器(皿・碗), 磁
器(蓋)(内面)
E区SK1・5青磁(碗), 陶器(皿・碗), 磁
器(蓋)(外面)
図版 19 E区SK12陶器(皿), 土師質土器(皿),
石製品(砥石)(内・表面)
E区SK12陶器(皿), 土師質土器(皿),
石製品(砥石)(外・表面)
図版 20 E区SK12銅製品(毛抜き), 銭貨
E区SK16陶器(皿), 鉄製品(刀子), 銭
貨
図版 21 E区SD1・2・4土師質土器(杯), 瓦質土
器(鍋)(内面)
E区SD1・2・4土師質土器(杯), 瓦質土
器(鍋)(外面)
図版 22 E区Ⅰ層陶器(碗), 石製品(砥石)(内・表面)
E区Ⅰ層陶器(碗), 石製品(砥石)(外・裏面)
図版 23 E区Ⅲ層陶器(皿・碗)(内面)

- 図版 23 E区Ⅲ層 陶器(皿・碗)(外面)
- 図版 24 E区Ⅲ・Ⅲ-2層 陶器(皿・碗)(内面)
E区Ⅲ・Ⅲ-2層 陶器(皿・碗)(外面)
- 図版 25 E区Ⅲ・Ⅲ-2層 陶器(壺・播鉢), 磁器(大皿), 瓦質土器(焜炉)(内面)
E区Ⅲ・Ⅲ-2層 陶器(壺・播鉢), 磁器(大皿), 瓦質土器(焜炉)(外面)
- 図版 26 E区Ⅳ層 土師質土器(杯), 陶器(皿), 青磁(皿), 白磁(皿), 陶器(播鉢・水屋甕)(内面)
E区Ⅳ層 土師質土器(杯), 陶器(皿), 青磁(皿), 白磁(皿), 陶器(播鉢・水屋甕)(外面)
- 図版 27 W区P28・34・41, SB2-P4 土師質土器(杯)(内面)
W区P28・34・41, SB2-P4 土師質土器(杯)(外面)
- 図版 28 W区P30・55 土師質土器(鍋), 陶器(播鉢)(内面)
W区P30・55 土師質土器(鍋), 陶器(播鉢)(外面)
- 図版 29 E区Ⅰ・Ⅲ層, W区Ⅰ・Ⅲ層 錢貨
W区Ⅰ層 鉄製品(鏝), 銅製品(煙管)
- 図版 30 W区Ⅲ層 土師質土器(皿), 磁器(皿), 陶器(播鉢)(内面)
W区Ⅲ層 土師質土器(皿), 磁器(皿), 陶器(播鉢)(外面)
- 図版 31 W区Ⅳ層 土師質土器(皿・杯・羽釜), 青磁(皿), 瓦質土器(火鉢)(内面)
W区Ⅳ層 土師質土器(皿・杯・羽釜), 青磁(皿), 瓦質土器(火鉢)(外面)
- 図版 32 W区表採 磁器(猪口)
W区表採 磁器(段重)
- 図版 33 W区表採 磁器(碓子・開閉安全器)
W区表採 磁器(開閉安全器)(表・裏・内部)
- 図版 34 W区ガラス瓶 牛乳瓶
W区ガラス瓶 汽車茶瓶・蓋
- 図版 35 W区表採 陶器(菓子型)
E区P92・102 青磁(碗), 青花(碗)
E区P79 陶器(皿)
- 図版 35 E区P93 陶器(播鉢)(内外面)
E区P84, SB4-P7 土製品(土錘), 鉛玉
- 図版 36 E区P19 石製品(砥石)(表裏面)
E区SK7 石製品(砥石)(表裏面)
E区SK12 陶器(碗)(内外面)
E区SK17 磁器(碗)(内外面)
E区Ⅳ層 青磁(碗)(内外面)
W区Ⅰ層 瓦質土器(焜炉)(内外面)
W区Ⅰ層 瓦質土器(火鉢)
W区Ⅳ層 石製品(砥石)
- 図版 37 E区SK9 石製品(石臼)
E区Ⅰ層 石製品(砥石)
E区Ⅲ層 石製品(石臼)
E区Ⅲ層 石製品(石臼)
E区Ⅲ層 陶器(皿)
E区Ⅲ層 陶器(皿)
E区Ⅲ-2層 陶器(碗)
W区Ⅲ層 磁器(碗)
- 図版 38 W区表採 陶器(皿)
W区表採 陶器(皿)
W区表採 陶器(皿)
W区表採 陶器(皿)
W区表採 陶器(鉢)
W区表採 陶器(小碗)
W区表採 陶器(碗)
W区表採 陶器(碗)
- 図版 39 W区表採 陶器(碗)
W区表採 陶器(碗)
W区表採 陶器(行平鍋)
W区表採 陶器(片口鉢)
W区表採 陶器(爛德利)
W区表採 陶器(火鉢)
W区表採 陶器(盃)
W区表採 磁器(皿)
- 図版 40 W区表採 磁器(皿)(外面)
W区表採 磁器(大皿)
W区表採 磁器(碗)
W区表採 磁器(碗)

- 図版 40 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(碗)
- 図版 41 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(小碗)
 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(猪口)
 W区表採 磁器(猪口)
 W区表採 磁器(猪口)
 W区表採 磁器(猪口)
- 図版 42 W区表採 磁器(猪口)
 W区表採 磁器(猪口)
 W区表採 磁器(鉢)
 W区表採 磁器(鉢)
 W区表採 磁器(鉢)
 W区表採 磁器(小杯)
 W区表採 磁器(小杯)
 W区表採 磁器(小杯)
- 図版 43 W区表採 磁器(小杯)
 W区表採 磁器(小杯)
 W区表採 磁器(小杯)
 W区表採 磁器(小杯)
 W区表採 磁器(小杯)
 W区表採 磁器(小杯)
- 図版 43 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(碗)
- 図版 44 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(皿)
 W区表採 磁器(碗)
 W区表採 磁器(急須蓋・急須)
 W区表採 磁器(爛德利)
 W区表採 磁器(德利)
 W区表採 磁器(瓶)
- 図版 45 W区表採 磁器(仏飯器)
 W区表採 磁器(灯明皿)
 W区表採 軒丸瓦
 W区表採 軒瓦
 W区表採 磁器(小杯)
 W区表採 磁器(紅猪口)
 W区表採 陶器(火鉢蓋)
 W区表採 磁器(火鉢)
- 図版 46 E区Ⅲ・Ⅳ層 石製品(砥石), 青磁(碗),
 W区表採 陶器(皿・蓋), 磁器(皿・丸皿・
 小皿)
- 図版 47 W区表採 磁器(皿・角皿)
- 図版 48 W区表採 磁器(角皿・碗・蓋・段重蓋・皿)
- 図版 49 W区表採 軒瓦
- 図版 50 W区表採 軒瓦・平瓦, 磁器(盃・湯のみ・
 茶碗)

第 I 章 調査に至る契機と経過

1. 調査に至る契機

西浦遺跡の所在するいの町は、県中央部に位置し、東側は県都である高知市に接する。平成 16 年(2004)10月に吾川郡伊野町、吾北村、土佐郡本川村が合併して現在のいの町になった。町の南部に位置する中心部には、鉄道に並行して東西に国道33号が通っており、仁淀川橋のたもとで吾北、本川、愛媛県西条市方面に向かう国道194号と分岐する。これらの国道は、高知県西部の主要道であるため、いの町は近郊からの交通の要衝となり、中心部は慢性的な道路渋滞となっている。これらの交通渋滞緩和及び路面冠水の解消、交通安全確保を目的として、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所により高知西バイパスの計画が図られた。高知西バイパスは、高知市鴨部よりいの町波川までの総延長9.8kmの区間で計画されており、I期工事として高知市鴨部よりいの町枝川までの区間は平成9年度に開通した。いの町枝川から波川区間についてはII期工事とし、地域高規格道路・高知松山自動車道の一部としての事業が進められてきた。いの町内では平成18年度から高知西バイパス建設工事が進められている。路線は、いの町中心部の南部丘陵地を現国道33号に並行して西に進み、仁淀川に架橋して対岸の鎌田地区に渡り、波川、日高村方面に向けてバイパスが建設される計画である。

いの町は、仁淀川及び、その支流沿いに遺跡の分布密度が高く、バーガ森北斜面遺跡や天神溝田遺跡などに代表される弥生時代から中・近世にかけての周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く立地する。今回の工事計画は仁淀川の支流である宇治川沿い、及び南部丘陵地であることから国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会による協議が行われ、計画路線内及び周辺部に埋蔵文化財包蔵地が立地する区域については、事前に試掘調査を実施した。それらの調査結果を元に発掘調査が必要な場所、範囲についての協議が行われた。



図1 いの町位置図

2. 試掘調査の概要



図2 西浦遺跡位置図

西浦遺跡については、平成 21 年度に高知県教育委員会により試掘調査が実施された。その結果、調査対象地の西側は、昭和 40 年代の宅地化に伴う開発により丘陵部が削平されており、遺構は確認されなかった。一方、東側の谷部では、中世の遺構と、土師質土器・陶磁器を含んだ包含層が確認され、中世の遺跡の存在が明らかとなり、周知の遺跡包蔵地として登録された。

これらの経緯を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と、いの町、高知県教育委員会による協議が行われ、工事計画区域内の谷部を中心に記録保存を目的とした発掘調査を平成 23 年 4 月 25 日から同年 8 月 9 日にかけて実施することとなった。

2. 試掘調査の概要

西浦遺跡の試掘調査は、平成 21 年 9 月 14 日から 18 日に高知県教育委員会により実施された。調査対象地の現況は、宅地及び一部が山林であり、標高 18.1～20.6m を測る丘陵部と谷部を対象に 2×2m、2×3m の試掘トレンチ (TR1～6) を 6 箇所を設定して試掘を行った。その結果、TR3～6 を設定した調査対象地の西部は、丘陵を削平して造られた平坦部である事が判明した。一方、東側の谷部に設定した TR1・2 においては中世の遺構と遺物包含層を確認した。現況は宅地跡であり、丘陵側から谷部に向かって地山を削り土地造成を行い、一部は建物の基礎により影響を受けていた。

基本層序は暗褐色細砂、淡褐灰色細砂の堆積で、中近世の遺物を包含する。Ⅲ層が黄灰色細砂で、砂層の地山であり、これ以下は細砂、砂礫が堆積している。地表下 20～50cm にかけてⅠ・Ⅱ層は淡灰色から褐色を呈する細砂層の堆積が認められ、土師質土器片、近世の陶磁器片など中近世の遺物が出土し、Ⅱ層下でピット、土坑の一部を検出した。

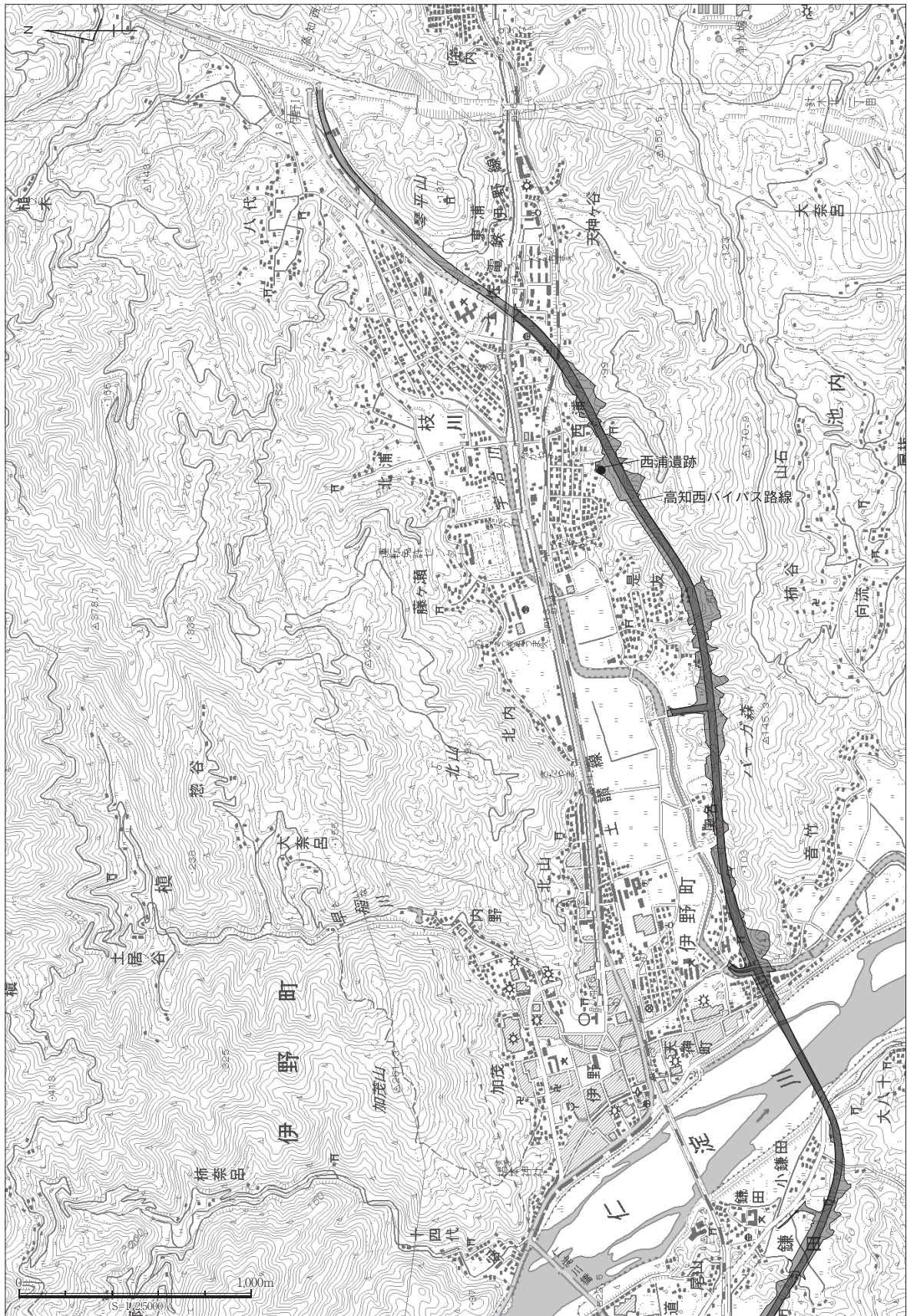


図3 高知西バイパス路線図

2. 試掘調査の概要



図4 試掘調査位置図

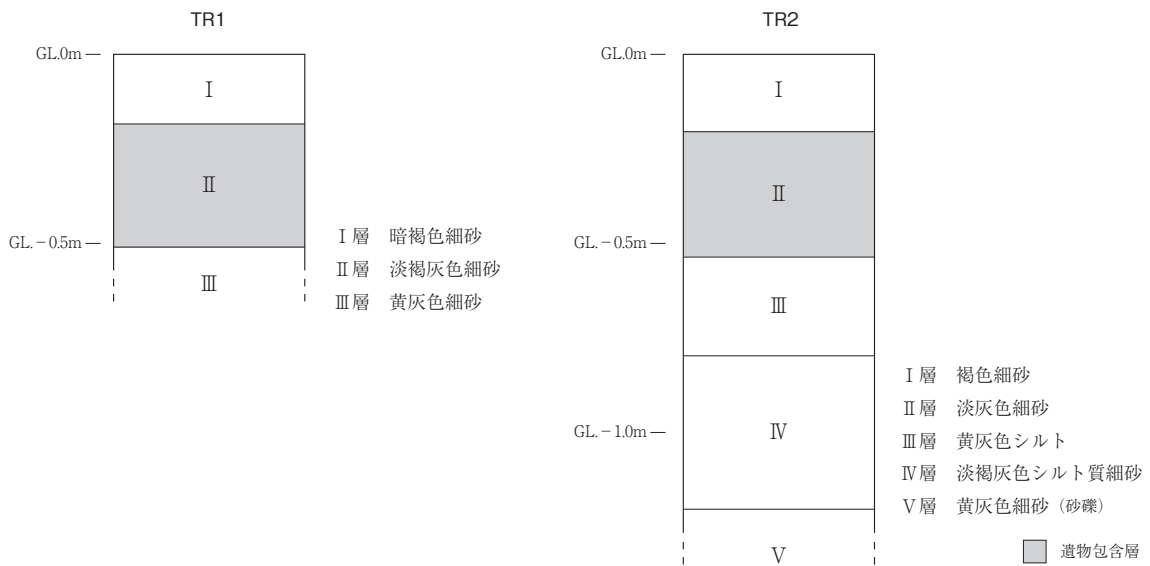


図5 試掘トレンチ柱状図

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

西浦遺跡の所在する高知県吾川郡いの町は、高知県の中央部に位置する。いの町を流れる仁淀川の流域は、愛媛県中央山岳部から高知県中部にまたがり、高知県土佐市、愛媛県久万高原町をはじめとする3市6町1村で構成される。仁淀川源流を含む上流域は、石鎚山をはじめとする急峻な山地で、中流域は、越知町等でわずかに平地が開けるほかは、山地で形成される。いの町北部に立地する本川地区は愛媛県との県境に位置し、標高1,000m前後の山岳地で、西日本最高峰の石鎚山から連なる高山を有し、吉野川の源流域にあたる。

いの町南部には古生層からなる丘陵と、東西方向の標高15～20mの沖積層の低地がある。南部の仁淀川下流域では、東西から合流する日下川・宇治川・波介川等の支流沿いや、旧河道沿等に細長く高岡、弘岡平野の沖積地が形成され、土佐市・いの町等の主要な市街地が位置する。これら支流の河床勾配は極めて緩く、支流の平野は、仁淀川の本流から離れるにしたがい地盤が低くなる地形であるため、古くから氾濫による水害に悩まされてきた地域である。下流に形成される平野は、その標高が仁淀川の洪水位より低く、さらに、仁淀川から離れるほど地盤が低いため、影響を受けやすく内水氾濫が多発している。

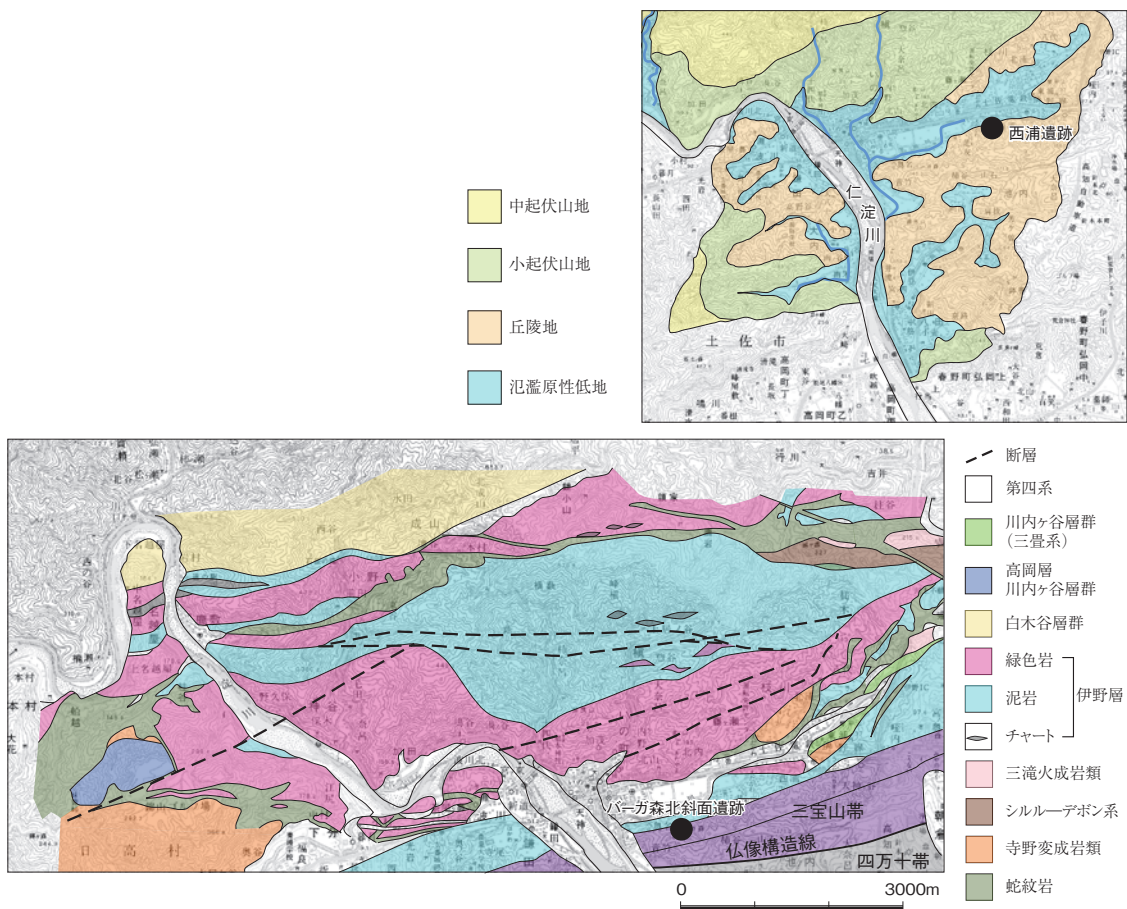


図6 いの町地形地質図

2. 歴史的環境－西浦遺跡周辺の遺跡－

当地域の地質は大きく秩父累帯に属し、北から秩父亜帯、黒瀬川亜帯、三宝山亜帯に三分される。北部は一部が仁淀ユニットと呼ばれる岩層に属し、先白亜系の砂岩・泥岩の互層からなり、泥岩部にはチャート・石灰岩・緑色岩の岩塊が含まれる。南部は黒瀬川構造帯と呼ばれるシルルーデボン紀の古期岩類からなるレンズ状の岩帯である。この地域の黒瀬川構造体は東西方向に細長く帯状にみられることから大きく四帯に分けられている。いの町南部の中心部は、黒瀬川構造体の一部を構成する伊野層があり、岩層は緑色岩・泥質岩からなり、チャート・石灰岩が含まれる。仁淀川断層を南限に仏像構造線までの間は三宝山亜帯と呼ばれ、チャート・泥岩・砂岩で構成される斗賀野層と、石灰岩・チャート・凝灰岩・砂岩・泥岩が含まれる三宝山層の付加帯にあたる。いの町南端部の八田地区は秩父累帯の南端に位置し、仏像構造線に接する。今回報告する西浦遺跡は黒瀬川構造体の一部である伊野層の地質帯に位置し、地山は泥岩・緑色岩である。

2. 歴史的環境－西浦遺跡周辺の遺跡－

西浦遺跡が所在する平野部には縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が分布する。これらの遺跡は、宇治川を中心とした自然堤防上及び丘陵に立地する。

縄文時代の遺跡としては、宇治川下流域に奥名遺跡が挙げられる。昭和54年(1979)に行われた宇治川改修工事の際に縄文時代中期中葉の船元ⅢA式土器、後期中葉の津雲A式が発見された。弥生時代ではこの奥名遺跡の南丘陵上には弥生時代の高地性集落であるバーガ森北斜面遺跡が広がる。平成9・10年度及び平成22・23年度に高知西バイパス建設工事、及び町道建設工事等に伴い発掘調査が行われている。奥名遺跡の背後丘陵上には岩神地点、東側の丘陵上には三世庵地点がありそれぞれの地点で弥生時代中期末を中心とした竪穴建物跡や土坑が検出された。岩神地点では炭化米も出土した。

大デキ遺跡では弥生時代中期中葉に位置付けられる甕型土器の口縁部や石斧など、さらに東へ500mほど宇治川を遡ったサジキ遺跡では同時期の土器片と石包丁が採取されており、宇治川右岸の平野部、及び左岸丘陵上に弥生時代中期頃には集落の広がりがみられる。

宇治川下流域に目を向けると昭和36年(1961)の宇治川改修工事の際に弥生時代の中細形銅剣と中広形銅戈(いずれも県指定文化財)が天神溝田遺跡で発見された。河川工事掘削中に河川に近い畑地の地下2.5～3.0mで偶然出土した。銅剣の出土状況の詳細は不明であるが身は斜めになって埋没していたとされている。さらにそこから、5mほど離れた地点で銅戈も出土した。

天神溝田遺跡については、高知西バイパス建設工事及びいの町道建設に伴う発掘調査が平成18年度から実施され、弥生時代後期から江戸時代にかけての遺構と遺物が確認されている。(詳細は高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集『天神溝田遺跡Ⅰ』2010.2 同139集『天神溝田遺跡Ⅱ』2014.3)この調査では弥生時代後期前半の土坑と、後期後半の土器溜まりを検出したが、上で述べた銅剣・銅戈の時期を示す遺構と遺物は確認されなかった。出土した土器は従来「天神式土器」と呼ばれるこの地域の弥生時代後期後半の指標土器であり、この頃には周辺部に集落が開けていたものと思われる。また、遺跡の東端では一段階古い弥生時代後期前半代の土器が土坑から一括して出土している。宇治川を挟み天神溝田遺跡の対岸には塔の向遺跡が立地する。弥生時代後期と古代の土器片が採取されており、これらの土器は天神溝田遺跡と同時期のものであることから集落の広がりが確認できた。

古墳時代では西浦遺跡の立地する枝川地区において、古墳時代後期の枝川1～3号墳が確認され

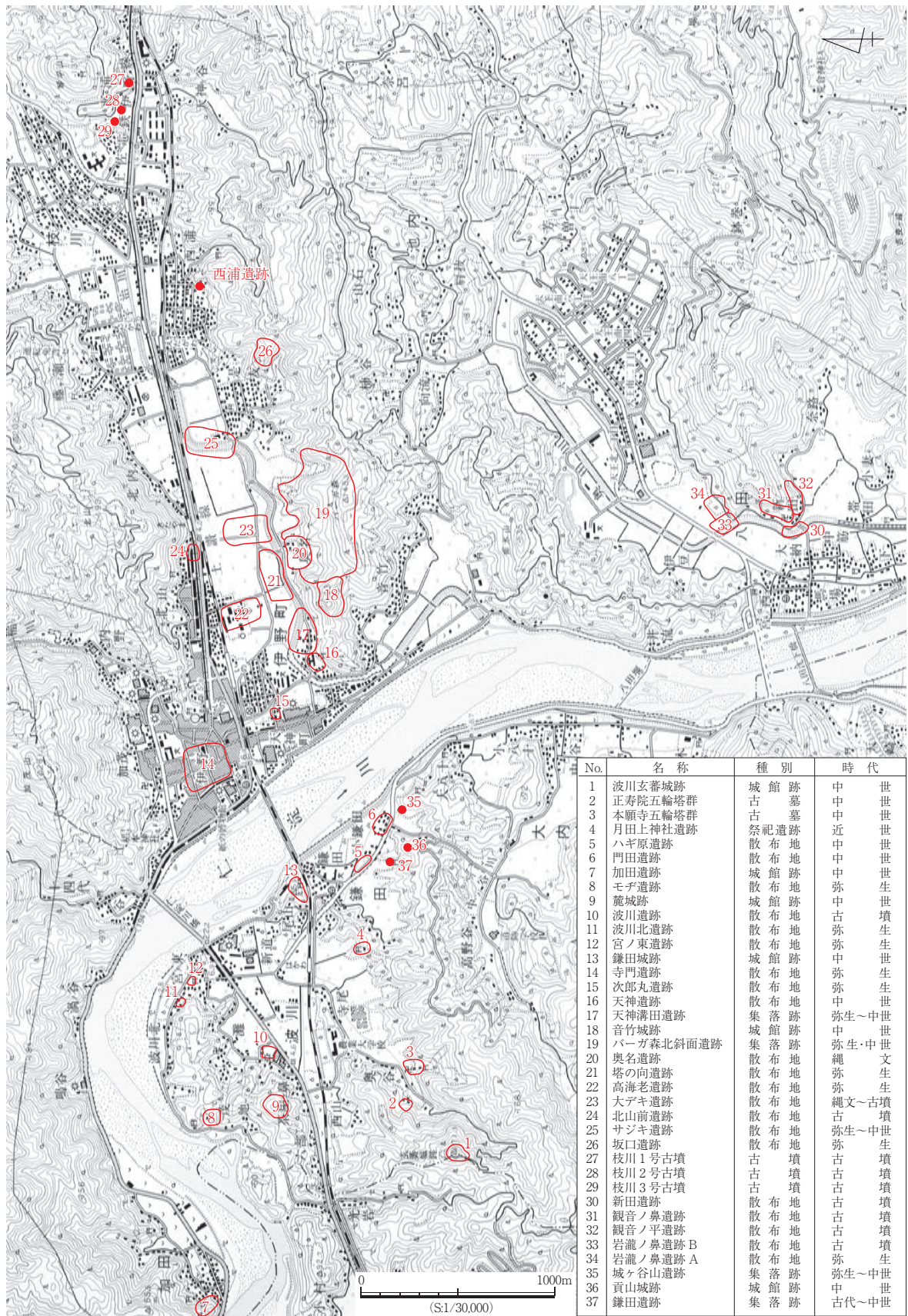


図7 西浦遺跡周辺の遺跡地図

2. 歴史的環境－西浦遺跡周辺の遺跡－

ている。3基とも円墳であり、いずれも横穴式石室を持つ。枝川1号墳については昭和41年(1966)に発掘調査が行われ、石室の中から須恵器・玉類・ガラス製小環・銀環・鉄刀子・大刀鞘(たちざや)といった副葬品が出土した。枝川1号墳と石室からの出土品は、いの町指定文化財となっている。

古代・中世では前述した天神溝田遺跡において、古代の遺構と遺物が同町内で初めて確認され銅製の鍔帯金具や、鉄器製作を窺わせる鉄滓、鍛冶関連遺構も確認された。これらの古代の遺構・遺物は主に8世紀後半から9世紀前半、9世紀末から10世紀の奈良・平安時代を中心とする。また、中世では完形の備前焼壺の中に土師質土器皿20枚、銭貨393枚を納め壺の口の部分を和鏡で蓋をするように置いた埋納遺構が検出された。さらに、壺内部を精査した結果、アワ類の種子も入っており、何らかの祭祀を行った後に埋納されたものと考えられる。埋納の時期は備前焼甕の形態から16世紀前半と推定されている。その他、検出された遺構の中心は南北朝期から室町時代であり、14～16世紀前半代の掘立柱建物跡や、土坑、溝跡を検出している。また、高知西バイパス建設に伴い、平成24年度に発掘調査が行われた天神溝田遺跡、奥名遺跡では、古代(9世紀末から10世紀)・中世(13～15世紀)を中心とする遺構・遺物が確認されている。『長宗我部地検帳』によると奥名遺跡では「ラクノ庵」、「別府寺」など寺院に関連するホノギの記載がみられ、東側の「ショウブ谷」、「三世庵」に至るまで寺院に関連する施設があった可能性も窺える。また、天神溝田遺跡から奥名遺跡の南背後にある丘陵上には音竹城跡が立地しており、現状では堀切や平場など中世の山城としての遺構が良く残っている。天神溝田遺跡・奥名遺跡は音竹城跡にも関連する遺跡として捉えることができる。

近世では天神溝田遺跡で17世紀前半代と、18世紀後半から19世紀代を中心とする掘立柱建物跡や土坑、これらの屋敷を囲む溝が検出された。遺物は瀬戸や唐津産などの搬入品と地元の尾戸窯など在地の製品が出土した。

参考文献

『地域地質研究報告』『伊野地域の地質』 脇田浩二他 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター (2007)

『伊野町史』 伊野町(1973)

『天神溝田遺跡Ⅱ』 高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第139集 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター (2014)

第三章 調査成果

1. 調査区の概要と調査方法

(1) 調査区の概要

調査地点は、標高 16.0～18.0m を測る谷部に開けた宅地跡である。東側は標高 18.0m 前後を測り、西側は石垣で造成されていた。宅地の南側は溝を境に畑として利用されていたが、現況は竹林であった。この西側も道路と側溝をはさみ標高 16.0m を測る宅地であり、東側及び北側は石垣で造成されている。建物があった場所は基礎にコンクリートが使用されていた。また、宅地の北東には総柱の礎石と床を三和土で固めた跡が確認され、蔵が建っていたものと思われる。宅地の南西側は谷部で小川があり、井堰を設け谷水を利用していたものと思われる跡が残っていた。



図8 調査区位置図・グリッド設定図

2. 基本層序

(2) 調査方法

道路と溝を境に東側の宅地部分をE区、西側をW区と呼称し調査区を設定した。発掘調査前に調査対象地内全域の伐採を行い現況の地形測量を実施した。その後方位に応じてローマ数字、アラビア数字を付し各調査区の設定を行った。調査にあたっては、公共座標(世界測地系)を使用し、調査対象地を含む100m四方に20mの中グリッド、4mの小グリッドを設け、包含層の遺物の取り上げ等には調査グリッド名を使用した。

発掘調査は、平成23年4月25日から準備を開始し、調査対象地内の樹木伐採終了後に調査区を設定した。その後、平面的な発掘を重機(小型バックホー)及び人力により行った。廃土については、調査対象地西側の用地内に仮置きするため小型キャリアを使用した。遺構完掘後はラジコンヘリコプターによる遺構全体の完掘状況写真撮影及び写真測量を委託し、記録保存を図った。また、調査終了後は調査成果について記者発表及び現地説明会を実施した。

2. 基本層序

(1) E区

E区の現況は宅地跡であり、現地地表下0.5mまで宅地化に伴う整地土が認められた。以下、旧耕作土、床土が認められ、旧耕作土中から近世(江戸後期)の陶磁器片が出土した。調査区西壁際では、旧耕作土下に谷状の落ち込みに堆積した黒褐色土(Ⅳ-1・2層)が認められ、青磁や土師質土器供膳具、備前焼などの中世(14世紀後半から15世紀)の遺物が出土した。

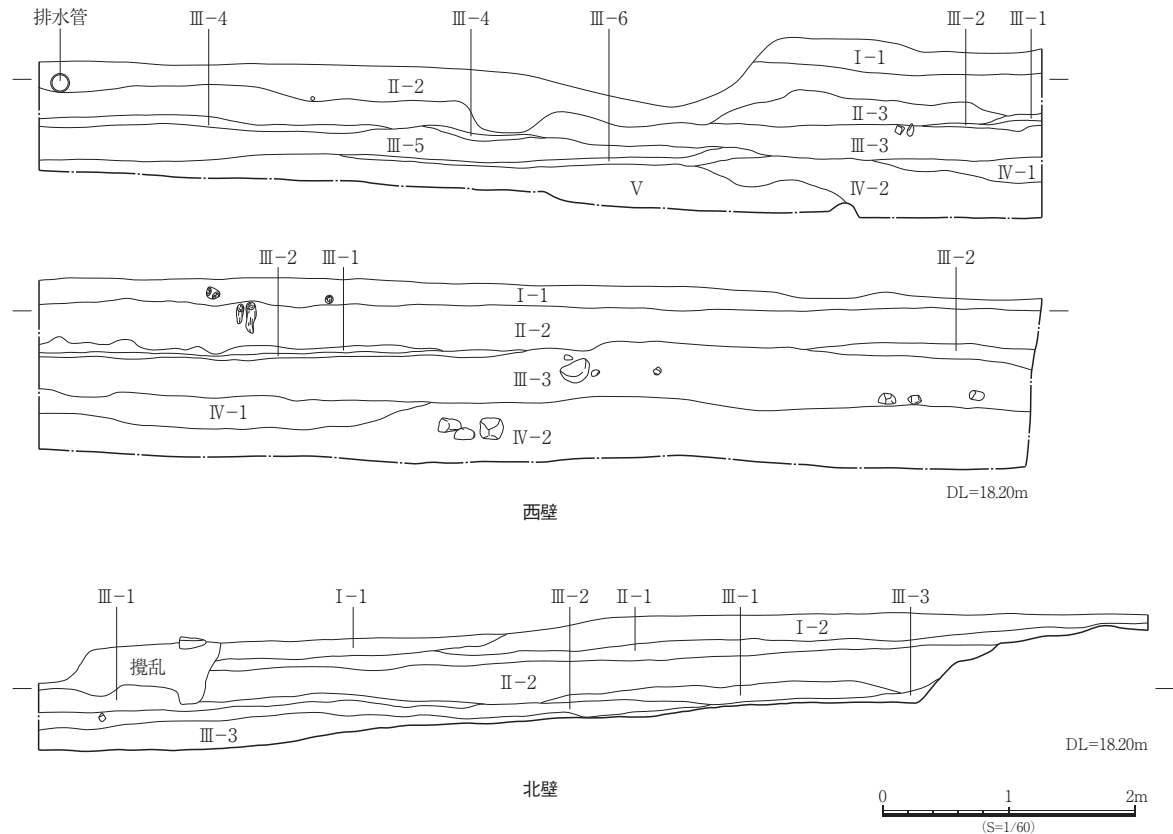


図9 E区調査区セクション図

E区の基本層序

I層：表土(宅地整地土)

I-1：褐灰色(7.5YR4/1)砂質シルト

I-2：褐灰色(7.5YR4/1)シルト礫(φ 3.0～5.0cmの角礫)

II層：整地土

II-1：明黄褐色(2.5Y6/8)シルト質粘土(φ 1.0cm礫混)

II-2：黒褐色(2.5Y3/1)礫(φ 3.0～4.0cm, 15.0～20.0cmの岩盤掘削土)

II-3：褐灰色(10YR4/1)シルト(φ 0.8～1.5cm礫混)

III層：旧耕作土

III-1：灰黄褐色(10YR4/2)シルト(旧耕作土1)

III-2：褐色(10YR4/6)シルト質粘土(旧耕作土1床土)

III-3：褐灰色(10YR4/1)シルト(旧耕作土2)

III-4：灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト(明黄褐色(2.5Y6/8)礫混 旧耕作土2床土)

III-5：黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト(φ 0.8～1.2cm礫混 旧耕作土3)

III-6：オリーブ黄色(5Y6/4)粘土(旧耕作土3床土)

IV層：中世遺物包含層

IV-1：黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルト(φ 3.0～4.0cm風化礫混)

IV-2：黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土

V層：灰色(5Y4/1)粘土(φ 3.0～5.0mm・1.0～3.0cm礫混 地山)

(2) W区

W区の現況は宅地跡であり、昭和30年代の大規模な宅地化に伴って南部の山肌は削られていた。調査区南部は削平された岩盤と、昭和初期のものと思われる建物基礎を検出した。調査区中央部から北部にかけては旧状の宅地造成が行われており、石垣で囲まれた範囲は山を削った岩盤掘削土による盛土であった。この宅地は明治末期から昭和初期頃にかけて造成したものであり、表土では近現代の陶磁器や瓦片が出土した。II・III層は中・近世の遺物包含層である。IV層は黒褐色シルト質粘土で、E区のIV層と同じく中世の遺物包含層である。このIV層はW区南西部の谷部にしか堆積が認められなかった。

W区の基本層序

I層：褐色(10YR4/4)砂質シルト

II層：褐灰色(10YR5/1)砂質シルト(φ 0.5～1.5cm礫混)

III層：褐灰色(10YR4/1)シルト(φ 0.5～1.5cm礫混)

IV層：黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土

V層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土

3. 検出遺構と出土遺物

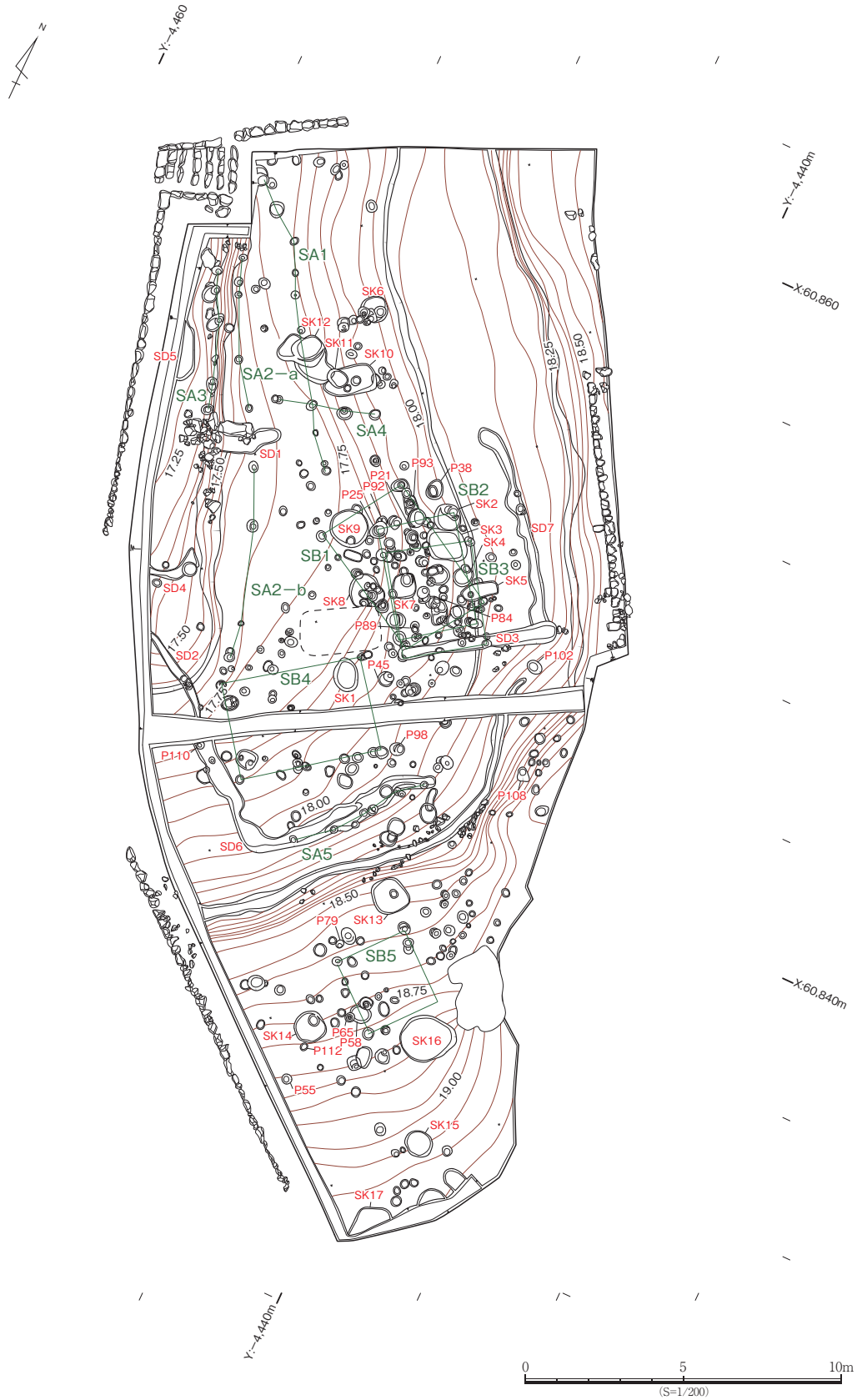


図10 E区遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

(1) E区

E区は、調査対象地内の道路より東部に設定した調査区である。本調査区では、掘立柱建物跡5棟、柵列5列、ピット159個、土坑17基、溝跡7条を検出し、遺構については調査区ごとに番号を付した。ここから、特徴的なものについて抽出し、それらの遺構から出土した遺物について遺構図と併せて図示する。包含層から出土した遺物については層順に掲載する。

①掘立柱建物跡

SB1 (図11)

調査区中央部で検出した桁行2間、梁行2間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN - 61° - W、検出標高は東側18.10m、西側17.90m前後を測る。規模は桁行4.53m、梁行3.00m、床面積は13.59㎡である。柱穴は径が0.19～0.57mを測る円形・楕円形であり、約半数が径0.10～0.15mの柱痕を持つ。建物東側は桁行方向の柱間距離の違いから、東側とは異なった性格の空間用途が推察される。埋土は、暗褐色シルトと褐灰色シルトである。P5から土師質土器の底部片が1点出土したが、その他のピットから遺物は出土しなかった。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

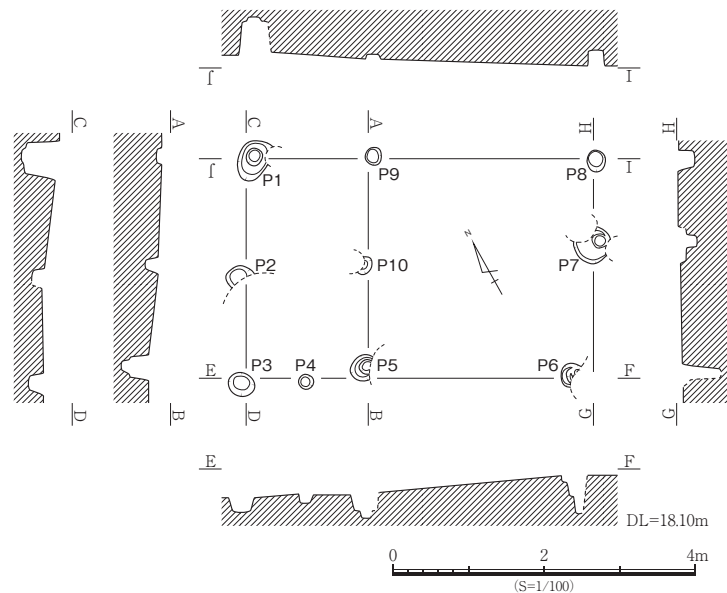


図11 E区SB1遺構図

SB2 (図12)

SB1と同じく調査区中央部で検出した桁行2間、梁行2間の南北棟側柱建物跡である。棟方位はN - 37° - W、検出標高は東側18.10m、西側17.93m前後を測る。規模は桁行3.61m、梁行2.49m、床面積は8.99㎡である。柱穴は径が0.20～0.90mを測る円形・楕円形であり、径0.09～0.23mの柱痕を持つ。南端の柱列は桁行方向の中間距離から、庇等を支える構造体が推察される。埋土は、暗褐色シルトと褐色シルト、褐灰色シルトである。P2・3・5から礎板石として使用されたと思われる平滑な石を検出した。遺物は、P1から土師質土器片1点、P3から土師質土器片7点、P4から土師質土器片1点、P5から瓦質土器片1点、P6から土師質土器皿片2点と杯片2点、P9から土師質土器鍋片1点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

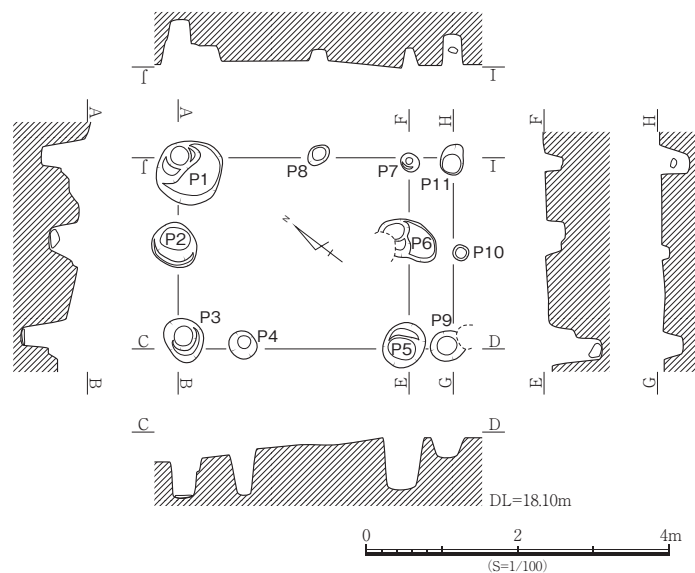


図12 E区SB2遺構図

SB1と同じく調査区中央部で検出した桁行2間、梁行2間の南北棟側柱建物跡である。棟方位はN - 37° - W、検出標高は東側18.10m、西側17.93m前後を測る。規模は桁行3.61m、梁行2.49m、床面積は8.99㎡である。柱穴は径が0.20～0.90mを測る円形・楕円形であり、径0.09～0.23mの柱痕を持つ。南端の柱列は桁行方向の中間距離から、庇等を支える構造体が推察される。埋土は、暗褐色シルトと褐色シルト、褐灰色シルトである。P2・3・5から礎板石として使用されたと思われる平滑な石を検出した。遺物は、P1から土師質土器片1点、P3から土師質土器片7点、P4から土師質土器片1点、P5から瓦質土器片1点、P6から土師質土器皿片2点と杯片2点、P9から土師質土器鍋片1点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

3. 検出遺構と出土遺物

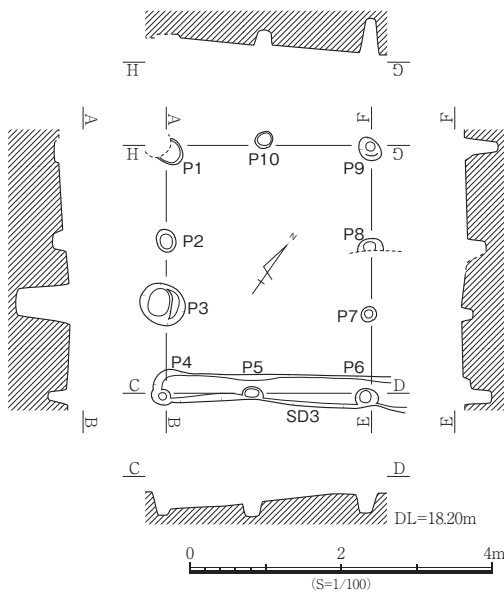


図13 E区SB3遺構図

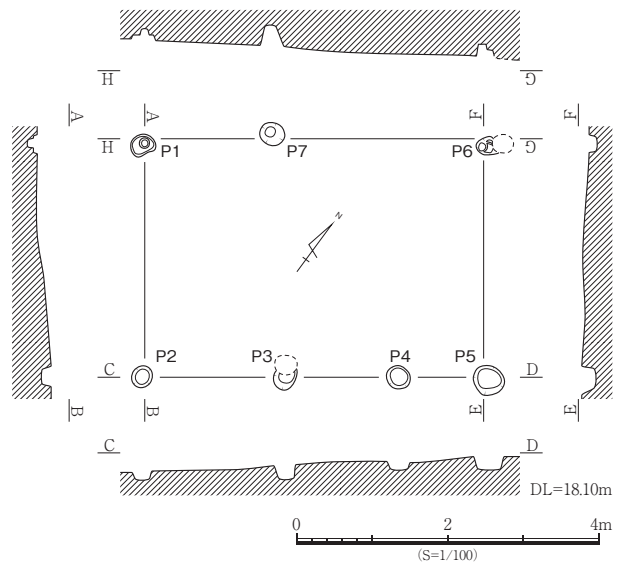


図14 E区SB4遺構図

SB3 (図13)

SB1・2と同じく調査区中央部で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟側柱建物跡である。棟方位はN-35°-W、検出標高は東側18.10m、西側18.00m前後を測る。規模は桁行3.33m、梁行2.69m、床面積は8.96㎡である。柱穴は径が0.17~0.62mを測る円形・楕円形であり、P9は径0.12mの柱痕を持つ。南端の柱列は梁行方向に平行するSD3に切られる。埋土は、暗褐色シルトと褐色シルトで、P3から瓦質土器片1点、P9から白磁皿1点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

SB4 (図14)

SB1~3よりやや西で検出した桁行2間、梁行1間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-54°-E、検出標高は東側18.00m、西側17.60m前後を測る。規模は桁行4.74m、梁行3.12m、床面積は14.79㎡である。柱穴は径が0.24~0.42mを測る円形・楕円形であり、径0.09m~0.14mの柱痕を持つ。埋土は褐灰色シルトで、P4から近世陶器片1点、P7から鉛玉1点(18)が出土した。近世の掘立柱建物跡と考えられる。

SB5 (図15)

調査区南よりの谷部で検出した桁行1間、梁行1間の側柱建物跡である。棟方位はN-50°-W、検出標高は18.70m前後を測る。規模は桁行2.50m、梁行2.38m、床面積は5.95㎡である。柱穴は0.28~0.43mを測る円形であり、径0.11m~0.14mの柱痕を持つ。東側の隅柱は検出できなかったが、全てのピットで10cm前後の角礫が検出された。P1から土師質土器片6点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

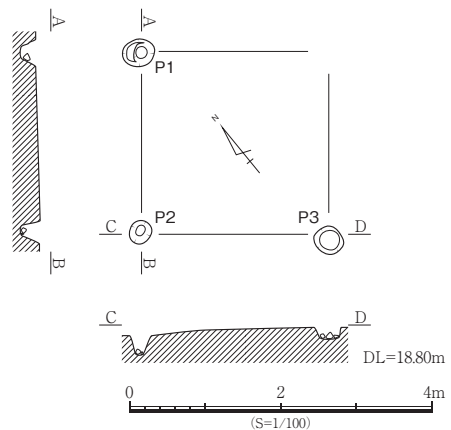


図15 E区SB5遺構図

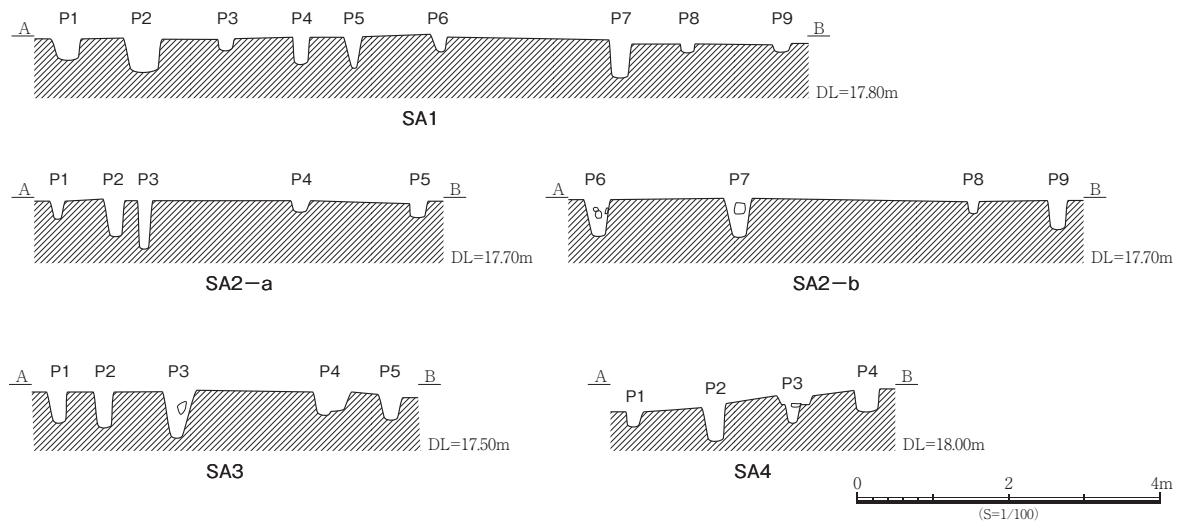


図16 E区SAエレベーション図

②柵列

SA1 (図16)

調査区北端から南に延びる全長 9.47m の柵列である。主軸方向は $N - 35 \sim 51^\circ - W$ 、検出標高は 17.70m 前後を測る。柱間距離は 0.68 ~ 2.38m、柱穴は径が 0.16 ~ 0.52m を測る円形・楕円形である。現代の敷地境界や道路と平行することから、地境界の柵列であると考えられる。P2 から土師質土器片 3 点、P5 から土師質土器片 1 点が出土した。

SA2 (図16)

SA1 と同じく調査区北端から南に延びる柵列である。SD1 に分断される北側 4.78m を SA2 - a、南側 6.12m を SA2 - b とした。主軸方向は $N - 16 \sim 35^\circ - W$ 、検出標高は北側 17.60m、南側 17.70m 前後を測る。柱間距離は 0.40 ~ 3.12m、柱穴は径が 0.16 ~ 0.39m を測る円形・楕円形である。P6・7 で 5 ~ 20cm の角礫を確認した。SA1 と同様に、地境界の柵列であると考えられる。P7 から図示した土師質土器皿(4) 1 点、細片 3 点が出土した。

SA3 (図16)

並行して延びる SA1・2 と関連する柵列と考えられる。SA2 より一段低い標高 17.30m 前後で検出した。総長 4.43m、柱間距離は 0.63 ~ 2.00m、柱穴は径が 0.26 ~ 0.63m を測る楕円形である。P3 から礎板石と思われる角礫を検出したが、埋土中から遺物は出土しなかった。

SA4 (図16)

他の柵列とはほぼ直交する主軸方向を持つ総長 3.13m の柵列である。検出標高は西側 17.60m、東側 17.90m を測る。柱間距離は 1.00 ~ 1.08m、柱穴は径が 0.22 ~ 0.48m の円形・楕円形である。次に述べる SK10 ~ 12 に隣接し、これらと関連する遺構であると推察される。埋土中から遺物は出土しなかった。

③掘立柱建物跡及びピット出土遺物(図17 1~19)

E区のパットから出土した遺物のうち、1 ~ 19 を抽出し、図示した。1 ~ 7 は土師質土器である。1 は皿で、内外面とも回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りによる。2 は小杯、3 ~ 5 は杯の底部で、いずれも回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りによる。4 の外面底部にはタール痕がみられる。6 は播磨型羽釜の口縁部である。口縁部直下に退化した鍔がやや上向きに付き、外面胴部下位にタタキ目

3. 検出遺構と出土遺物

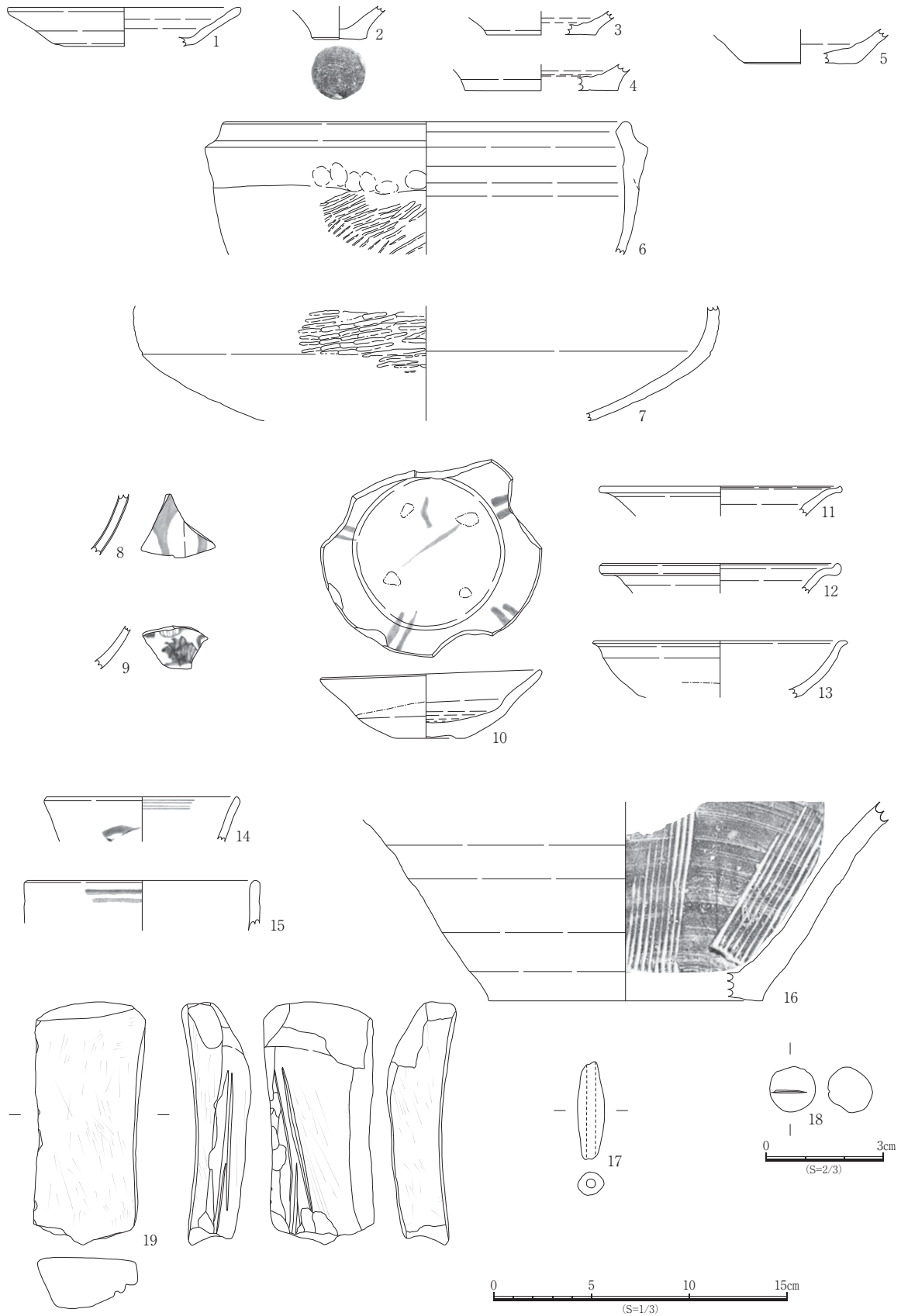


図17 E区ピット出土遺物実測図

が残る。7は鍋である。外面上半にタタキ目、内面はナデ調整が施される。胴部下半に煤が付着する。

8は龍泉窯系の青磁碗で、外面に鎬蓮弁文が施される。9は青花碗で、外面にくずれた牡丹文が描かれる。10～13は陶器の皿で、10・11は唐津産である。10の高台内はケズリ、内湾気味に立ち上がり体部中位から口縁部にかけて外反気味に開く。内面全体から口縁部外面まで黄釉が施され、口縁部と見込みの一部に襷文が鉄釉により施される。11は口縁端部を上方に摘みナデ調整、全体的に鉄釉が薄く施される。12は口縁端部を上方に折り曲げ、全体的に薄い灰釉が施される。13の体部は内湾気味に立ちあがり、口縁は外方に摘み出す。外面体部下半は露胎する。

14・15は磁器碗である。14の内面には四条の圈線が巡る。15は筒形碗で外面に二条の圈線が巡る。

16は陶器の摺鉢で、九条一単位の摺目が施される。17は管状土錘で、円孔は直径5mmである。18は鉛玉である。19は細粒花崗岩製の砥石である。四面を使用し、表面は仕上砥で弧状にすり減る。裏面は矢柄研磨器状に深い溝が残る。

④土坑

SK1 (図18 20)

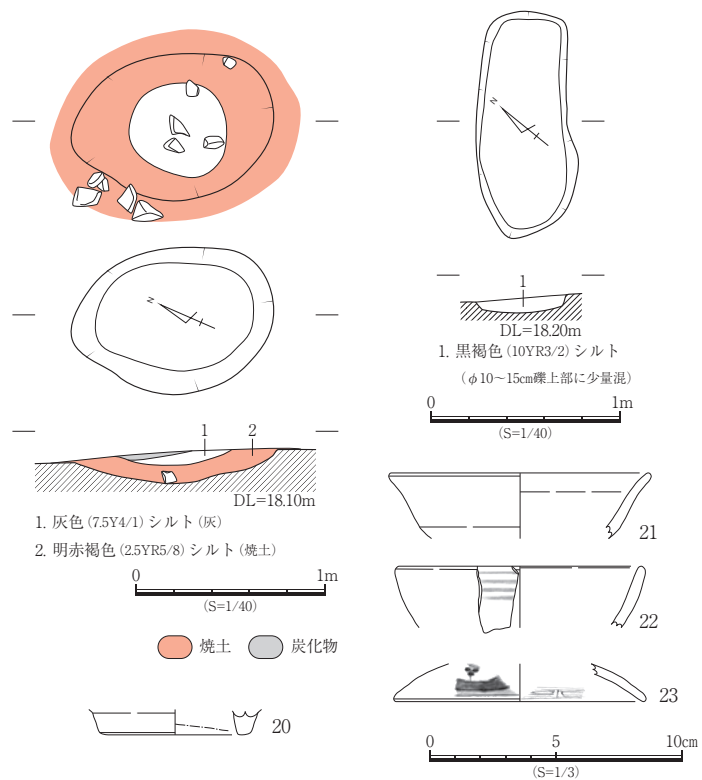
調査区中央部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し主軸方向はN - 32° - Wを示す。長径0.26m, 短径0.18m, 深さ0.20mを測る。断面形は皿状で、埋土上層に灰色シルト, 土坑周辺と下層に焼土が認められた。埋土中から図示した青磁碗の底部片(20)が出土した。20は高台内の一部まで施釉される。

SK5 (図18 21～23)

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は溝状の楕円形を呈し、主軸方向N - 51° - Eを示す。長径1.21m, 短径0.47m, 深さ0.02～0.09mを測る。断面形は浅い皿状で、埋土は黒褐色シルトである。埋土中からは21～23の陶磁器が出土した。21は皿で、全体に鉄釉が施される。22は陶器の丸碗で全体的に灰釉が施され、口縁部外面に圈線状に釉が溜まる。23は能茶山窯の磁器蓋で、外面に梅文、内面に雷文帯が濃い呉須によって描かれる。

SK7 (図19 24)

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向はN - 28° - Wを示す。長径0.78m, 短径0.76m, 深さ0.12～0.16mを測る。断面形は逆台形状で、埋土は暗灰黄色砂質シルトである。床面より径0.40m,



SK1

SK5

図18 E区SK1・5遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

深さ 0.36m のピットを検出した。埋土からは近世陶磁器片 1 点と、図示した砥石 (24) が出土した。24 は流紋岩製の仕上砥である。

SK9 (図20 25)

調査区中央部で検出した遺構である。平面形は円形を呈し、主軸方向は N - 71° - E を示す。長径 1.20m, 短径 1.18m, 深さ 0.18m を測り、断面形は皿状である。埋土は明黄褐色シルトとオリブ褐色シルトで、上層で 4 ~ 20cm, 50cm 前後の角礫を検出した。埋土から土師質土器片 1 点と、図示した石臼 (25) が出土した。

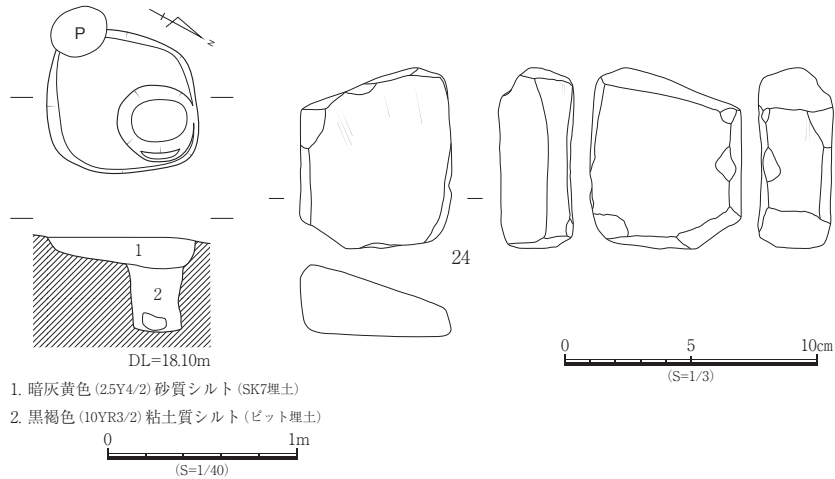


図19 E区SK7遺構図・遺物実測図

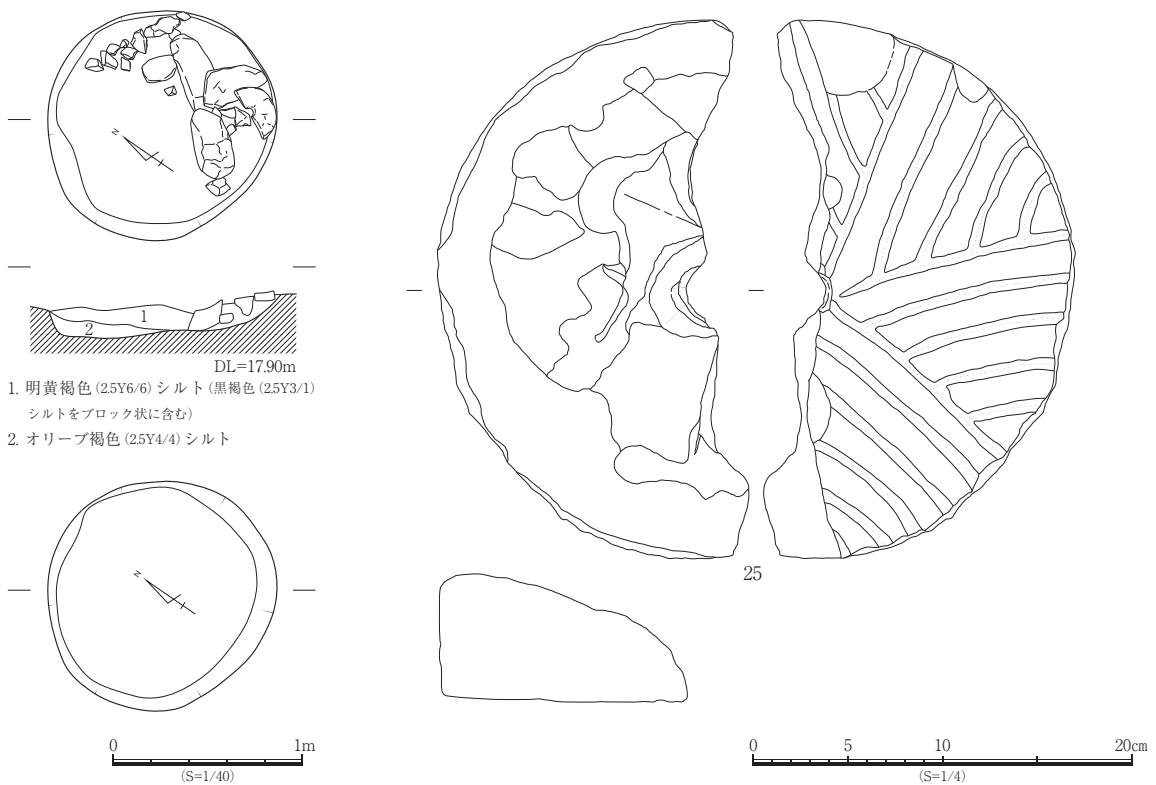


図20 E区SK9遺構図・遺物実測図

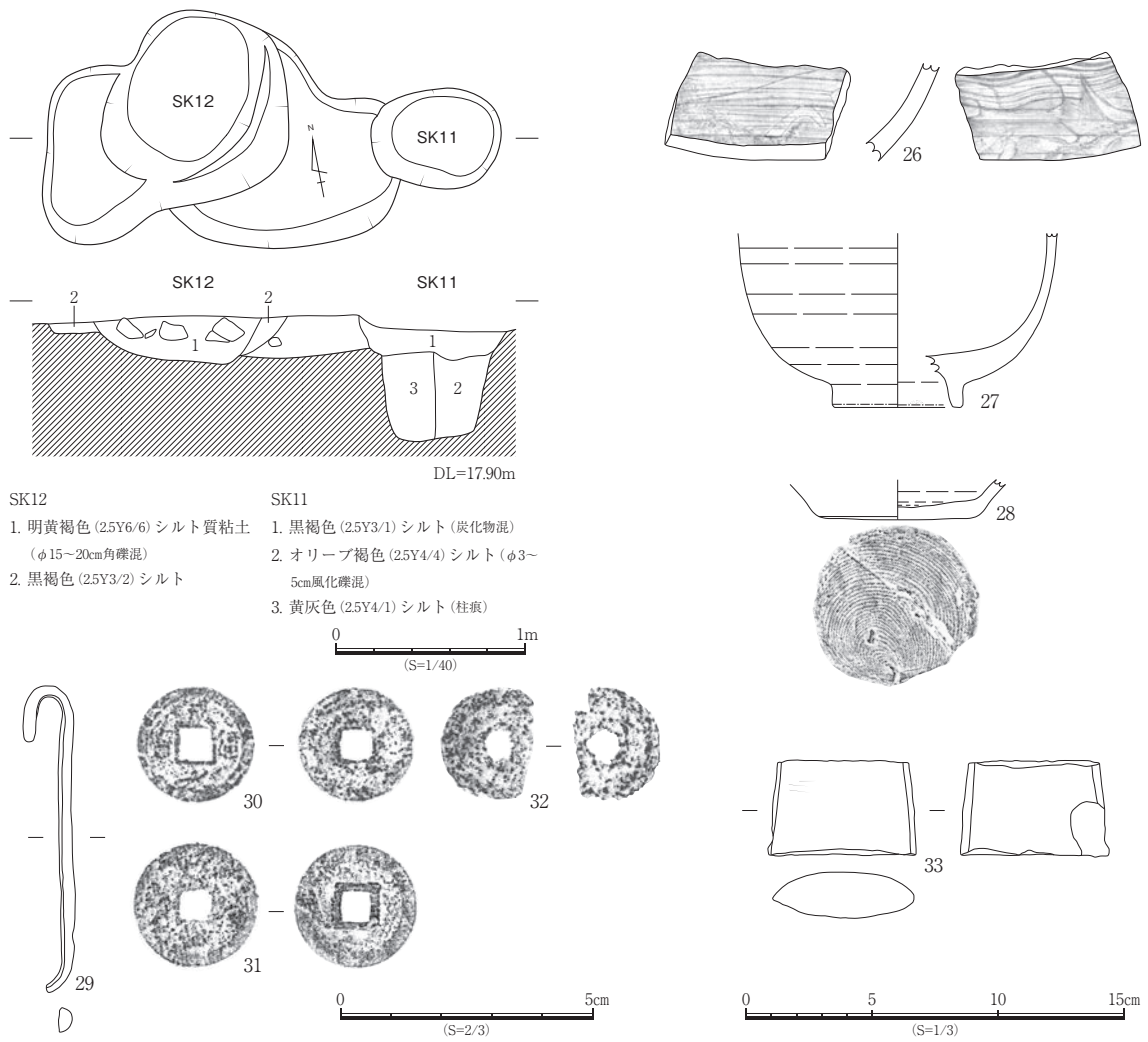


図21 E区SK11・12遺構図・遺物実測図

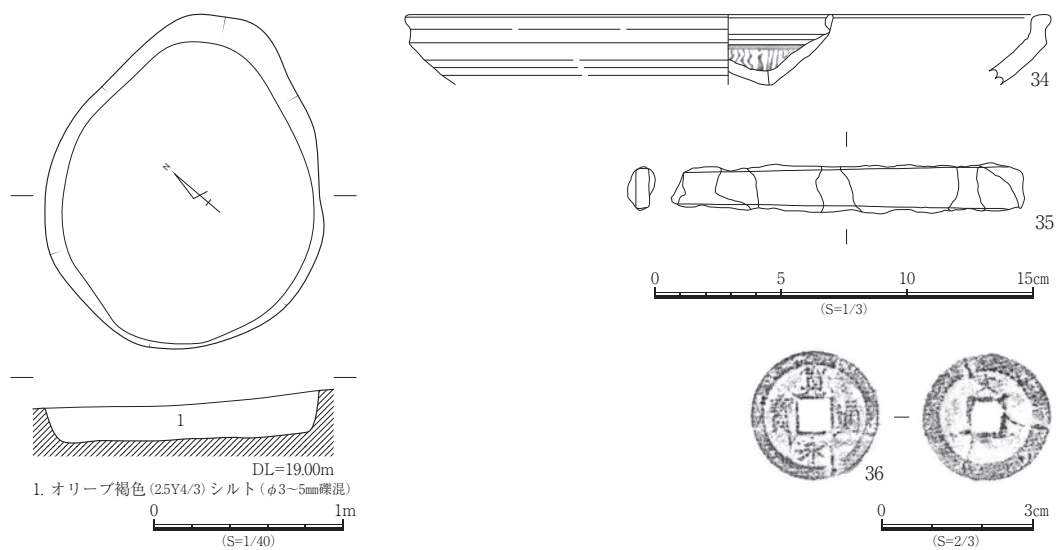


図22 E区SK16遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

SK11・12 (図21 26～33)

調査区北部で不整形の複数の土坑を検出した。SK11の平面形は楕円形で主軸方向はN-77°-Wを示す。長径0.67m, 短径0.59m, 深さ0.56mを測り, 周辺の土坑群より比較的深い。断面形は逆台形で, 埋土は黒褐色シルト, オリーブ褐色シルト, 黄灰色シルトで, 土師質土器片と陶器片が1点ずつ出土した。

SK12の平面形は不整形で, 主軸方向は不明である。周辺に複数の切り合いが認められる。断面形はいずれも浅い皿状で, 埋土は明黄褐色シルト質粘土と黒褐色シルトである。陶器皿(26)・碗(27), 土師質土器皿(28), 銅製品毛抜き(29), 銭貨4点, 砥石2点(33), 陶器片1点, 磁器片6点, 土師質土器片3点が出土し, その内以下の8点が図示できた。26は陶器皿で, 白化粧土がハケ塗りされる。27は陶器碗である。全面に黄釉が施され, 畳付は無釉である。高台内は深く削り込まれる。28は土師質土器の皿である。底部切離しは回転糸切りで, 外面全体に煤が付着する。29は銅製の毛抜きである。30～32は銭貨で, いずれも腐食が著しいが30は寛永通寶であると思われる。33は流紋岩製の仕上砥である。出土遺物より, SK12は土坑墓の可能性が考えられる。

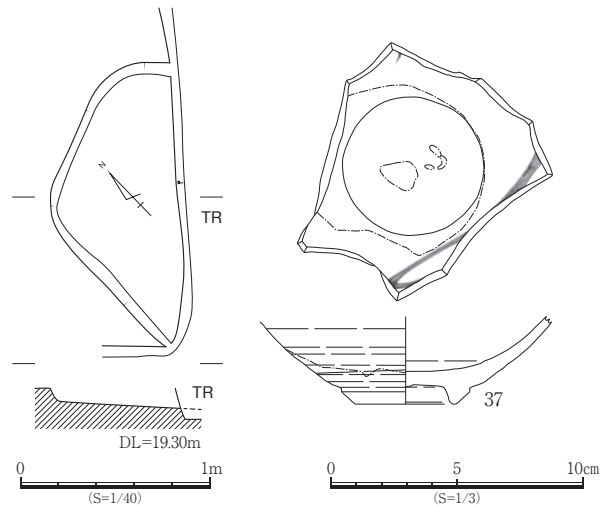


図23 E区SK17遺構図・遺物実測図

SK16 (図22 34～36)

調査区南側の谷部で検出した土坑である。平面形は楕円形で主軸方向はN-59°-Eを示す。長径1.80m, 短径1.49m, 深さ0.15～0.20mを測る。断面形は逆台形状で埋土はオリーブ褐色シルトである。埋土から陶器皿(34), 陶器片2点, 磁器片1点, 土師質土器片1点, 刀子(35), 銭貨(36)が出土し, その内以下の2点が図示できた。34は陶器皿で, 口縁部は上方に屈曲し, 端部を外方に摘み出す。内面には白化粧土による暦手が施される。36は寛永通寶である。

SK17 (図23 37)

調査区南端で検出した土坑で, 南側は調査区壁にかかる。平面形, 主軸方向共に不明であるが, 検出した最大径は1.25m, 深さは0.04～0.10mを測る。断面形は浅い皿状が想定される。埋土からは磁器碗(37)が出土した。37は断面逆三角形の削り高台で, 内面見込みは釉剥ぎ, 中央部に釉を残す。外面体部下半は露胎する。

⑤溝跡

SD1 (図24 38)

調査区北西で検出した溝跡である。主軸方向はSA2にほぼ直交するN-58°-Eを示し, 全長は2.12mである。西側の地形は約0.2m低く, SD1の延長部分に30cm前後の礫集中を検出した。断面形は浅い皿状を呈し, 埋土は黒褐色シルトである。調査区中央部の遺構集中範囲の北西端に位置するため, 地境界の溝跡と考えられる。埋土から土師質土器片4点(38), 土師器片1点, 陶器片1点が出土した。38は土師質土器杯で, ロクロ成形, 回転ナゲ調整で, 底部切離しは回転糸切りである。

SD2・6 (図25 39)

調査区中央の遺構集中部の南西方向を囲む溝跡で、SD1と同様に地境界の性格をもつものと考えられる。トレンチを挟んで、北側の南北方向の溝跡をSD2、南側から東西方向の溝跡をSD6とし、全長は12.80m以上を測り、調査区西壁にかかる。SD2は主軸方向N-51°-Wを示す。幅0.20~0.32m、深さは0.04~0.09mを測る。断面形は浅い皿状で、埋土はオリブ褐色シルトである。埋土から、図示した瓦質土器鍋(39)、土師質土器片4点、磁器片2点、銭貨1点が出土した。39は瓦質土器鍋の口縁部片で、口縁端部は内側に摘む。

SD6の主軸方向はN-51°-W・N-44°-Eである。幅0.26~0.90m、深さ0.08~0.31m、断面は南側が約6cm高いテラス状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。土師質土器片5点、備前焼播鉢片4点、陶器片1点、磁器片3点、石製品1点が出土した。また、SD6の南肩に柵列

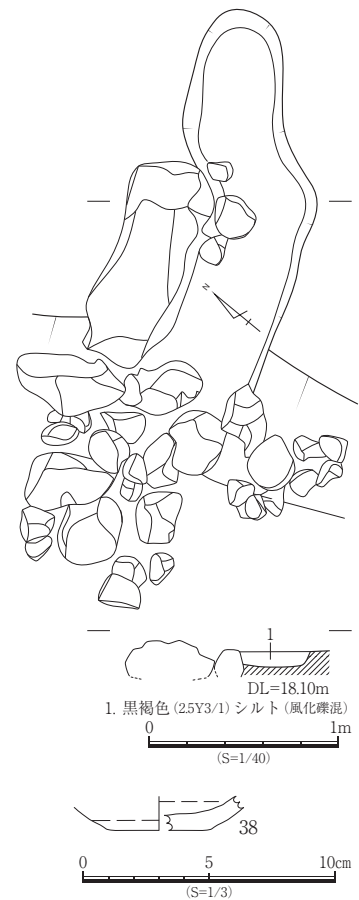


図24 E区SD1遺構図・遺物実測図

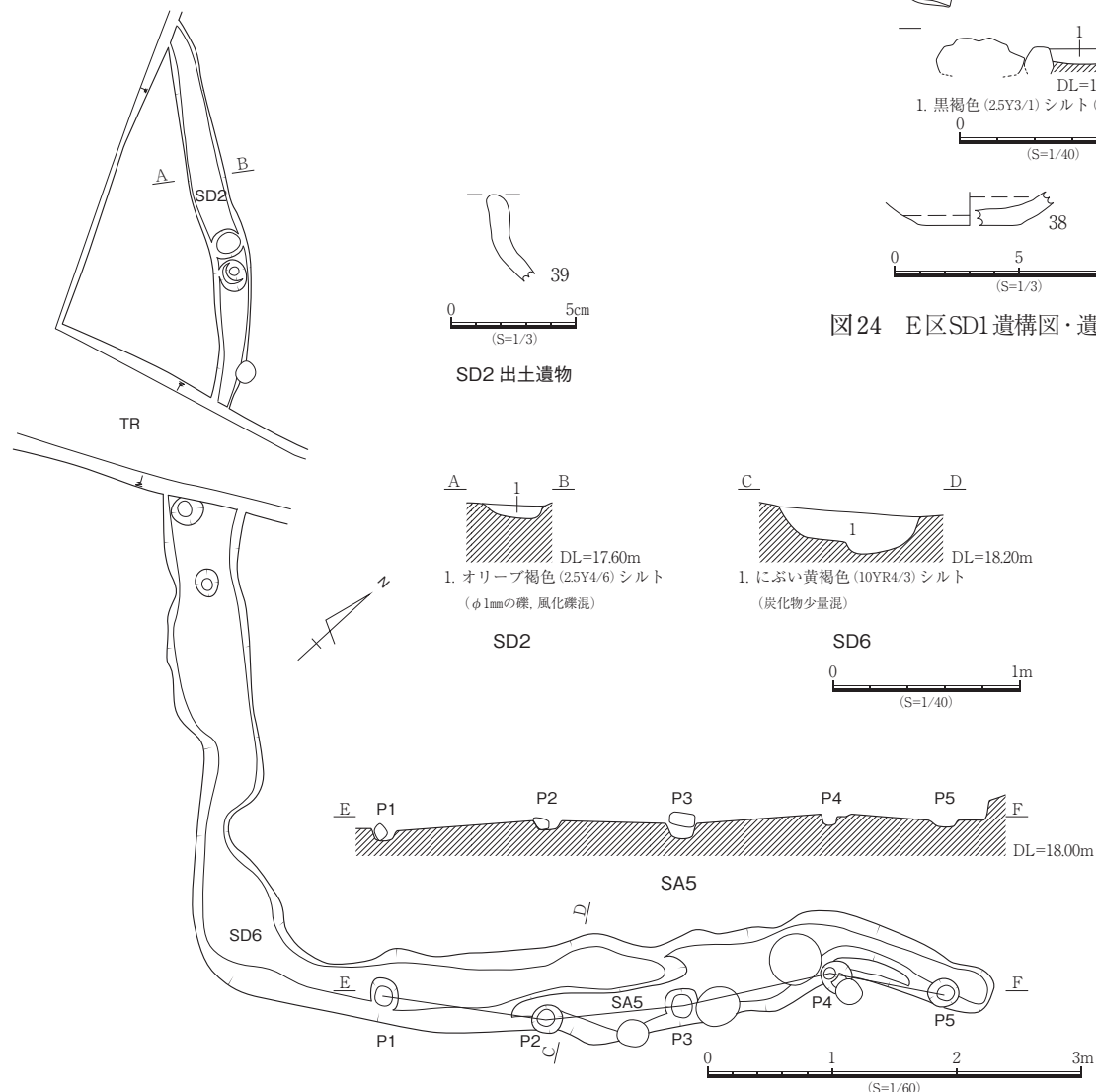


図25 E区SD2・6遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

SA5を検出した。柱穴の径は0.16～0.24mを測り、P1から木杭、P2～4から礎板石を検出した。

SD4 (図26 40)

調査区中央西側で検出した溝跡である。主軸方向はN-22～62°-Eで、南進の後調査区西壁にかかる。全長は1.90m以上、幅0.22～0.37m、深さは0.05～0.17mを測る。出土遺物は、土師質土器杯(40)、細片61点である。40は土師質土器杯で、内外面に回転ナデ調整が施される。底部は欠損する。

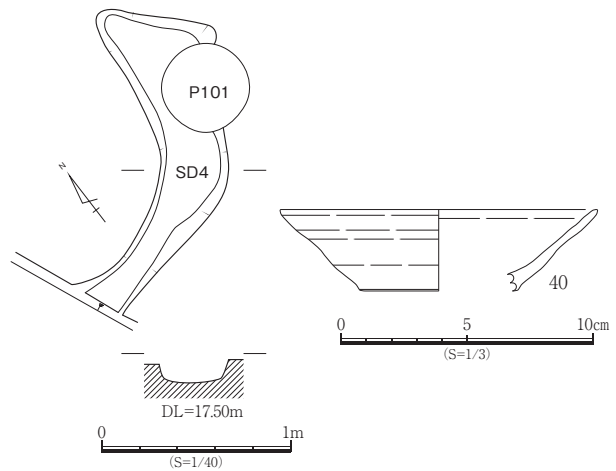


図26 E区SD4遺構図・遺物実測図

⑥包含層出土遺物

I層 (図27 41～45)

I層からは主に近世から近現代の遺物が出土している。41は瀬戸美濃系陶器碗の底部である。高台内まで鉄釉が施され、畳付は釉を削り取る。42は寛永通寶である。43～45は砥石である。43は細粒花崗岩製で一面のみ使用される。44は流紋岩製の仕上砥で、三面が使用される。45は花崗岩製の仕上砥で、三面が使用される。

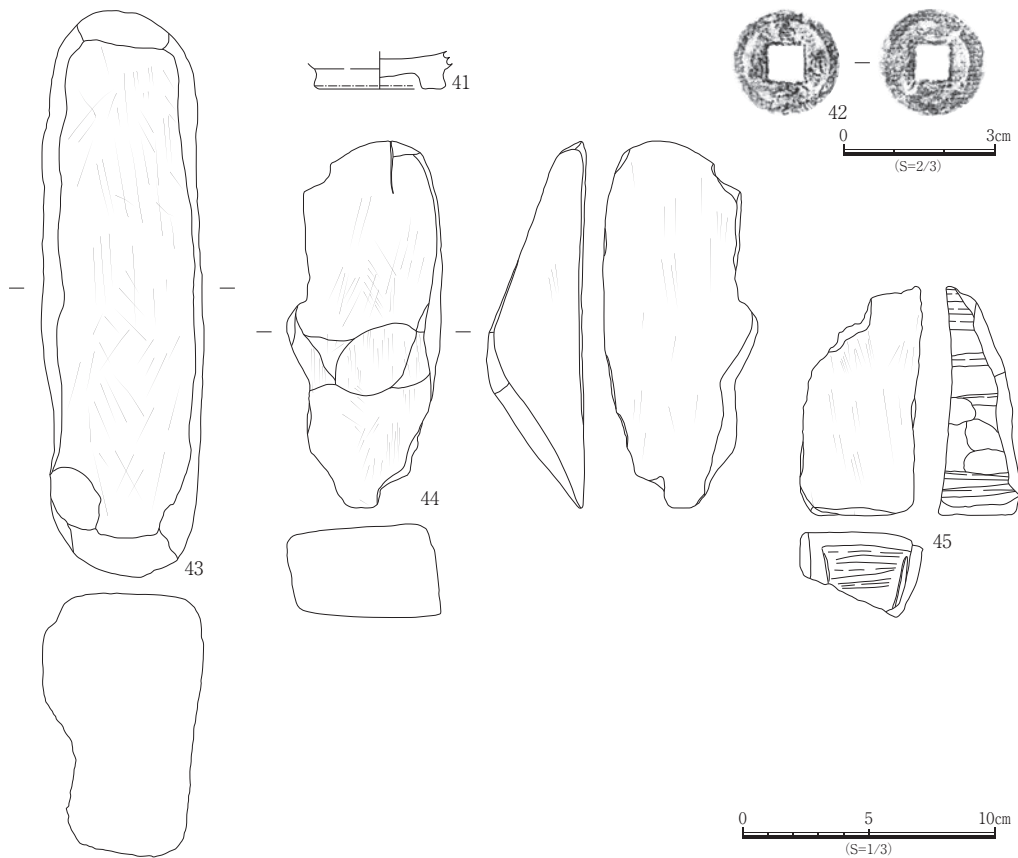


図27 E区I層遺物実測図

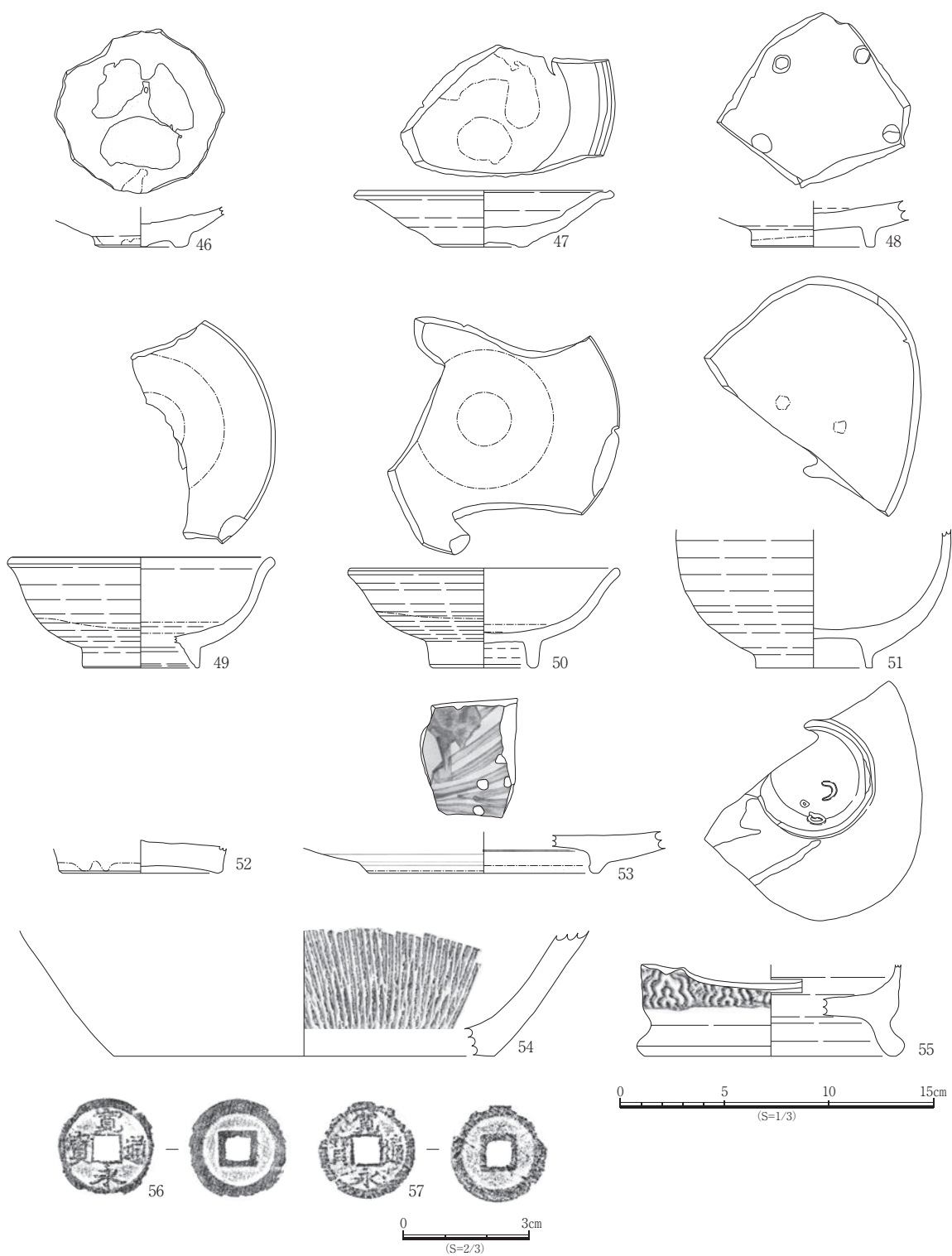


図28 E区Ⅲ層遺物実測図1

Ⅲ層(図28・29 46～60)

Ⅲ層からは主に近世の遺物が出土している。46・47は唐津産の皿である。46は灰釉が施され、高台は兜巾状に削る。見込みに砂目がみられる。47の口縁端部は上方に摘み上げ、内面は沈線状に凹む。内面体部中位に稜を成す。48・51は陶器碗, 49・50は陶器皿である。48は唐津産である。全体的に青磁釉が施されるが、高台は無釉である。見込みにハマ痕がみられる。49・50は能茶山窯である。49は外面中位まで鉄釉が施され、体部下半は露胎する。高台は断面三角形の削り高台で、見込みに蛇ノ目状に白土が施される。50も外面中位まで施釉され、下半は露胎する。内面蛇ノ目釉剥ぎが施される。51は唐津産の碗で、全体に褐釉が施される。高台脇より高台内を深く削り、外底部にC字形の窯印がみられる。見込みにハマ痕が残る。52は陶器壺の底部である。灰釉が施され、外面底部は露胎、中央部がヘラ切りによって凹む。53は肥前産磁器の大皿である。外面と高台内に圈線が巡る。畳付は釉剥ぎ、一部に砂が付着する。内面に草花文が描かれる。54は堺産の播鉢である。内面全体に条線が施される。55は瓦質土器の焜炉で、高台は「ハ」の字に開く。外面に刺突充填文が施される。56と57は寛永通寶である。58は泥岩製の仕上砥である。剥片の一面のみ使用される。59・60は細粒花崗岩製の石臼である。いずれも上臼で、60は挽木の取り付け部が残る。

Ⅳ層(図30 61～68)

Ⅳ層からは主に中世の遺物が出土している。61は土師質土器杯である。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。62は黄瀬戸菊皿で、内面に菊弁が施される。口縁部は外反し、端部は上方に摘み上げる。全体的に黄釉がかかる。63は青磁の稜花皿である。青磁釉が厚く施され、貫入が

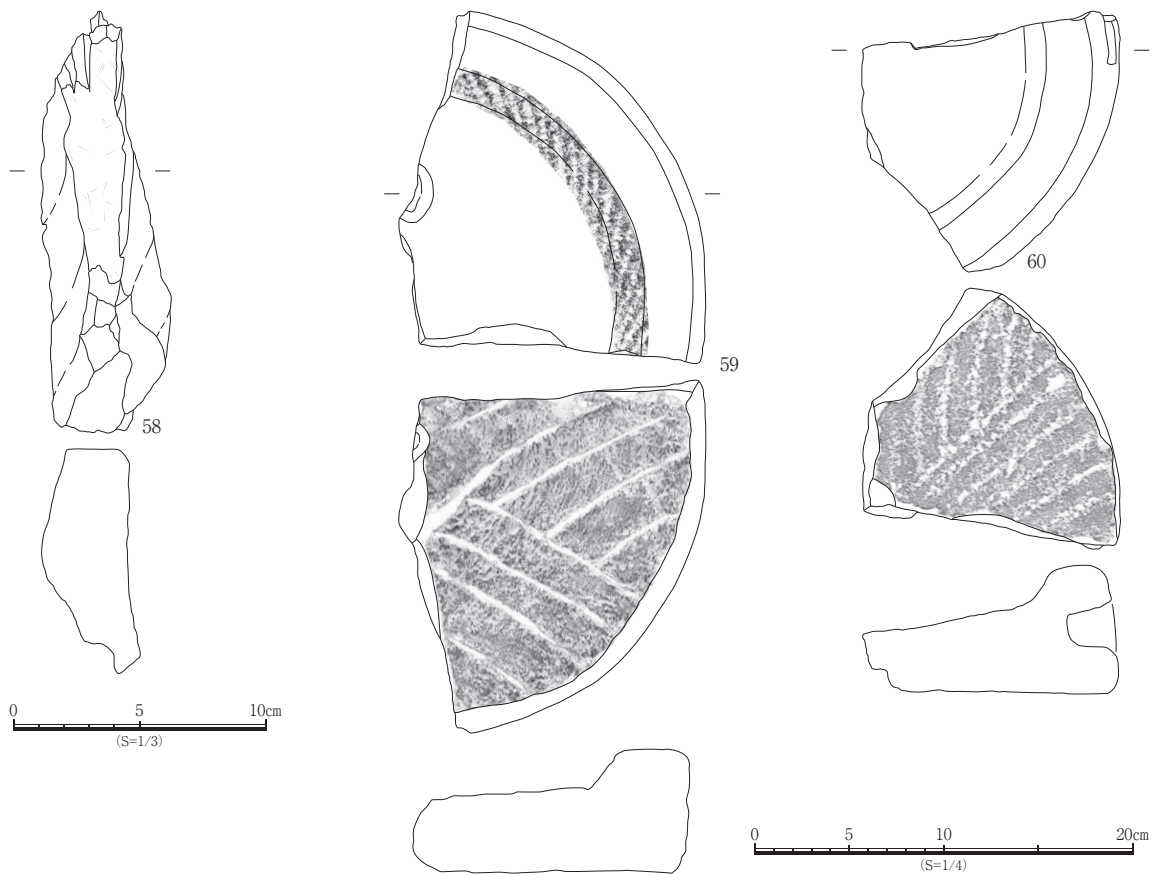


図29 E区Ⅲ層遺物実測図2

認められる。体部は腰折れ、口縁部は外反し、端部には挟りが入る。64は青磁碗である。全面施釉され、高台内は無釉である。内面見込みに草文、外面に幅広の蓮弁文が施される。65は白磁の端反皿である。透明感のある白磁釉が施される。66・67は備前焼の播鉢である。66の口縁端部は上下にやや拡張し、平坦な面を成す。67の口縁端部は上方に拡張し、尖り気味に仕上げる。内面はナデ調整、口縁直下に条線が施される。68は陶器の水屋甕である。口縁部は内傾し、外方に折り返し玉縁状に肥厚する。口縁直下に円孔を穿つ。

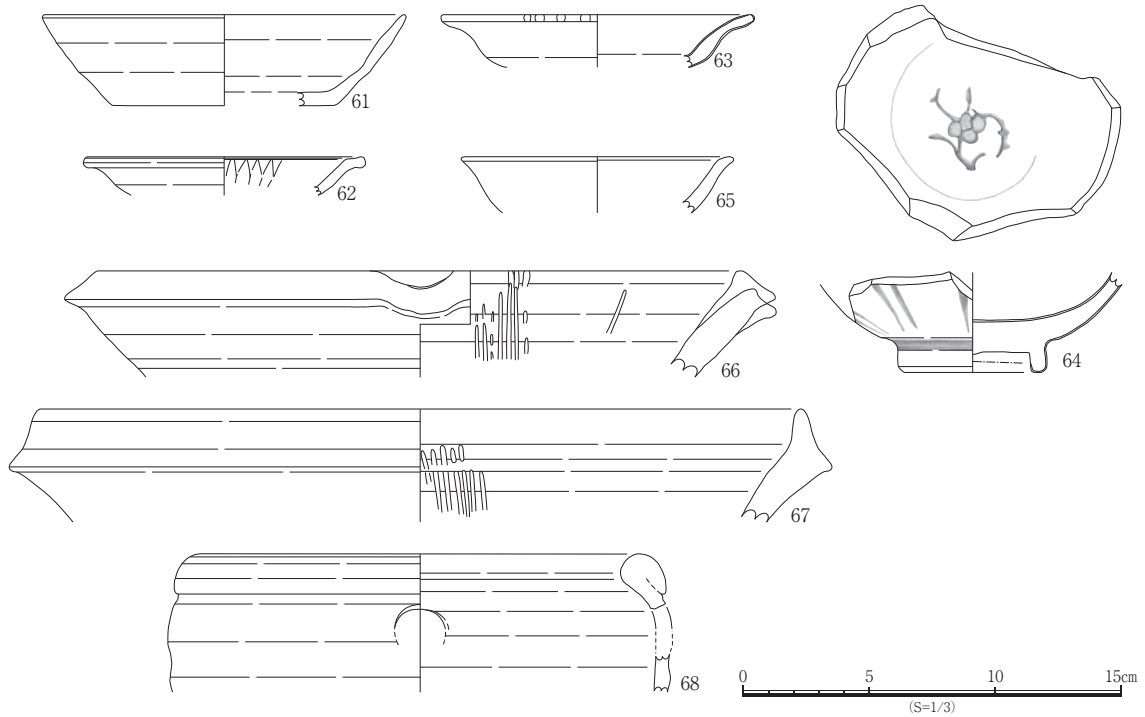


図30 E区Ⅳ層遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

(2) W区

W区は、調査対象地内の道路より西部に設定した調査区である。本調査区では、掘立柱建物跡4棟、ピット33個、土坑10基、溝跡2条、性格不明遺構1基を検出した。主に調査区南側で中世の遺構が多くみられた。北部は近代に宅地造成が行われており、近代の掘立柱建物跡を検出した他、幕末から戦前にかけての遺物が多く出土した。ここでは主に中世の遺構と近代の掘立柱建物跡を抽出し、それらの遺構から出土した遺物について遺構図と併せて図示する。包含層から出土した遺物についてはそれぞれの層順に掲載する。

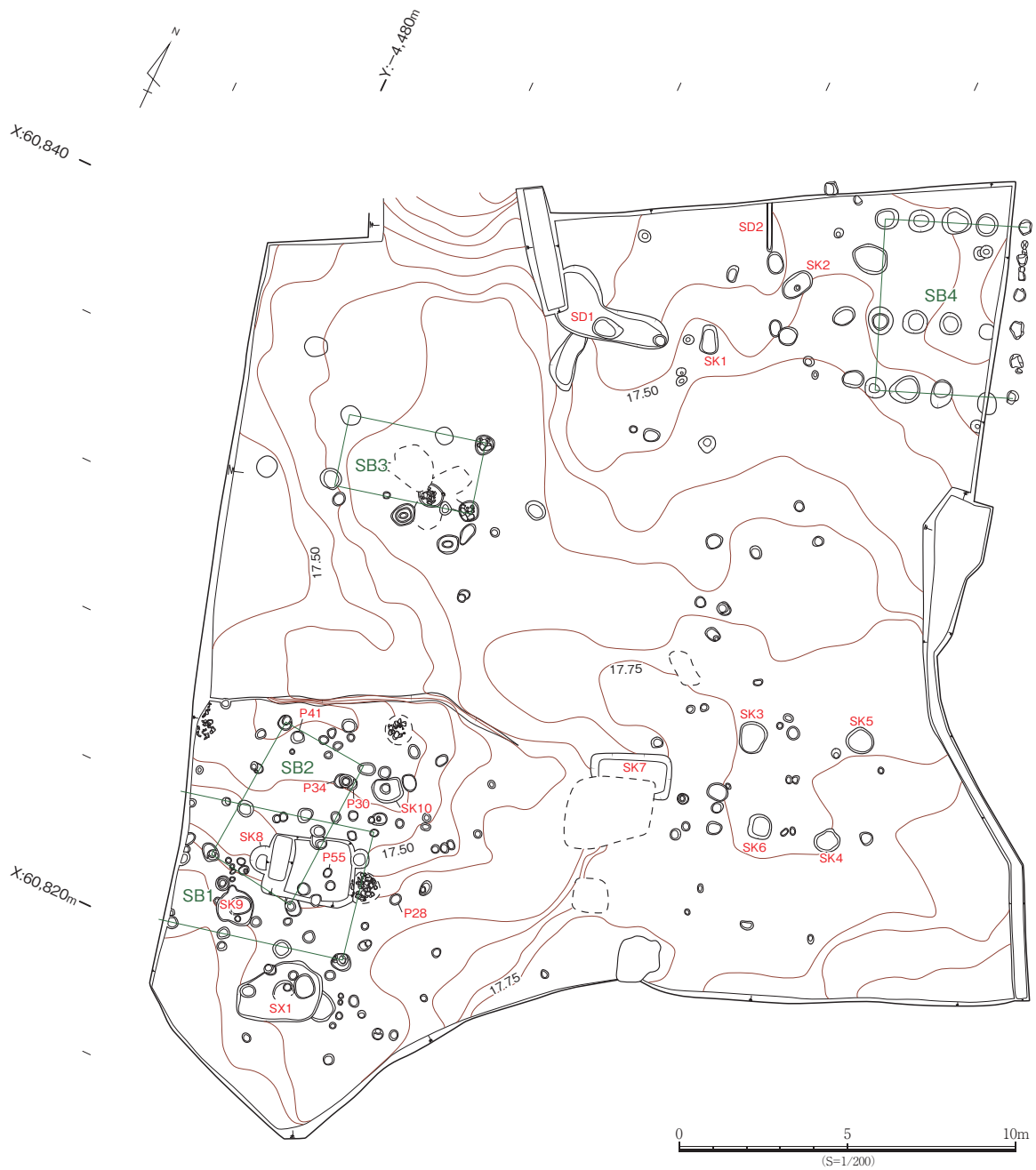


図31 W区遺構配置図

①掘立柱建物跡

SB1 (図32)

調査区南西部で検出した桁行3間、梁行1間の側柱建物跡である。棟方位はN-77°-Eを示し、検出標高は17.47~17.64mである。規模は桁行5.18m、梁行3.90m、床面積は20.20㎡を測る。柱間距離は1.55~2.38mで調査区西壁にかかる。柱穴は径が0.23~0.59mを測る円形で、P4・6・7で礎板石を検出した。埋土は主に黄褐色シルトである。P2から土師質土器細片3点、P3から土師質土器皿片1点と細片4点、P4から土師質土器片9点、P5から磁器細片1点、P6から土師質土器皿片1点と細片2点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

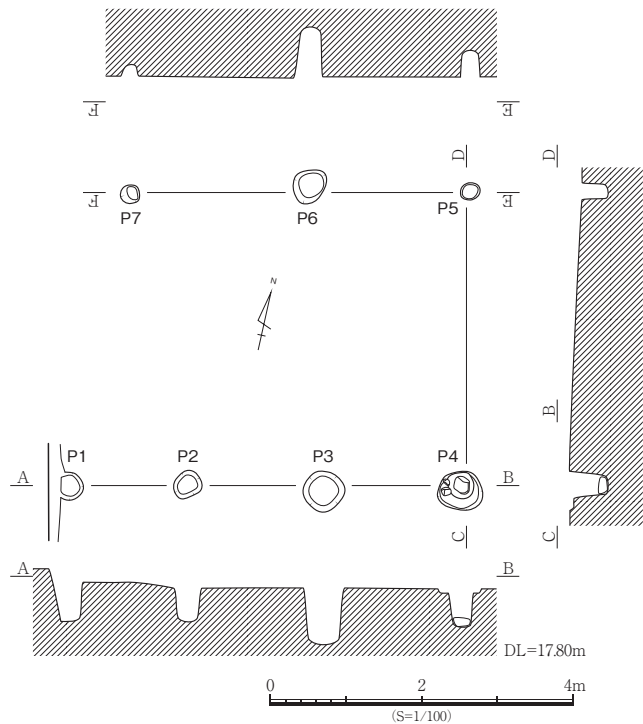


図32 W区SB1遺構図

SB2 (図33)

SB1と同じく調査区南西部で検出した桁行3間、梁行1間の側柱建物跡である。棟方位はN-3°-Eを示し、検出標高は17.37~17.62mである。規模は桁行4.65m、梁行2.80m、床面積は13.02㎡を測る。柱間距離は0.94~2.80mで、柱穴の径は0.27~0.56mを測る。埋土はオリーブ黒色シルトと黄褐色シルトである。P2から土師質土器片4点、P3から土師質土器片2点、P4から図示できた土師質土器杯(72)と細片10点、P6から土師質土器鍋片2点と細片2点、P8から土師質土器片6点、瓦質土器片1点、青磁片1点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

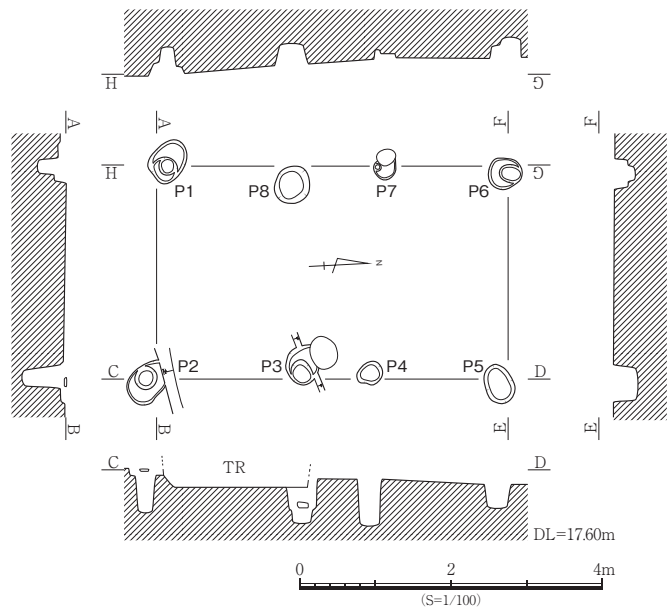


図33 W区SB2遺構図

SB3

調査区北西で検出した近代の掘立柱建物跡である。棟方位はN-76°-Eを示し、検出標高は17.57~17.73mを測る。規模は桁行4.29m、梁行2.15m、床面積は9.22㎡である。柱間距離は1.24~2.87mで南端桁行方向の柱列の中央部にあたる柱は攪乱のため検出できなかった。近代の掘立柱建物跡で、規模から倉庫のような性格を持つものと推察される。図31 W区遺構配置図に位置のみ記載する。

3. 検出遺構と出土遺物

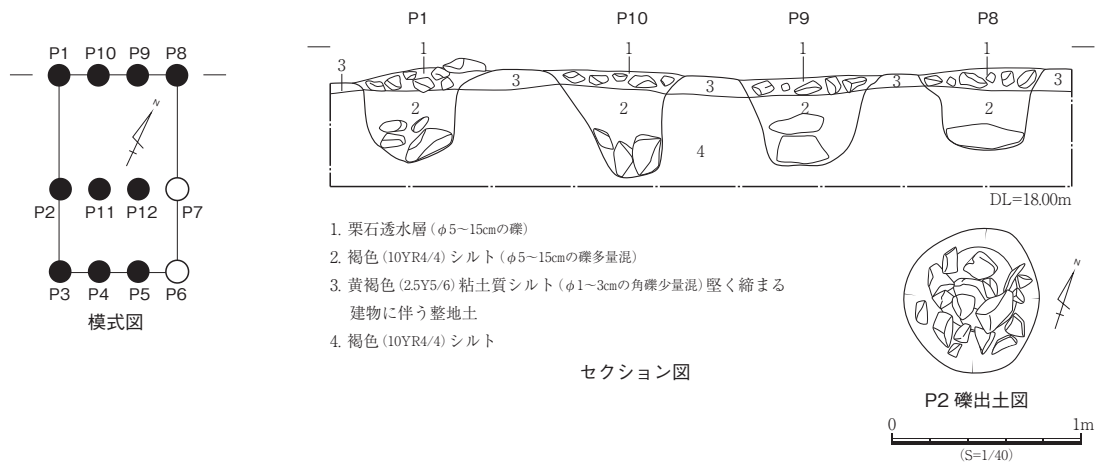


図34 W区SB4遺構図

SB4 (図34)

SB3と同様に、調査区北東で検出した近代の掘立柱建物跡である。調査区東壁にかかり、現地表面に残る石列も建物の一部と考えられる。棟方位はN-21°-Wを示し、検出標高は17.44～17.55mを測る。規模は桁行5.11m、梁行3.22mで床面積は16.45mである。北側の柱列P1・8～10について断面調査を行った。上層は約10cmが5～15cmの礫による透水層、下層は5～15cmの礫を多く含む褐色シルトであり、いずれも底に礎板石を使用している。また建物周辺も厚さ約10cmの整地土が敷かれている。

②掘立柱建物跡及びピット出土遺物(図35 69～75)

W区のピット埋土から出土した遺物のうち、69～75について抽出し、図示した。69～73は土師質土器の杯である。69は内外面に回転ナデ調整が施される。底部欠損のため、切離しは不明である。70は底部からやや上方に立ち上がり、コップ状を呈する。内面にロクロ目を残す。71は内面底部にロクロ目を残し、回転ナデ調整が施される。底部切離しは回転糸切りで、外面底部全面に煤が付着する。72は回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。73は丸みのある底部で、底部切離し

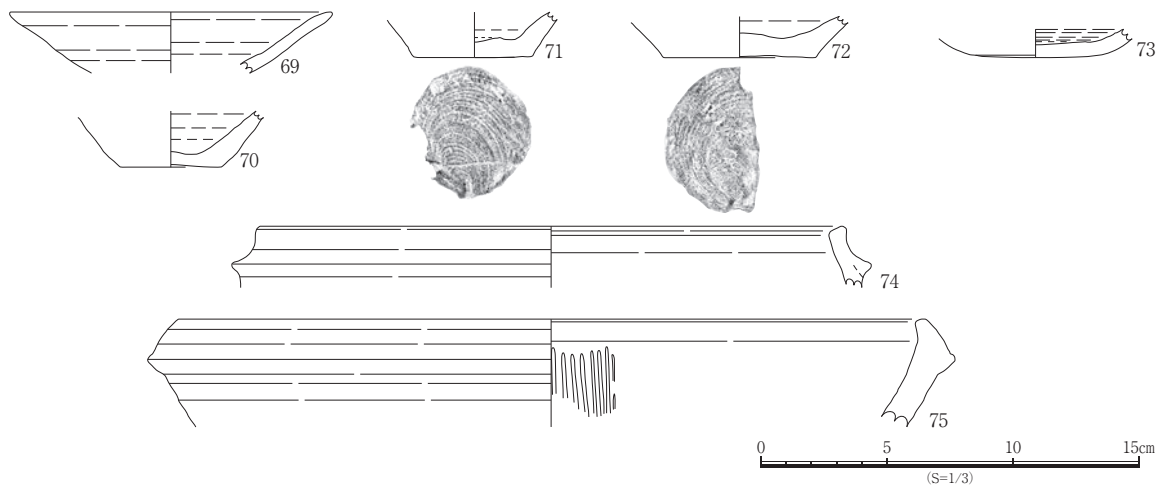


図35 W区ピット出土遺物実測図

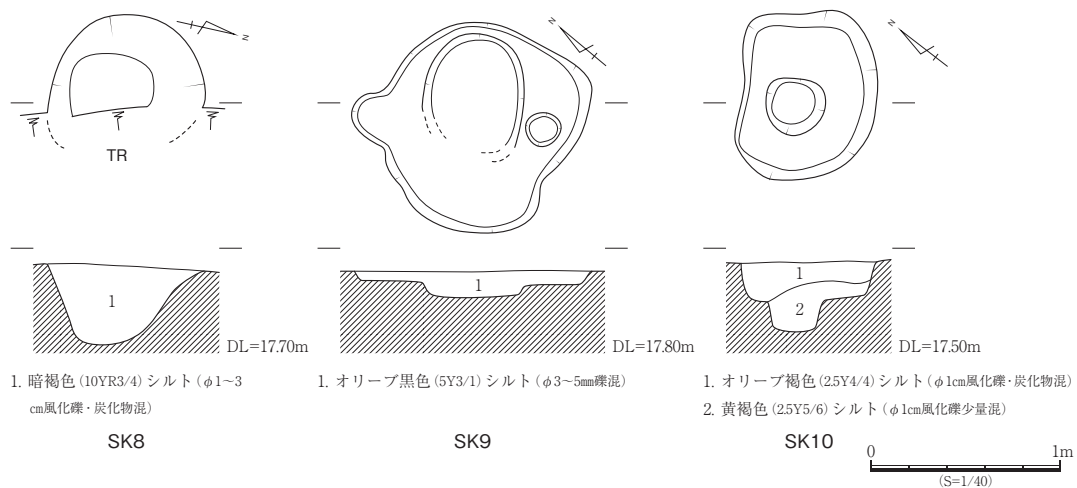


図36 W区SK8～10遺構図

は摩耗のため不明である。内面見込み周縁にロクロ目を残す。74は土師質土器の播磨型鍋である。断面三角形の鏝が付き、口縁端部は平坦な面を成す。75は備前焼の播鉢である。口縁部は内傾し、僅かに上下に拡張する。

③土坑

SK8 (図36)

調査区南西部で検出した土坑である。東側は試掘トレンチにかかり平面形が不明ではあるが、長径0.79m、短径0.51m以上の円形を呈するものと思われる。主軸方向は不明である。深さは0.41mを測り、埋土は暗褐色シルトで、土師質土器片3点が出土した。

SK9 (図36)

調査区南西部で検出した土坑である。平面形は不整形であるが、主軸方向はN-50°-Eを示す。長径1.14m、短径1.02mを測る。断面形は浅い皿状で、中央部が約5cm低くなる。埋土はオリーブ黒色シルトで、土師質土器片2点が出土した。

SK10 (図36)

調査区南西部で検出した土坑である。主軸方向はN-56°-Eを示し、平面形は隅丸方形を呈する。長径0.88m、短径0.70m、深さ0.20～0.38mである。断面形は逆台形状で、中央部が柱痕状になる。埋土は上層がオリーブ褐色シルト、下層は黄褐色シルトである。埋土中から土師質土器片2点が出土した。

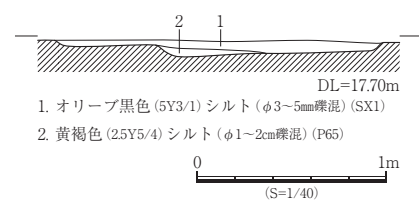
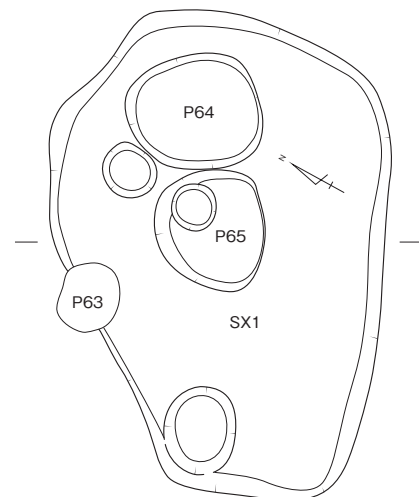


図37 W区SX1遺構図

④性格不明遺構

SX1 (図37)

調査区南西端で検出した性格不明遺構である。平面形は不整形であるが、長軸方向はN-61°-Eを示し、長径2.58m、短径1.22～1.82mを測る。断面形は浅い皿状で、床面よりP64・65

3. 検出遺構と出土遺物

など4つの浅い皿状のピットを検出した。埋土はオリブ黒色シルトで、埋土中から土師質土器杯片1点、細片17点、備前焼播鉢片1点が出土した。

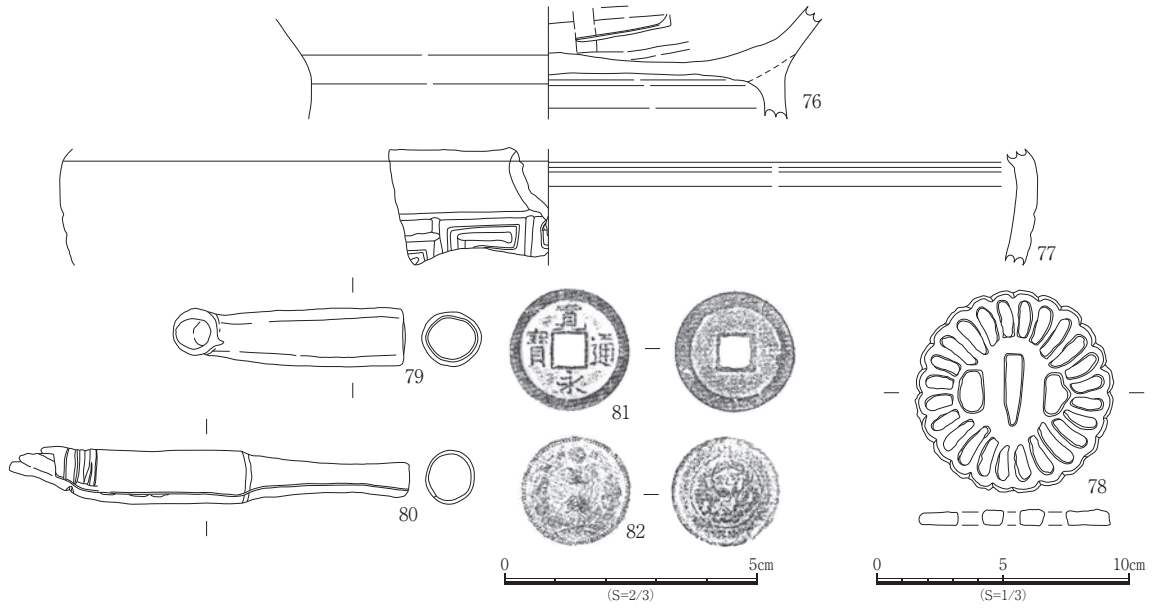


図38 W区I層出土遺物実測図

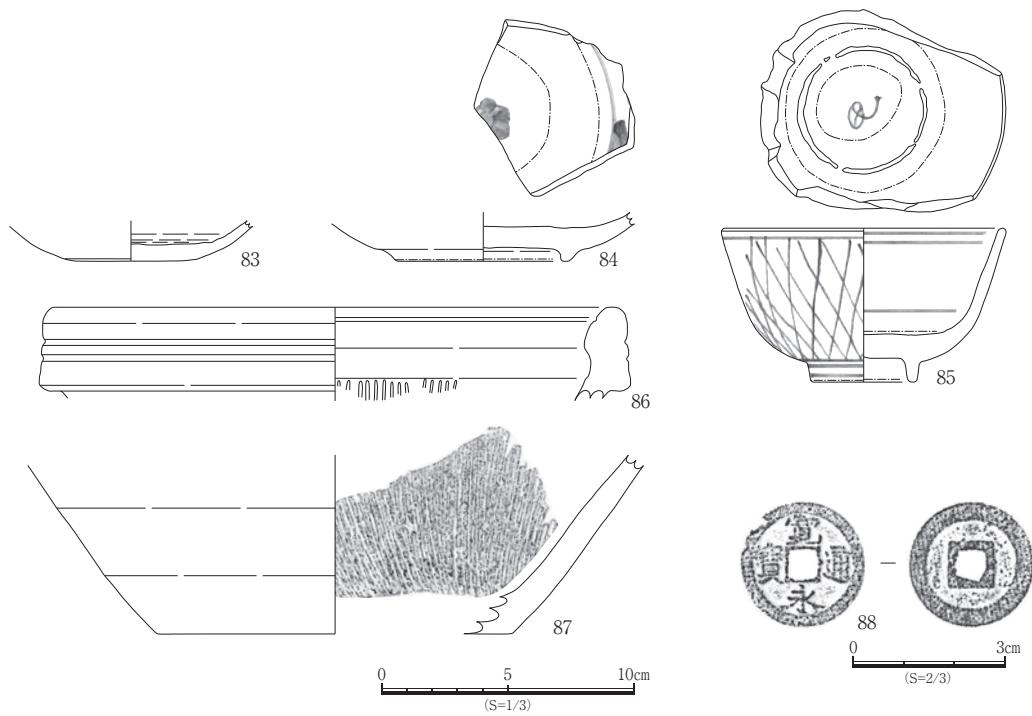


図39 W区III層出土遺物実測図

⑤包含層出土遺物

I層(図38 76～82)

I層からは主に近世から近現代の遺物が出土している。76は瓦質土器の焜炉である。高台内面にロクロ目が残り、内外面とも回転ナデ調整が施される。77は瓦質土器の火鉢である。外面口縁直下に雷文帯が施される。78は鉄製の菊透かしの鏝である。79・80は銅製の煙管である。81は寛永通寶で、82は半銭銅貨幣である。半銭銅貨幣は明治7(1874)～27(1894)年に製造された。

Ⅲ層(図39 83～88)

Ⅲ層からは主に近世の遺物が出土している。83は土師質土器の皿で、内面にロクロ目が残る。底部切離しは回転糸切りである。84は肥前産の磁器皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に崩れた五弁花文が描かれる。高台は低く、畳付は釉剥ぎである。85は磁器碗で、外面網目文、内面は圏線が巡る。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に崩れた文様が描かれる。高台内は深く削り込まれ、畳付けは釉剥ぎである。86・87は陶器で、86は備前焼の搦鉢である。口縁部は肥厚する。外面に二条、内面に一条の沈線が巡る。87は堺産搦鉢の底部である。88は寛永通寶である。

Ⅳ層(図40 89～94)

Ⅳ層からは主に中世の遺物が出土している。89は土師質土器の皿である。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。底部に簀子状の圧痕が残る。90は土師質土器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。91は青磁の稜花皿である。口縁部は外反し、端部は丸ノミ状工具によって抉りが施される。口縁内面に二重界線が描かれる。92は土師質土器の羽釜である。口縁部は僅かに内湾し、内傾する面を成す。鏝は断面三角形状である。93は瓦質土器の火鉢である。口縁部は内湾し、端部は肥厚し平坦な面を成す。ナデ調整が施される。94は粘板岩製の仕上砥である。二面が使用される。

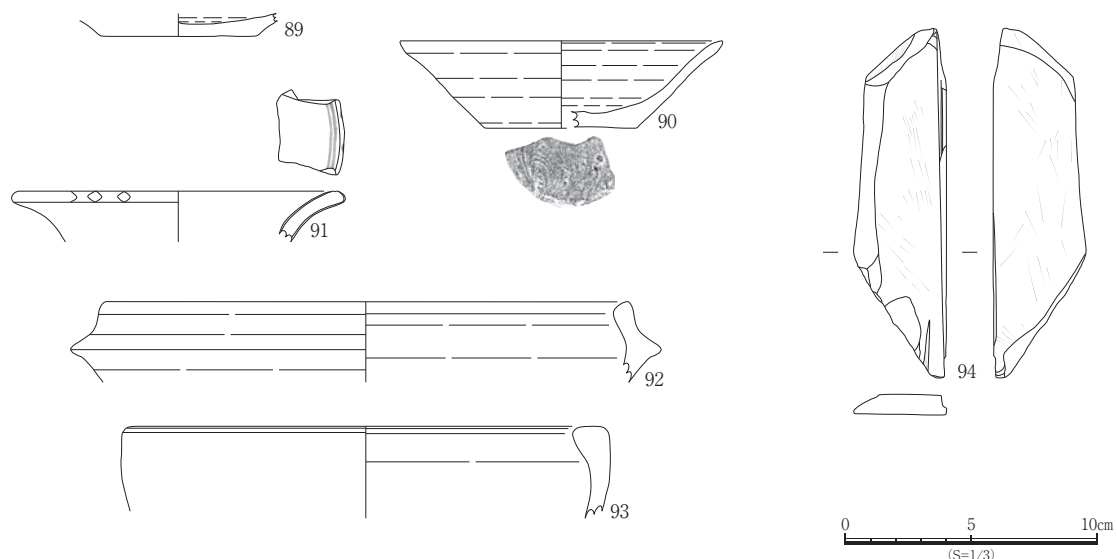


図40 W区Ⅳ層出土遺物実測図

⑥表採遺物(図41～51 95～208)

本遺跡では表採ではあるが近世から近代の遺物が多くみられた。ここではその内主要な遺物を図示し、掲載する。

95～111は陶器である。95～99は皿で、95はロクロ成形による皿である。内面に灰釉が施され、外面は露胎、一部にタール痕が認められる。96・97は鉄釉皿で、外面体部下半は露胎する。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。98は褐釉が浸け掛けされる。口縁部は鉄釉によるイッチン掛けで、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。99は肥前産の陶胎染付である。内面見込みに二重圏線が施され、四箇所の砂目積み痕が認められる。100は鉢で、口縁端部は内傾する平坦面を成す。内面及び外面口縁部まで灰釉が施され、胎土に0.5～2.0mmの砂礫を含む。101～105は碗である。101は小碗である。全面に黄釉が施され、外面に鉄釉による笹文が施される。102も全面に黄釉が施され、高台暈付は釉剥ぎである。103は全面に透明感のある白磁釉が施され、黒褐色の大きな貫入が入る。104は広東形碗である。外面笹文、内面見込みに圏線、中央に五弁花が淡い呉須により描かれる。105は全面に灰釉が施され、高台内は露胎する。削り高台である。106は蓋で、外面に灰釉が薄く施され、草の鉄絵が描かれる。内面に「□十才男」の墨書がみられる。107は行平鍋で、内面及び外面上半に褐釉が施される。受部は無釉で、外面に飛鉋がみられる。108は片口鉢で、内面及び外面上半に緑灰色の釉が施され、体部下半及び内面受部は露胎する。109は爛徳利である。全面に黄釉が施され、口縁部は鉄釉が二度掛けされる。底部は高台を削り出し、暈付は釉剥ぎである。110は火鉢である。外面に緑釉が施され、外面底部及び内面は無釉である。外面底部周縁部は平坦な面を成す。111は盃である。オリーブ黒色を呈し、高台内に「備前」の銘が刻印される。

112～191は磁器で、112～131は皿である。112・113は丸皿で、全面に白磁釉が施される。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。113は釉に細かい粒状の呉須が混じる。114は肥前系磁器で透明感のある釉が施される。内面口縁部に格子文が巡る。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、中央には丸に蜻蛉が淡い呉須により描かれる。115は白磁皿である。見込みに「壽」が線刻され、口縁部は外方に開く。116も白磁皿で、体部は腰折れ、口縁部は外方に開き端部はやや垂下する。見込みに松樹、牡丹と獅子が濃い呉須により描かれる。117の口縁部は外反し玉縁状を呈し、外面底部高台内に「Nagoya Seitoshō」の文字と王冠が描かれる。118は、外面高台内に「・・URA&CO」・「・CHAINA」・動物(馬か)が緑色の釉で描かれる。乳白色を呈する。119～122は瀬戸美濃系である。119は鮮やかな濃い呉須により内面に簡略化した葦雁文、外面に花文が描かれ、口縁端部にも呉須が施される。120は、鮮やかな濃い呉須により内面に草花文、外面に圏線が描かれる。121は型打成形により陰刻菊花花卉文が施され、内面中央に人物文、周囲に菊花文が型紙摺りで施される。五箇所に目痕が残り、口唇部は呉須塗りである。122は内面見込みに檜垣文、中央に松竹梅文、体部は菊花文と菱文、外面は三友文と圏線が型紙摺りによって描かれる。口縁部は輪花状を呈する。121と122は共に蛇ノ目高台である。123～126は銅板転写摺りの皿である。123は内面唐草文に菊花、桐文が描かれ、口縁端部に褐色釉が施される。124は緑色顔料による染付で、内面中央は丸に桜文、周囲は斜格子状の文様が描かれる。125も緑色顔料による染付で、内面口縁部六方に桜文、中央に花文が描かれる。126は内面唐花をモチーフとした文様が描かれ、口縁端部は口鏝釉が施される。127・128は能茶山窯の型打成形の角皿である。127は外面区画内に源氏香と崩れた芙蓉手文、内面区画内に梅文と草文が描かれる。口縁部は外反し、端部はやや上方に伸びる。128の見込みは八面体を呈し、岩文と草木文が施される。高台内に「茶山」の銘が染

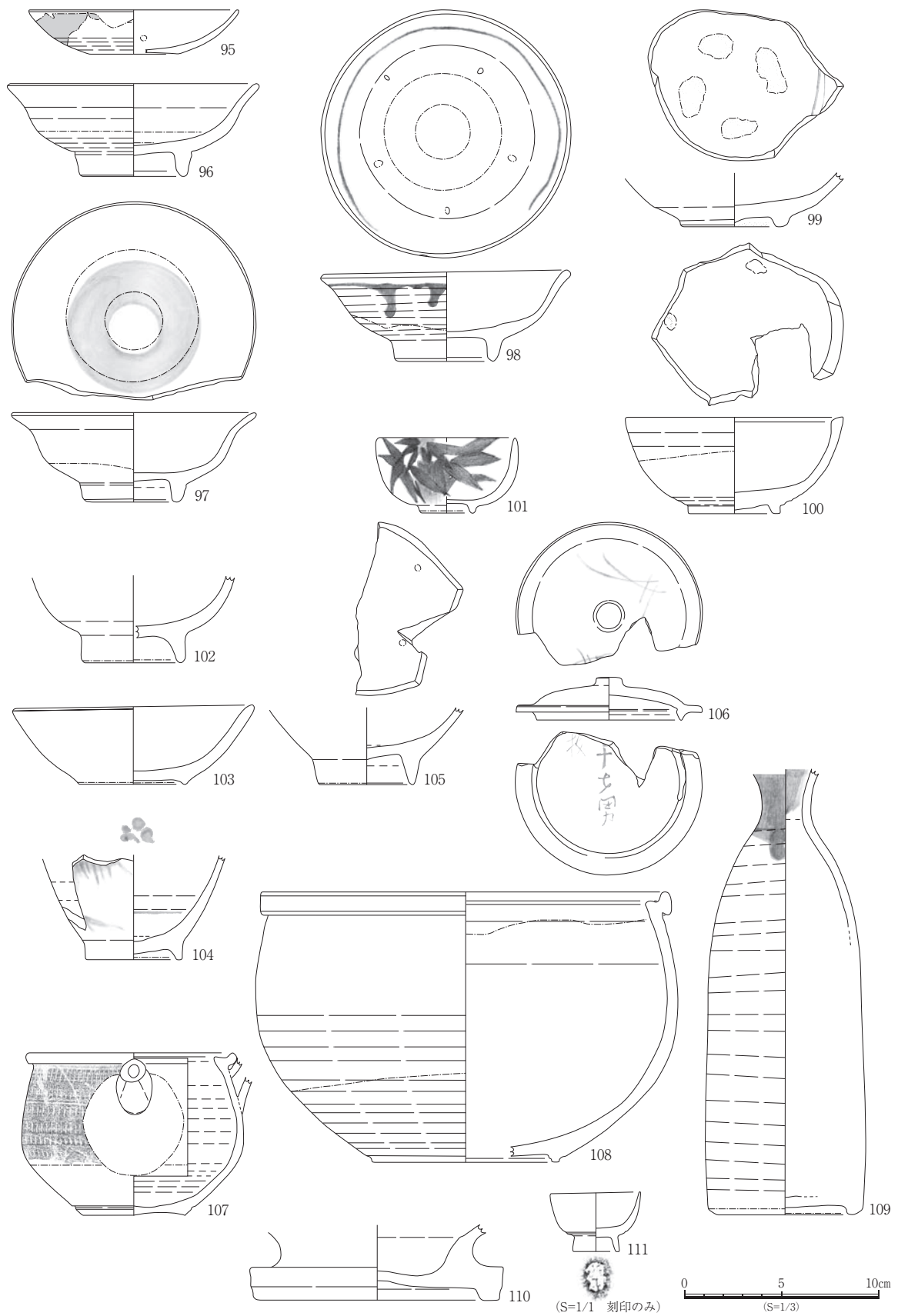


図41 表採遺物実測図1

3. 検出遺構と出土遺物

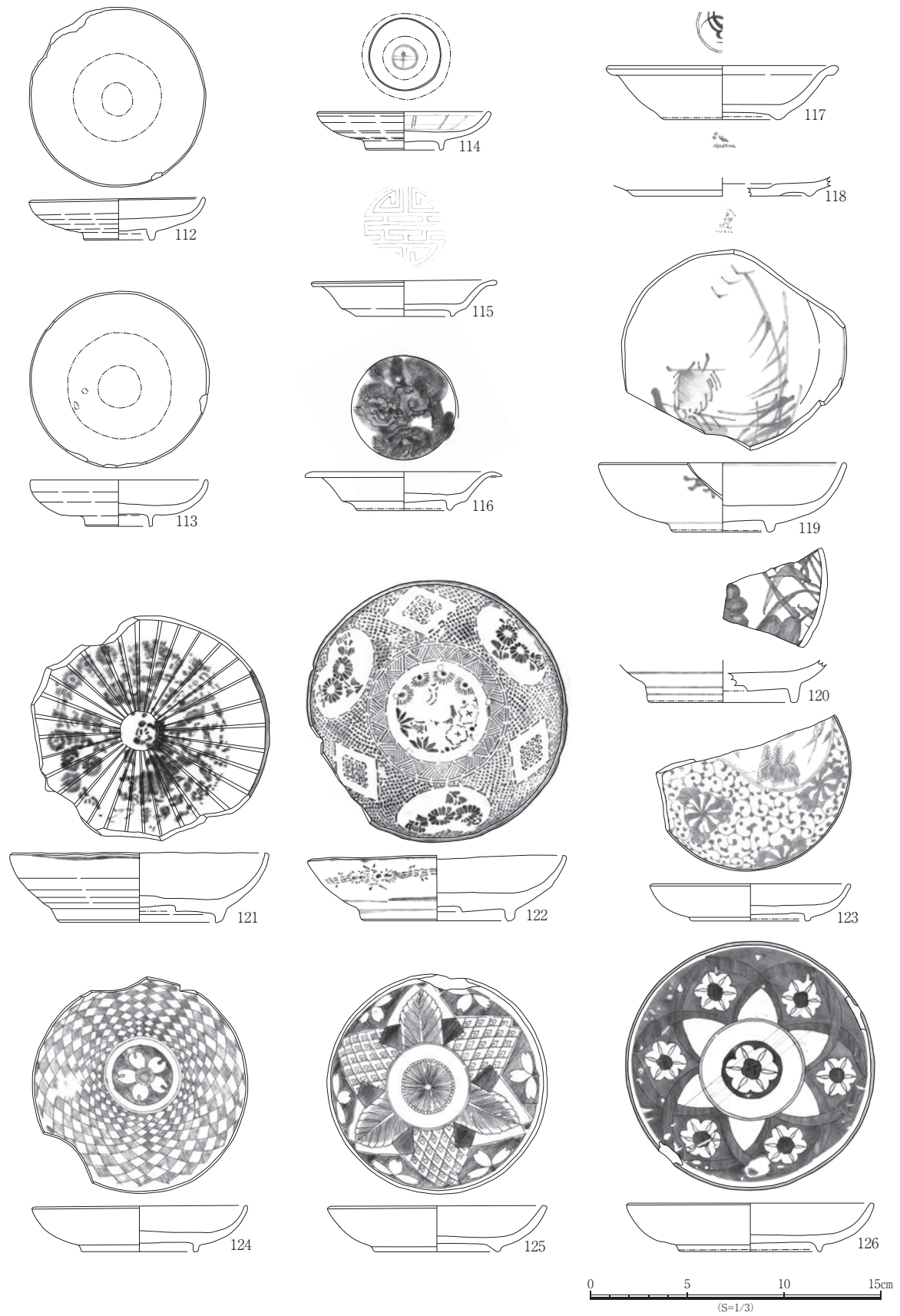


図42 表採遺物実測図2

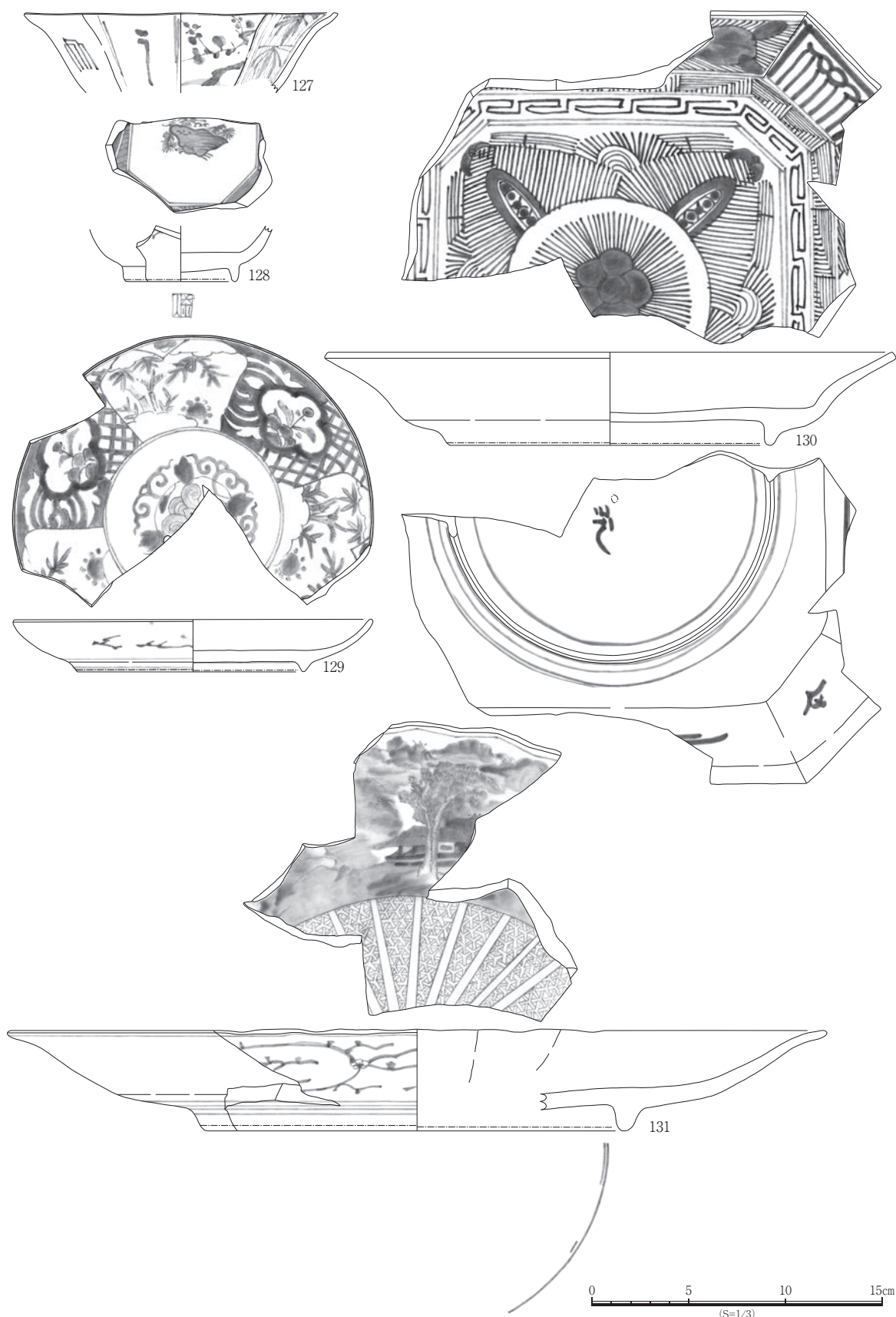


図43 表採遺物実測図3

3. 検出遺構と出土遺物

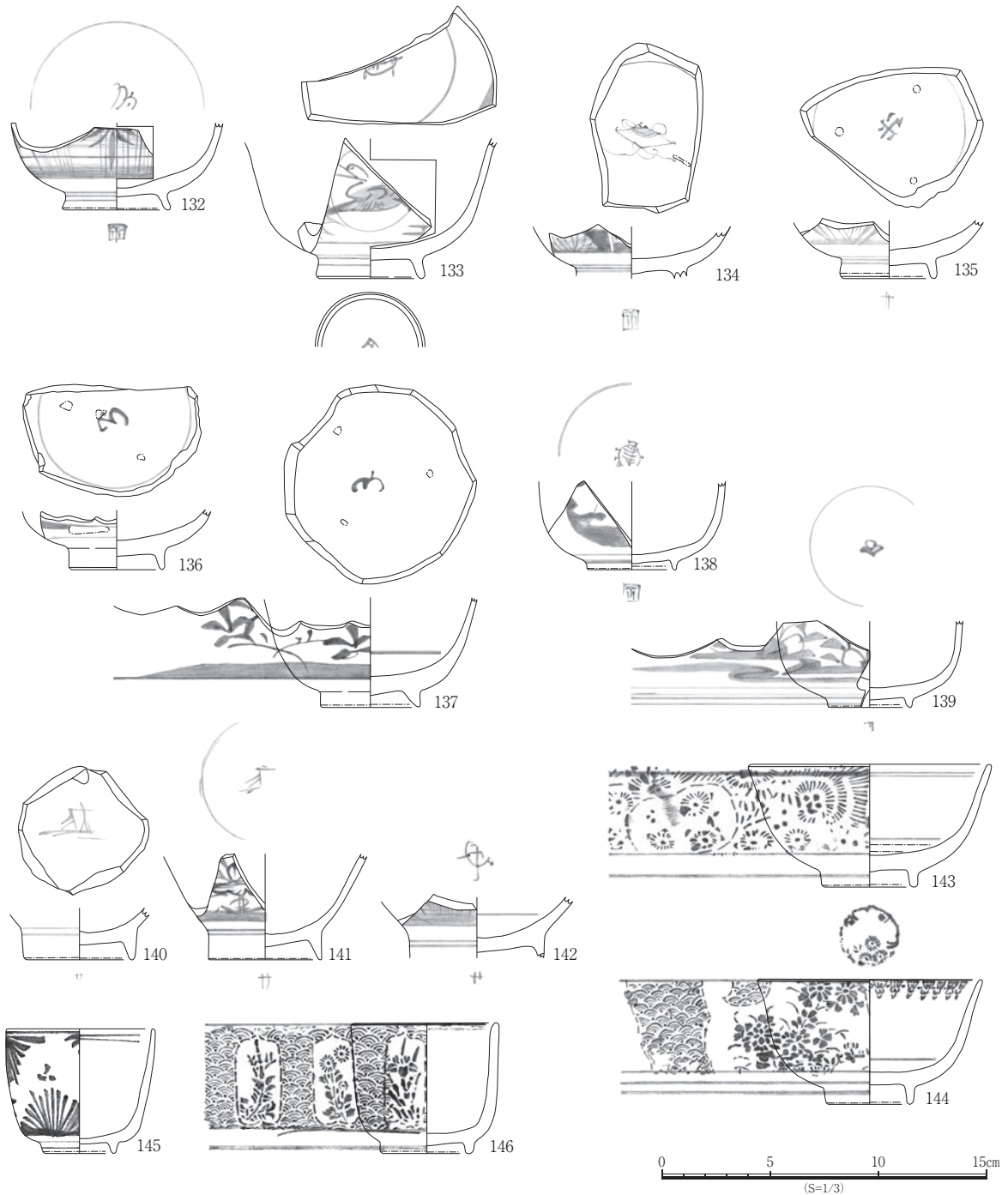


図44 表採遺物実測図4

付される。129は色絵により内面に竹垣文(緑), 牡丹・花文(赤緑)が区画間に配される。見込みは牡丹唐草文, 外面は崩れた唐草文と圏線が呉須によって描かれる。130も角皿で八角体の内面見込みに矩形文と雷文帯, 中央は草花文と思われる。外面高台は圏線が巡り, 周縁に草花文が描かれる。呉須は鮮やかな発色である。131は肥前産の大皿で, 口縁部はやや外反し輪花状を呈する。内面は扇子に山水文, 外面は花唐草文と圏線が描かれる。

132～146は碗で, この内132～142は能茶山窯のものである。132は腰張型の蓋物である。外面多

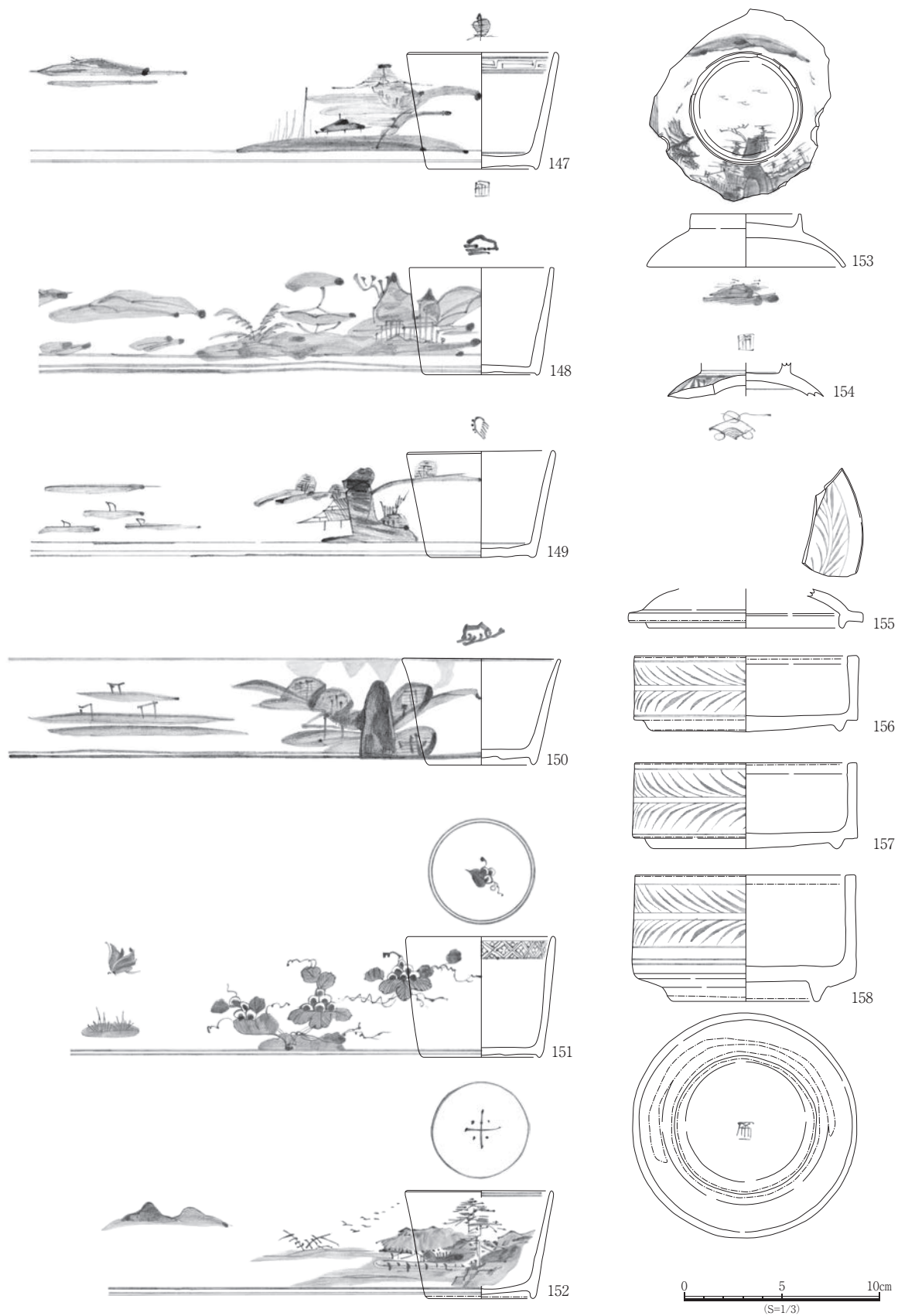


图45 表採遺物実測図5

3. 検出遺構と出土遺物

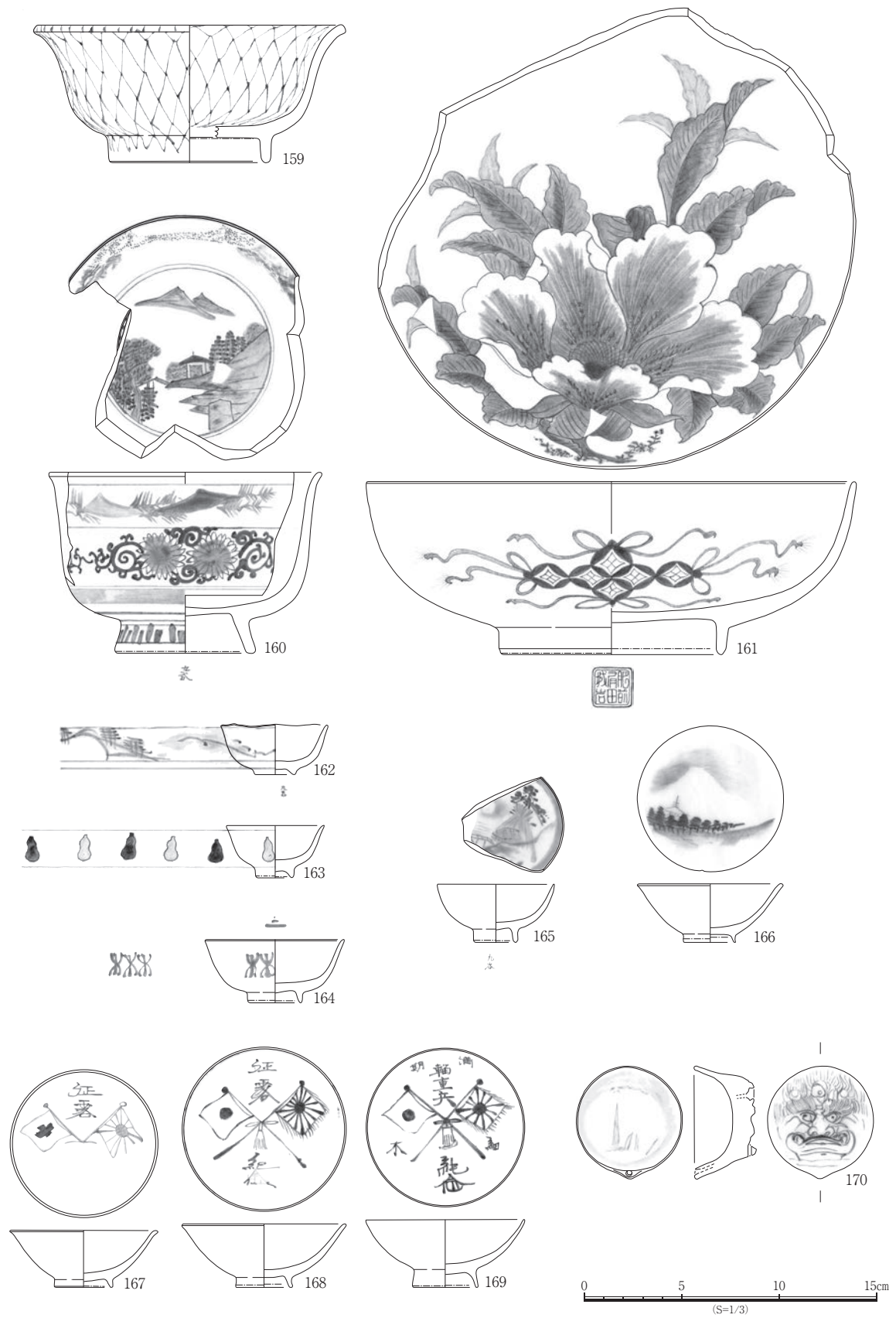


図46 表採遺物実測図6

重格子文，笹文が描かれ，内面見込み圏線内に岩文，外面高台内に「茶」の銘が施される。133の内面見込みに亀文，口縁部は多重圏線，外面に鶴と草文が描かれる。高台内に「茶」の銘が施される。134は見込み圏線内に宝文，高台内に「茶」の銘が施される。135は内面見込み圏線内に崩れた十字花文，外面高台内に「サ」の銘が描かれる。内面見込みに三箇所のハマ痕が残る。136は内面見込み圏線内に崩れた蝙蝠文が施される。137は内面見込み圏線内に崩れた蝙蝠文，外面に草花文が呉須により描かれる。細かい貫入が入る。138は内面見込み圏線内に亀文，外面に丸文が描かれる。高台内に「茶」の銘が施される。139は内面見込み圏線内に宝文，外面は草花文が描かれる。高台内「サ」の銘が施される。140～142は広東形碗である。140は内面見込みに舟文，外面高台脇に圏線，高台内に「サ」の銘が淡い呉須によって描かれる。141は内面見込み圏線内に舟文，外面花卉文と圏線，高台内に「サ」の銘が描かれる。呉須の発色は黒色である。142は内面見込み圏線内に亀文，外面高台内に「サ」の銘が施される。143・144は瀬戸美濃系の型紙摺りの碗である。143の内面は見込み蛇ノ目釉剥ぎ，口縁部に圏線，外面に菊花文が描かれる。144は内面見込みに三友文，口縁部に瓔珞文，外面に青海波の区画文に草花文が描かれる。呉須は鮮やかな発色である。145は小碗である。内面口縁部に二重圏線，外

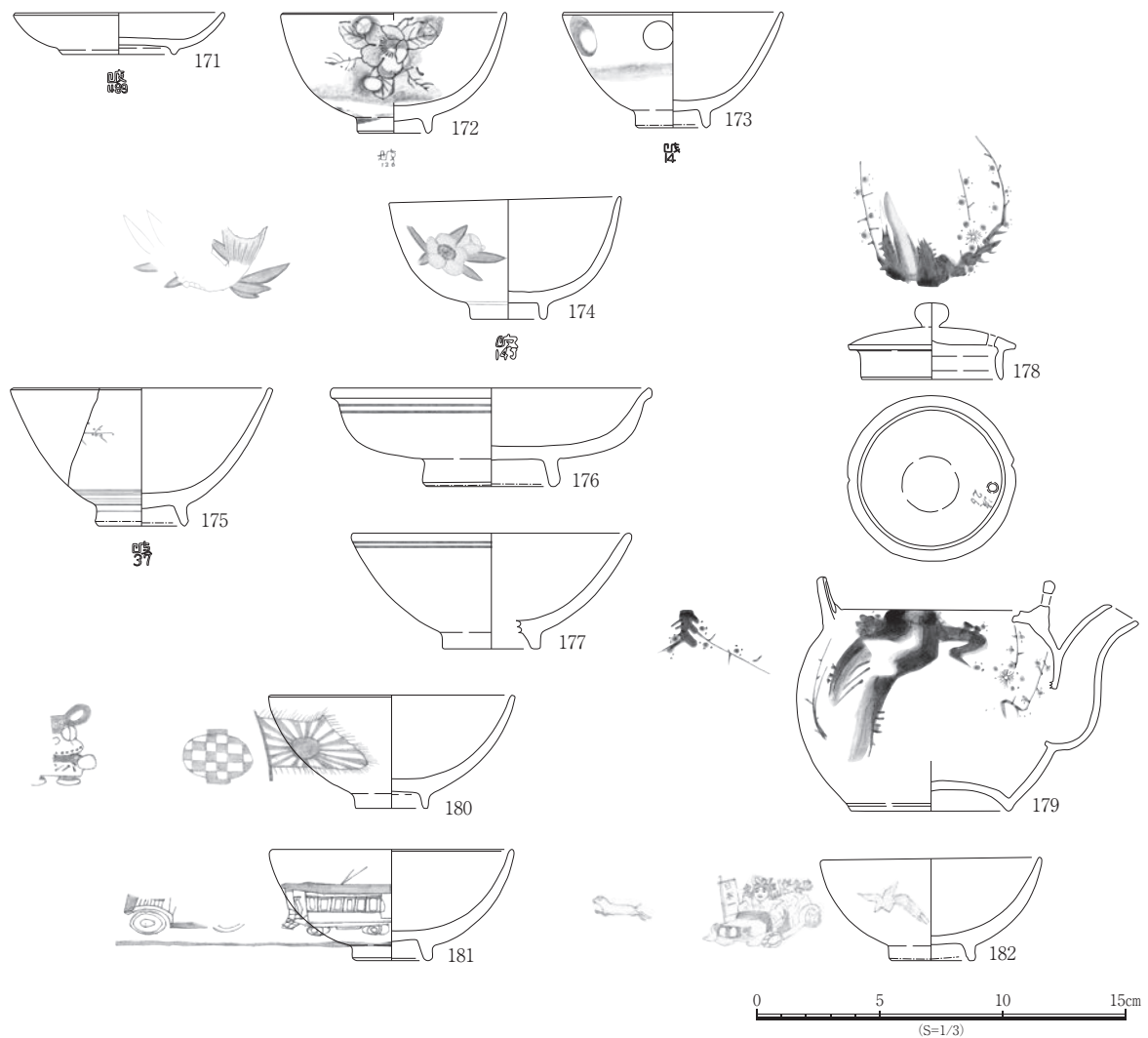


図47 表採遺物実測図7

3. 検出遺構と出土遺物

面は上下に半菊文、間に三友文が鮮明な発色の呉須で描かれる。146は瀬戸美濃系型紙摺りの筒形碗である。外面は青海波地に連子格子、菊花・菖蒲文の型窓絵が描かれる。呉須は鮮明な発色である。

147～152は猪口である。149を除き、能茶山窯のものであると考えられる。147は内面見込みに寿文、口縁部雷文帯、外面は山水楼閣文が描かれる。外面底部は中央に「茶」の銘がみられる。148は内面見込みに波頭文、外面に山水楼閣文が描かれる。口縁部は口鑄が施される。149は黒色の濃い呉須により内面見込みに波頭文、外面に山水楼閣文が細い線画で描かれる。150は内面見込みに波頭文、外面に山水楼閣文が鮮明な発色で描かれる。口縁端部にも呉須が施される。151は内面口縁部に四方襷文、見込みに葡萄文、外面逆さ葡萄文と草、蝶文が描かれる。147～151は蛇ノ目高台である。152は内面見込みに米印文、外面には松樹と磯辺山水文が描かれる。口縁部にはやや歪みがみられる。

153～155は蓋で、いずれも能茶山窯の製品である。153は外面に山水楼閣文が細い線画で全面に描かれる。内面は舟文、呉須は黒色を呈す。154は見返しに宝文、外面草花文、つまみ内に「茶」の銘が描かれる。155は外面圏線と草文様の染付が巡る。釉には細かい貫入が入る。

156～158は段重である。155の蓋と合わせて一組となる。いずれも上下の圏線間に草の文様が巡り、釉には細かい貫入が入る。156・157の外面底部は施釉される。最も下となる158は外面下部の圏線が二重となる。断面三角形の高台で、高台内に「茶」の銘が施される。高台畳付は釉剥ぎである。

159～161は鉢である。159の体部は内湾し、口縁部は外方に開く。内外面に網目文が施される。160は九谷焼の深鉢である。内面見込み二重圏線内に呉須による山水楼閣文、口縁部に色絵により草花文が描かれる。外面は菊花唐草文、高い高台内に「九谷」の銘がみられる。161は肥前産の法量の大きい鉢である。内面に呉須と金・赤の彩色により大牡丹文、外面は呉須により七宝文が描かれる。高台内に「肥前有田城岩」の銘がみられる。

162～170は小杯である。162は型打成形で、口縁部は輪花状を呈する。外面は呉須により唐草文、高台内に「九谷」の銘がみられる。163の外面は、上下圏線間に濃淡の呉須によって交互に瓢箪が描かれる。164の外面は濃い呉須により印判手草文、口縁部には口鑄が施される。165の内面に山水楼閣文、外面高台内に「九谷」の銘がみられる。166の内面は淡い呉須により松樹と州浜、塔と富士が描かれる。

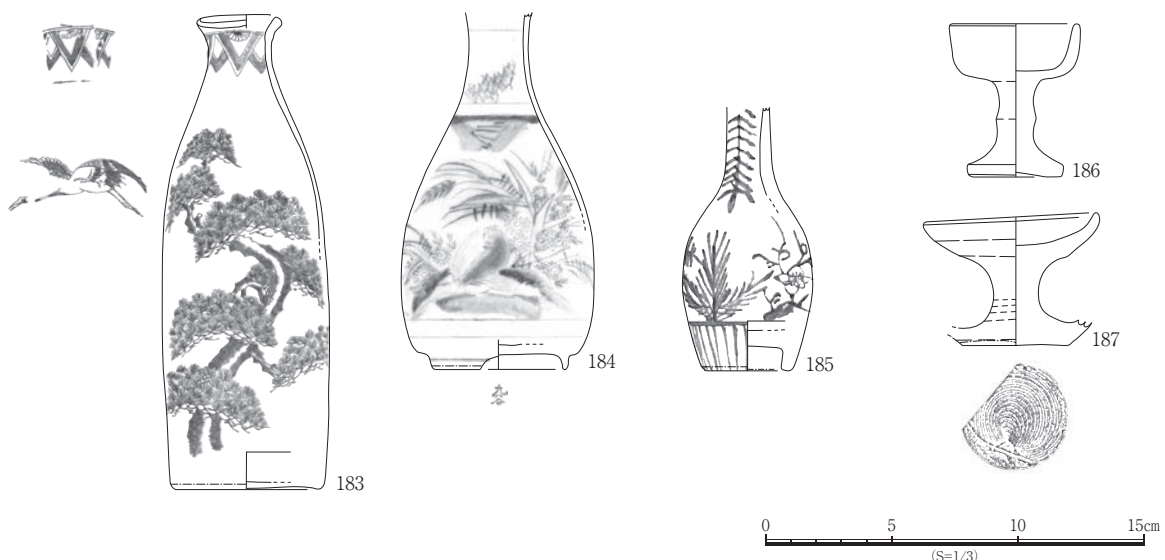


図48 表採遺物実測図8

167～169はいずれも一般に軍盃や兵隊盃と呼ばれている。167は内面に旭日旗と赤十字旗，縦書きで「征露」の文字が金と赤の染付によって描かれる。口縁端部はやや外反する。168は内面に旭日旗と日章旗，縦書きで「征露紀念」の文字が金の染付によって描かれる。口縁端部にも染付が施される。日露戦争終戦時のものと考えられる。169は金の染付により旭日旗と日章旗，「満期」「細木」(横書き右から)，「軸重兵」「紀念」(縦書き)の文字が描かれる。170は鬼面盃で，一端に穿孔がみられる。内面は色絵が施されるが剥がれ落ち，詳細は不明である。

171～179は統制陶器である。171は皿で，外面高台内に「岐489」の統制番号の型印が施される。172～175は碗である。172は外面に椿の色絵，外面高台内に「岐126」の呉須印が施される。173は外面に淡い色絵の丸文と圏線が描かれる。外面高台内に「岐14□」の型印が施される。174は外面に色絵で椿と鯛，外面高台内に「岐149」の型印が施される。175は淡い呉須によって外面下半と高台に多重圏線，中位に松樹風の文様が描かれる。外面高台内に「岐37」の型印が施される。176は皿，177は碗で，いずれも口縁部に緑色の二重圏線が巡る。178は蓋，179は急須である。全面に白磁釉が施され，外面に鉄釉と青・赤釉により梅樹が描かれる。蓋内面に「波26」の染付がみられる。180～182は子供茶碗である。180の外面は旭日旗と千鳥格子の提灯，動物のモチーフ画，181は電車，182は車両に乗る桃太郎と雉と犬がプリントされる。いずれも着色は剥がれる。

183・184は徳利である。183は銅板転写摺りによって松樹と鶴，口縁部に鋸歯文が描かれる。口縁部は文様のずれがみられ，底部は露胎する。184は外面色絵によって草花，鳥が描かれる。高台内に「九谷」の銘が施される。185は小型の瓶で，外面に藤花・梅樹と若松文が描かれる。高台は削り底で，畳付は釉剥ぎである。

186は仏飯器である。全面に青みがかった白磁釉が施される。杯部は浅く，脚部中位に稜を持つ。底部は削り出し，中央部は凹む。187は台付灯明皿である。ロクロ成形で，底部脇まで鉄釉が施される。底部切離しは回転糸切りである。

188～190は碇子である。188は「Y.O.式 新案特許」の型印が施される。189は玉碇子で褐色の釉が

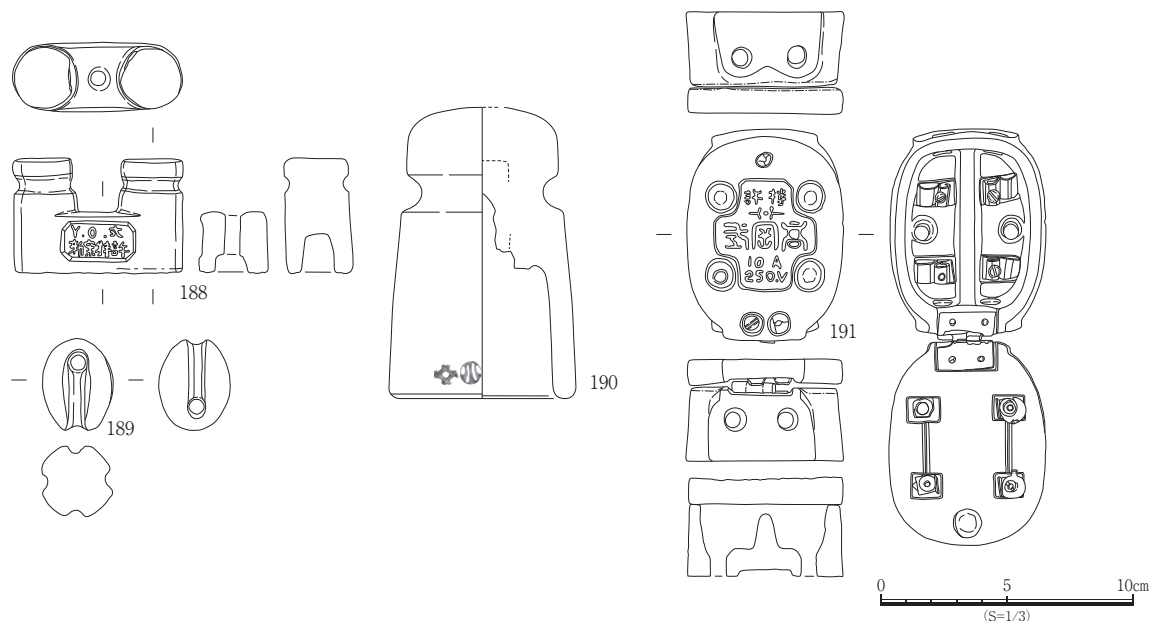


図49 表採遺物実測図9

3. 検出遺構と出土遺物

施される。190は大型の碇子で、四国電力の記号が染付される。191は屋内配線用の開閉安全器である。「特許」「高岡式」(右から),「10.A」「250.V」(左から)の型印が施される。

瓦は全て棧瓦で、軒丸瓦、軒瓦、平瓦が出土しているが、ここでは主に刻印があるものについて抽出し、図示した。192は軒丸瓦である。右巻きの三巴文で、珠文は13個になるものと思われる。丸瓦部にヘラ状工具によるミガキが施され、瓦当に「□島田」の刻印がみられる。193～204は軒瓦で、193・194は橘文、193の中心飾りは三巴文、唐草は2反転で飛び唐草が付き脇区の刻印は「□王(もしくは玉)」, 194は「寶王(もしくは玉)」である。195の脇区の刻印は「蒲林」である。196・198～204の中心飾りは三巴文、197は二巴文である。抽出したものについては、右巻きと左巻きはほぼ同数であった。いずれも唐草は2反転で飛び唐草が付く。刻印においては、196が「岩入文」、197が「蒲百」、198が「佐川近藤長枝」、199が「アキ□」、200が「廣□」、201が「佐川田村亥太郎」か、202が「天柳」、203が「王仲」、204が「佐川」である。205～208は平瓦で、刻印のみ記載した。205は「柴□」、206が「アキ増」、207が「岩入文」、208が「□政」である。

⑦ガラス瓶(図52・53 209～224)

西浦遺跡では、表採資料ではあるが多くのガラス瓶が出土した。これらの中から年代や販売元等が把握できるものについて、以下にまとめる。

209～217は牛乳瓶である。209～213は内ネジ式の牛乳瓶で、五勺瓶と一合瓶がある。全て無色透明でナデ肩、スクリュウ栓である。209は「五勺」「消毒全乳」「武藤牧場 電話六三三番」、210は「五勺全乳」「安藝町 藝陽牧場 電話六番」、211は「五勺全乳」「高知市外梅ノ辻 牧牛社 電話五六五番」の陽刻がある。いずれも五勺瓶である。212は211と同じ陽刻であるが、容量の表記はなく、一合瓶である。また、同じく一合瓶で、213は「一合 消毒全乳」「野村商光社 電話一一〇〇番」、蓋に「高知牛乳販売組合」の陽刻が施される。209・212・213は内ネジ式の蓋が付いた状態で出土した。これらの内ネジ式の牛乳瓶は、明治18～33年(1885～1900)に流通している。214は王冠栓の牛乳瓶で、「低温殺菌全乳」「香長ミルクプラント 電話一〇九番」「一.八分(デシリットル)入」(以上すべて右から)の陽刻を持つ。王冠栓は大正末頃から流通し昭和2年(1927)に法により使用が義務付けられた。215は広口型の牛乳瓶で、紙栓であったものと思われる。「特濃 牛乳」「DELUXE」と印刷されるACL瓶

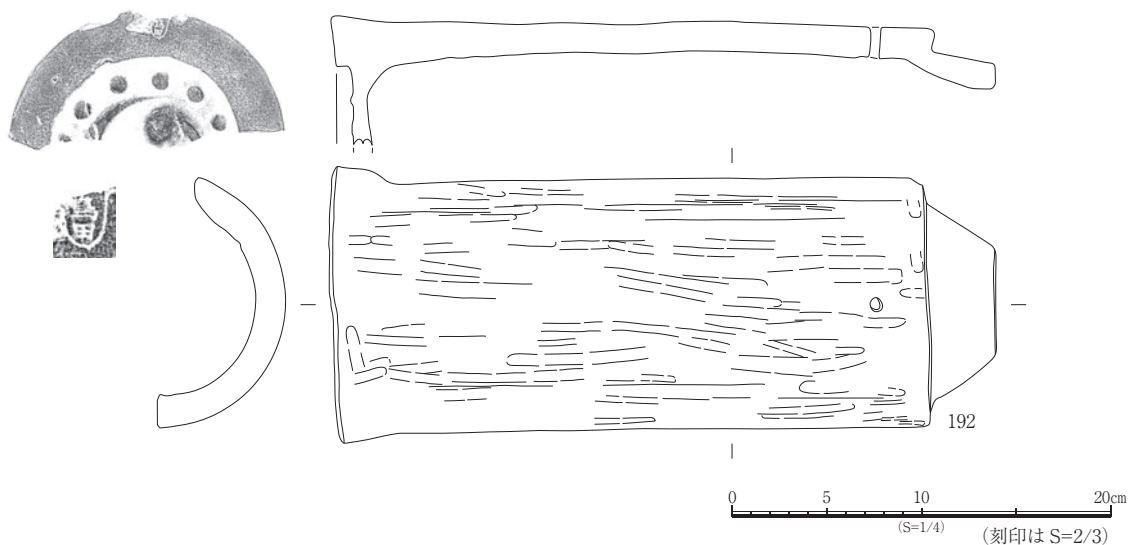


図50 表採遺物実測図10



図51 表採遺物実測図11

3. 検出遺構と出土遺物

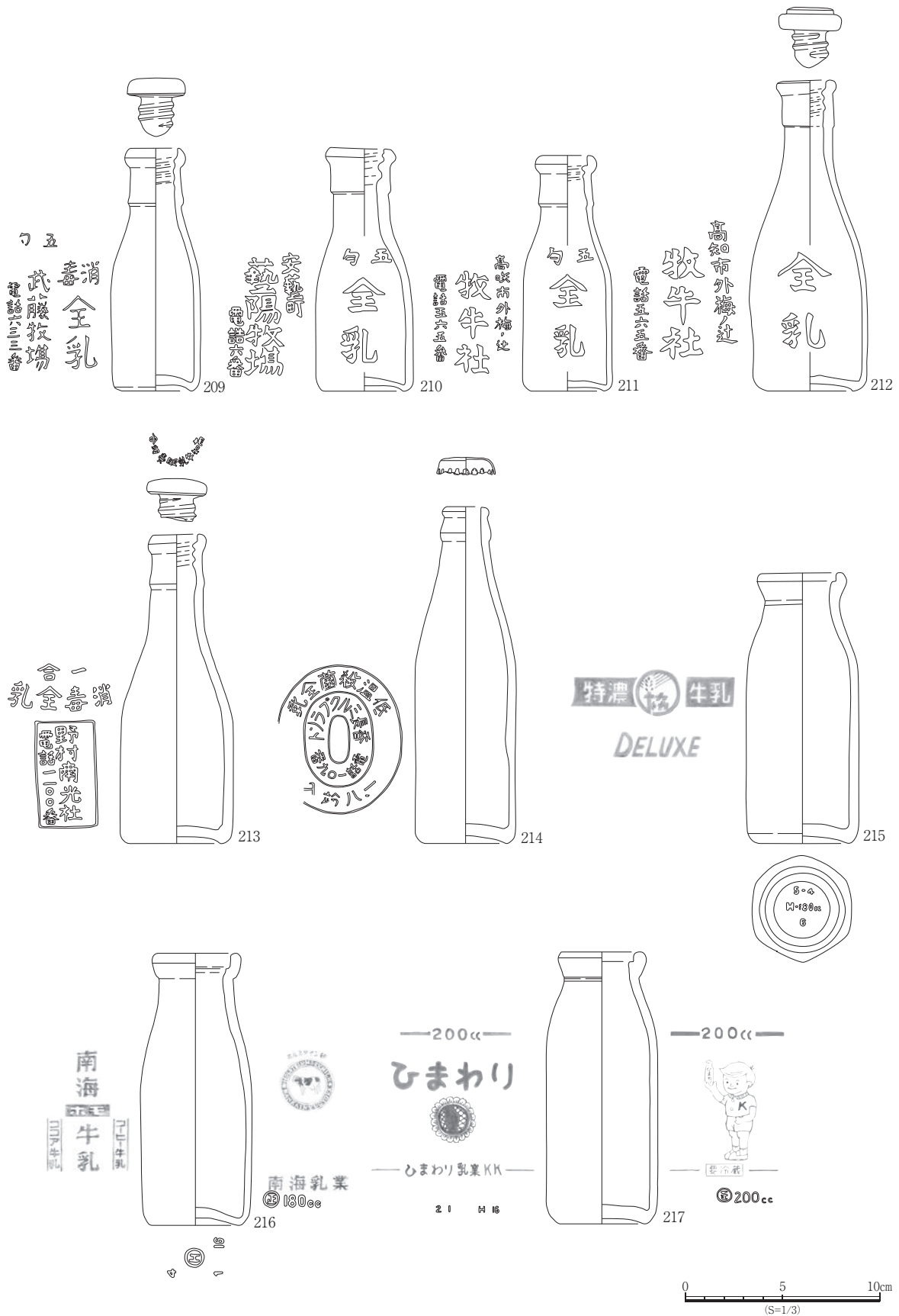


図52 ガラス瓶実測図1

である。底部に「S-4」「H-180cc」「6」の陽刻があり、断面形は六角形を呈する。戦後から昭和31年(1956)まで流通した。216は「南海 ホモ 牛乳」「コーヒー牛乳」「ココア牛乳」「南海乳業」と印刷される広口のACL瓶である。「南海牛乳」は昭和48年(1973)に「ひまわり牛乳」と合併するまで運営されていた会社名である。胴部下位に「正180cc」、底部に「4 H 1 16」の陽刻がみられる。戦後から昭和48年(1973)頃まで流通した。217は「200cc」「ひまわり」「ひまわり乳業KK」「200cc」「要冷蔵」が印刷され、「21 H16」「正200cc」の陽刻がみられる。昭和56年(1981)以降に生産されたものである。

218～223は汽車茶瓶である。218は「茶壺」「株式会社 名古屋硝子製造所」「新案登録第六三七七四号」、219・220は「神戸鉄道局指定」「御茶」「定價七錢」「西管営業人組合考案」「酒井硝子製造所製造」「新案登録第 号」の陽刻がある。側面に紐掛用の凹みがみられる。221～223はそれぞれの蓋で、コップ代わりとして使用されていたものと思われる。ガラス製の汽車茶瓶は大正11年(1922)に鉄道省によって衛生上の理由で土瓶が禁止され、昭和4年(1929)まで使用された。224は医療用薬瓶である。目盛りとともに「高知病院」の陽刻がみられる。明治31年(1898)に高知陸軍衛戍病院として設立、昭和20年(1945)に発足した国立高知病院のものと思われる。当時から現在まで高知市朝倉に位置する。目盛りは比較的短く、病院名が陽刻されるようになった大正末頃から、医療用薬瓶に硬質ガラス(ホウケイ酸ガラス)が使用されるようになる戦中頃までのものと推測される。

本遺跡ではその他多くのガラス瓶が採取された。図示できなかつたものも含めて次の表に詳細を掲載する。

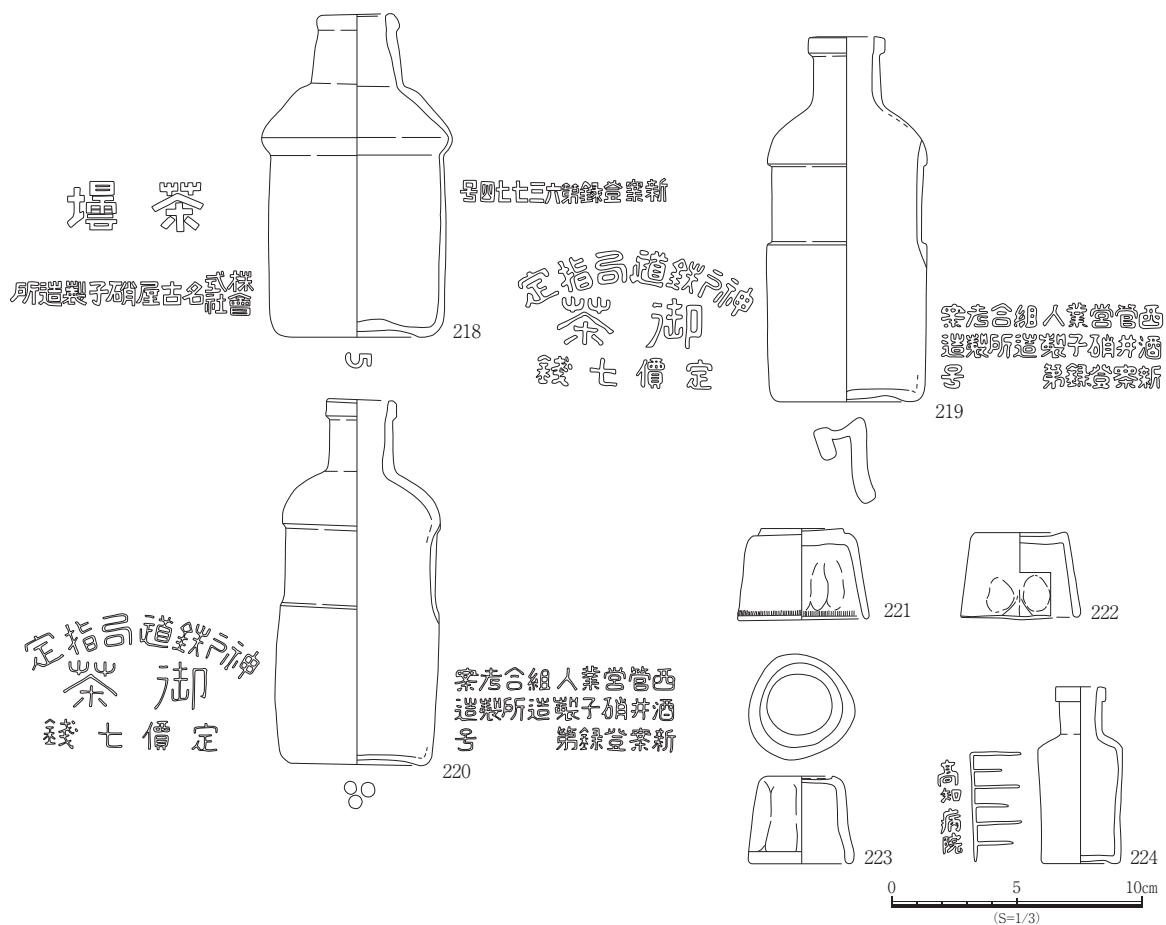


図53 ガラス瓶実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

西浦遺跡出土ガラス瓶1

分類	器種 (図版番号)	点数	色調	印刷・陽刻 (エンボス)	販売元沿革等	特徴	流通年代
酒瓶	ビール瓶	2	薄緑色透明	「大日本麦酒株式会社」	大日本麦酒株式会社 明治39年(1906)設立,昭和24年(1949)集中排除法によって解体		戦前
酒瓶	ビール瓶	1	茶色透明	「キリンビール 商標○登録」		正マークあり	昭和31年(1956)～1960年代前半か
酒瓶	ワイン瓶	1	茶色透明	「BOTTLED AND GUARANTEED BY KOTOBUKIYA CO.」	明治32年(1899)開業の鳥井商店(寿屋)が明治40年(1907)に発売		明治40年(1907)～大正期
酒瓶	ワイン瓶	1	無色透明	「SHIRATAMA WHITE WINE」	大正8年(1919)創業の白玉ホワイトワインが発売する。昭和38年(1963)シャルマンワインとなる		大正8年(1919)～昭和38年(1963)
酒瓶	日本酒瓶	1	無色透明	-	昭和39年(1964)「ワンカップ大関」が登場	コップ型 ナーリングなし	昭和39年(1964)～1960年代か
酒瓶	洋酒瓶	1	無色透明	「45」	大正9年(1920)設立の東洋醸造(現旭化成)が昭和20年(1945)に発売	大ボトル	昭和20年(1945)～
酒瓶	洋酒瓶	1	無色透明	「TOYO BREWING.CO.LTD」	大正9年(1920)設立の東洋醸造(現旭化成)が昭和20年(1945)に発売	小ボトル	昭和20年(1945)～
飲料瓶	サイダー瓶	1	緑色透明	「キヨ水商会 三ツ葉○サイダー」			
飲料瓶	サイダー瓶	1	薄緑色透明	「株式会社布引鉱泉所製造○」	株式会社布引鉱泉所 明治32年(1899)創業		明治32年(1899)～
飲料瓶	サイダー瓶	1	緑色透明	「商標○登録 日本麦酒鉱泉株式会社」	大正11年(1922)日本麦酒鉱泉株式会社が「三ツ矢サイダー」発売		大正末～昭和初期
飲料瓶	シロップ瓶	1	無色透明	「DRINKS」	-	ナーリングなし	
飲料瓶	シロップ瓶	1	無色透明	「National Drinks NET180cc」	-	ナーリングなし	
飲料瓶	乳酸菌飲料瓶	1	無色透明	「カルピス CALPIS」	大正6年(1917)設立ラクター株式会社(現カルピス食品工業株式会社)	正マークなし	昭和22年(1947)～31年(1956)
飲料瓶	乳酸菌飲料瓶	1	茶色透明	「カルピス CALPIS 正 334ml」	大正6年(1917)設立ラクター株式会社(現カルピス食品工業株式会社)	正マークあり	昭和31年(1956)～
飲料瓶	乳酸菌飲料瓶	1	緑色透明	「□□コーラス」	-		-
飲料瓶	ニッケ水瓶	2	無色透明	-	-		-
飲料瓶	自動車茶瓶・蓋 (219・220・221・222)	2	薄青色透明	「神戸鉄道局指定 御茶 定価七錢 西管営業人組合考案 酒井硝子製造所製造 新案登録第 号」	神戸鉄道局(通称西管) 大正9年(1920)設立,昭和3年(1928)大坂鉄道局に改称	蓋有り	大正11年(1922)～昭和3年(1928)
飲料瓶	自動車茶瓶・蓋 (218・223)	1	薄青色透明	「茶壺 株式会社名古屋硝子製造所 新案登録第六三七七四号」	-	蓋有り	大正11年(1922)～昭和4年(1929)
乳製品瓶	牛乳瓶 (213)	1	無色透明	「一合 消毒全乳 野村商光社 電話一一〇〇番」(本体)「高知牛乳販売組合」(蓋)	-	内ネジ式一合瓶	明治20年(1887)～33年(1900)
乳製品瓶	牛乳瓶 (212)	1	無色透明	「全乳 高知市外梅ノ辻 牧牛社 電話五六五番」	牧牛社 明治20年代前半～戦後	内ネジ式一合瓶 蓋有り	明治20年代後半～33年(1900)
乳製品瓶	牛乳瓶 (211)	1	無色透明	「五勺 全乳 高知市外梅ノ辻 牧牛社 電話五六五番」	牧牛社 明治20年代前半～戦後	内ネジ式五勺瓶 蓋なし	明治20年代後半～33年(1900)
乳製品瓶	牛乳瓶 (209)	1	無色透明	「五勺 消毒全乳 武藤牧場 電話六三三番」	-	内ネジ式五勺瓶 蓋有り	明治20年(1887)～33年(1900)
乳製品瓶	牛乳瓶 (210)	1	無色透明	「五勺 全乳 安藝町 藝陽牧場 電話六番」	-	内ネジ式五勺瓶 蓋なし	明治20年(1887)～33年(1900)
乳製品瓶	牛乳瓶 (214)	1	無色透明	「低温殺菌全乳 香長ミルクプラント 電話一〇九番 一・八分入」	香長ミルクプラント 戦前～昭和25年(1950)	王冠栓	昭和2年(1927)～9年(1934)

西浦遺跡出土ガラス瓶2

分類	器種	点数	色調	印刷・陽刻（エンボス）	販売元沿革等	特徴	流通年代
乳製品瓶	牛乳瓶 (215)	1	無色透明	「特濃〇牛乳 DELUXE S-4 H-180cc 6」	-	ACL 胴部六角形 広口瓶	昭和前半～31年 (1956)
乳製品瓶	牛乳瓶	1	無色透明	「Meiji Milk 明治牛乳 正 180cc」	明治乳業株式会社の前身、極東練乳設立は大正6年(1917)。高知への参入は戦後	ACL 胴部丸型 広口瓶 180cc	昭和31年(1956)～48年(1973)
乳製品瓶	牛乳瓶 (216)	1	無色透明	「南海ホモ牛乳 コーヒー牛乳 ココア牛乳 ホルスタイン印〇 南海乳業 正 180cc 4 H 1 16」	南海牛乳 昭和23年(1948)設立、昭和48年にひまわり乳業株式会社と合併	ACL 胴部丸型 広口瓶 180cc	昭和31年(1956)～48年(1973)
乳製品瓶	牛乳瓶 (217)	1	無色透明	「200cc ひまわり ひまわり乳業 KK 21 H16 200cc 要冷蔵 正 200cc」	ひまわり乳業株式会社 昭和46年(1971)設立	ACL 胴部丸型 広口瓶 200cc	昭和45年(1970)以降
乳製品瓶	ヨーグルト瓶	1	無色透明	「乳酸菌飲料 中研ヨーグルト TEL ② 2640」	-	ACL 胴部丸型 広口瓶 135cc	昭和30年代か
乳製品瓶	ヨーグルト瓶	1	無色透明	「ヨーグルトミルク 味と栄養いつも一緒 高知牛乳 90ml」	高知牛乳食品株式会社 昭和46年(1971)にひまわり乳業株式会社に社名変更	ACL 胴部丸型 広口瓶 90cc	昭和30年代～46年(1971)
調味料瓶	醤油瓶	1	薄青透明	「TRADE〇MARK MARUKIN SHOYU CO Ltd NET 100cc」	-	小瓶	昭和30年代か
調味料瓶	醤油瓶	1	薄青透明	「HIGASHIMALU 正 cc」	-	一升瓶	昭和31年(1956)以降
調味料瓶	ソース瓶	1	薄青透明	「ANCNOR KRAND RECISTERD」	-		戦前～戦中
調味料瓶	ケチャップ瓶	1	無色透明	「KAGOME CO」	-		昭和32年(1957)～42年(1967)
食品瓶	佃煮瓶	1	薄青透明	「磯志まん」	磯志まん株式会社 大正15年(1926)操業	スクリュー栓	大正15年(1926)～昭和10年(1935)
食品瓶	佃煮瓶	2	薄青透明 無色透明	「磯志まん」	磯志まん株式会社 大正15年(1926)操業	王冠栓	昭和10年(1935)～25年(1950)
食品瓶	佃煮瓶	1	薄青透明	カゴメマーク	-		
食品瓶	雲丹瓶	1	無色透明	「雲丹」	-		
食品瓶	ふりかけ瓶	3	無色透明 薄緑色透明	-	-		
薬瓶	医療用薬瓶 (224)	1	薄青色透明	「高知病院」 目盛り	-		
薬瓶	医療用薬瓶	12	-	目盛り	-	小型	
薬瓶	薬品瓶	4	-	目盛り	-	中型	
薬瓶	薬品瓶	3	-	目盛り	-	大型	
薬瓶	一般用薬瓶	1	青色透明	「神薬」	-		
薬瓶	一般用薬瓶	1	無色透明	「タムシ液 水谷製剤」	-		
薬瓶	一般用薬瓶	1	青色透明	「カトウ (右から) コロダイン」	-		
薬瓶	目薬瓶	1	青色透明	「本舗 山田 (安民) ロート目薬」	-		明治42年(1909)～昭和6年(1931)
薬瓶	目薬瓶	1	青色透明	「健眼目薬」	-		

3. 検出遺構と出土遺物

西浦遺跡出土ガラス瓶3

分類	器種	点数	色調	印刷・陽刻（エンボス）	販売元沿革等	特徴	流通年代
薬瓶	目薬瓶	1	薄青色透明	「EYE WATER ROHTO」	-	スポイド型	昭和6年（1931）～ 37年（1962）
薬瓶	目薬瓶	2	薄青色透明 薄桃色透明		-	スポイド型	
薬瓶	殺虫剤瓶	1	薄青色透明	「フマキラー 大下回春堂本舗」	-		大正9年（1920）～ 昭和37年（1962）
化粧瓶	化粧水瓶	1	無色透明	「平尾製岳陽堂」	-		
化粧瓶	化粧水瓶	1	無色透明	「ホワイトビニウ 意匠登録」	-		
化粧瓶	椿油瓶	1	無色透明		-		
化粧瓶	整髪料瓶	1	無色透明	「COSME ELWGANCE HAIR-OIL 意匠登録」	-		
化粧瓶	整髪料瓶	1	無色透明	「Tanchō hair cream 1-66」	-		
化粧瓶	化粧クリーム瓶	2	白色不透明	「ウテナのマーク」	-		
化粧瓶	化粧クリーム瓶	2	白色不透明	「レート（右から）」	-		
化粧瓶	白粉瓶	2	無色透明	桃と蜻蛉	-	一つ蓋あり	
化粧瓶	歯磨き粉瓶	1	無色透明	「Lion」	-		
文具瓶	インク瓶	1	無色透明	「MARUZEN'S ATHENA INK」	-	丸型	大正5年（1916）～
文具瓶	インク瓶	5	無色透明 薄青色透明		-		
日常生活瓶	白髪染め瓶	1	薄緑色透明	「THE HAGOROMO」	-	スクリュー栓	
日常生活瓶	白髪染め瓶	2	無色透明	「羽衣」	-	コルク栓	
日常生活瓶	白髪染め瓶	1	薄緑色透明	「羽衣 定量 HAGOROMO」	-		
日常生活瓶	白髪染め瓶	1	無色透明	「元禄 定量（右から）」	-		戦前
日常生活瓶	白髪染め瓶	1	無色透明	「元禄 定量 GENROKU」	-		
日常生活瓶	白髪染め瓶	1	薄青色透明	「君の代 定容（右から）」	-		
日常生活瓶	白髪染め瓶	5	無色透明	「るり羽 定容（右から）」	-	コルク栓	戦前
日常生活瓶	白髪染め瓶	3	無色透明	「るり羽 定量」	-	スクリュー栓	戦前
日常生活瓶	白髪染め瓶	2	無色透明	「るり羽 定量 過酸化水素水 13cc 大阪堂島 上一 山発産業」	-	スクリュー栓	戦後
日常生活瓶	白髪染め瓶	1	薄青色透明	「るり羽 定量」	-		戦後

第四章 考察

1. 検出遺構について

(1) E区

E区では中世の掘立柱建物跡を4棟検出した。この内、SB1～3は調査区中央部で切り合って検出され、同じ場所で建替えしていたものと考えられる。SB5は調査区南部の奥まった位置で検出し、SB1～3の母屋の付属的建物になる。また、SD3はSB1～3の雨落ち溝になる。これらの建物跡の山側には等高線に沿って掘られたSD7があり、一部岩盤も掘り込まれている。溝跡の床面標高から推察すると、山側からの水を遮断し西側の谷に向けて排水用に掘り込まれた溝跡と考えられる。柵列はSA1～5の5列を検出した。SA2a・b及びSA3は西側の谷部との境界に設けられた柵列であり、SB1～3との併存も考えられる。SA2aとbの間はSD1の溝状の落ち込みがあり、屋敷地への入口とも考えられるため、北列と南列を分けた。また、SA1はSA2と平行していることから、調査区北西部からのアプローチも考えられる。

近世の遺構では掘立柱建物跡SB4及び、SK11・12・16の土坑を検出した。SK11・12は調査区北部で検出し、複数の土坑との切合いが認められた。SK12からは毛抜きと「寛永通寶」他銭貨4点が出土しており、土坑墓の可能性が考えられる。他に唐津産の白化粧土をハケ塗りした皿片と、陶器碗、土師質土器皿片などが出土しており、出土遺物から18世紀(肥前Ⅳ期：1690～1780)頃に位置づけられる。⁽¹⁾ また、調査区南部のSK16も土坑墓と考えられ、鉄刀と寛永通寶、陶器皿が出土した。出土遺物からはSK12と同時期と考えられる。SA4はSK12の南側に位置していることから、SB1～4の掘立柱建物跡と北側の土坑群を画する柵列ではないかと思われる。また、SD2・6は屋敷地の南部を区画する溝跡である。

E区の西側は谷部であり、SA3の柵列を境に西側に向かって地形が下がる。中世の堆積層はこの落ち込み部分を中心に堆積しており、中世段階の屋敷地はSA3を境に東部及び南部のSD2・3に画される範囲に広がっていたものと思われる。

(2) W区

W区では調査区の南西部において中世の掘立柱建物跡を2棟検出した。この地点は谷部に接する丘陵の緩斜面であり、中世の遺物包含層も削平されずに堆積が残っていた。これらの掘立柱建物跡は谷部に平行する棟方向を持つものと、直交する棟方向を持つものがある。SB1は東西棟であり、柱穴からは細片のみの出土であり、時期の詳細は不明である。しかし周辺のピット及び遺物包含層からは15世紀代の遺物がみられることから、この時期の建物跡であると考えられる。またSB2は南北棟であり、SB1との切合いが認められる。建物跡の柱穴からは土師質土器細片、青磁片、瓦質土器片が出土しているが建物の新旧関係については不明である。また、検出された掘立柱建物跡を構成する柱穴以外のピットからも土師質土器片や備前焼片などが出土しており、建物の建替等があったものと思われる。調査区の大半は、現在の宅地化により丘陵部の削平と造成が行われており、中世の遺構面は調査区南西部でしか検出されなかったが、E区と同じ様に谷部の等高線に沿った遺構の広がりがあったものと思われる。

2. 出土遺物について

近世については18世紀代の遺物は僅少出土がみられるものの、明確な遺構は検出されなかった。明治期以降に行われた土地の開墾の影響を受けているものと思われる。

W区では近現代の遺物が多く出土、表採されており、調査区の造成面上で遺構が検出されている。SB3は調査区西部で検出されており、建物の規模から倉庫的な性格を持つ建物が想定される。また、W区北東部では、SB4が検出され、透水層と礎板石を用いた柱穴群が検出された。この建物床面は黄褐色粘土で固く整地されており、柱穴の規模と構造から上部構造は蔵であったものと考えられる。

2. 出土遺物について

(1) 中世

今回の西浦遺跡の調査では、中世の遺物と、近世から近現代の遺物が出土した。中世については室町時代の土器・陶磁器が中心であるが、出土遺物全体に占める割合は少ない。中世の遺物はE区ではIV層、W区では西側の谷部に堆積するIV層から出土した。

E区は、土師質土器213点、瓦質土器9点、常滑焼1点、備前焼24点、青磁15点、白磁1点、青花2点がⅢ・IV層から出土した。土師質土器の内訳は供膳具の杯・皿の細片が197点、鍋・羽釜など煮炊具片が16点であった。供膳具については、杯の形態から13世紀後半から15世紀のものが中心を占める。瓦質土器は鍋片である。陶器では常滑焼の甕片、備前焼の播鉢・甕片が出土しており、備前焼播鉢の口縁部形態からは備前IV期(15世紀)のものと思われる。青磁は稜花皿、蓮弁文碗で、白磁は端反皿、青花は外面に牡丹文が施されたものが出土した。これらの遺物の帰属時期は15世紀が中心である。

W区では土師質土器360点、陶器(備前焼)1点、青磁5点がⅢ・IV層から出土した。土師質土器の内訳は杯・皿など供膳具の細片が339点、鍋・羽釜など煮炊具細片が21点であった。杯の形態から15世紀のものが中心を占める。備前焼は播鉢片で、口縁部を僅かに上方に拡張するものであり、備前IV期(15世紀)前半代のものと思われる。青磁は稜花皿が出土しており、これも15世紀のものである。

これらのことから遺物のピークは15世紀代である。さらにE区においては13世紀後半に遡る遺物も見られる事から、今回の調査地点の東側谷部に一段階古い集落があり、その後、15世紀にかけて西側の谷部に集落が広がっていた事が明らかとなった。

(2) 近世

E区のⅢ層からは唐津産の灰釉が施された皿など、17世紀前半の遺物が出土した。また、18世紀後半の肥前産磁器や、19世紀の能茶山窯の製品など地元の窯で焼かれた碗や皿が多数確認された。時期のピークは17世紀前半と、18～19世紀のものが中心であり、17世紀後半から18世紀前半の遺物は希薄であった。

W区は宅地化による開墾の影響を受けており、近世の遺物はⅢ層で出土した。肥前産の磁器皿・碗や、堺産播鉢など18世紀後半から19世紀の遺物が中心である。その他、地表面及び宅地造成土中で19世紀の遺物を採集した。

(3) 近現代

W区の地表面及びI層中で採集された。19～20世紀代に生産された陶磁器、ガラス製品など多数の遺物が写真図版9の様に廃棄された状況であった。能茶山窯の段重(155～158)や猪口(147～152)な

どが完形で器種ごとに一定の個体数でまとまっていた事から、家屋か蔵に保管されていたものを移転の際に廃棄したものと思われる。19世紀の遺物は肥前産磁器の大皿(V期：1780～1860年代)や、能茶山窯の製品である碗、猪口などがみられる。19世紀後半から20世紀の明治時代の遺物としては瀬戸美濃系の型紙刷りが施された碗・皿や、銅板転写(印判)が施された皿がみられる。また、明治38年(1905)日露戦争の戦勝を記念して「征露」と描かれた小杯や、昭和10年(1935)以前に作られた「高岡式」と書かれた開閉安全器、第二次世界大戦中、昭和15(1940)～18(1943)年に生産された所謂「統制陶器」類がみられ、明治から昭和にかけて家庭で使用されていた雑器及び道具類がまとまって出土している。

また、瓦類は全て棧瓦であり、瓦当は橘文、中心飾りは巴文と唐草文が配される。顎部分には刻印が多くみられ、「アキ」と刻印された安芸で生産された瓦や、さらに「佐川近藤長枝」「佐川田村亥太郎」「佐川」の刻印が施された近隣の佐川で生産された瓦もみられる。

移転する前の家屋に葺かれていた瓦と考えられ、出土遺物から明治から昭和初期に生産されたものと思われる。

3. ガラス瓶からみる近代の高知

(1) 牛乳瓶

近現代出土のガラス瓶のうち、形状から流通した年代が判断可能なものの一つに牛乳瓶が挙げられる。牛乳容器は、衛生上の観点から容器の形状や蓋の材質について、法律により規制を受けている。このため、法律が施行された年代と容器の形態を観察することにより、流通していた年代が推察できる。本遺跡では、内ネジ式、王冠栓、広口断面六角形、広口断面円形の牛乳瓶が出土している。ここからはそれぞれの流通した年代と当時の高知の乳業について触れる。⁽²⁾

①内ネジ式牛乳瓶(明治18～33年)(図52 209～213)

内ネジ式の牛乳瓶は、明治18年(1885)の『牛乳営業取締規則』によってガラス製の容器の使用が義務づけられ、その後明治33年(1900)頃に機械栓が用いられるようになるまで使用された。高知県に乳牛が導入されたのは明治17年(1884)と伝えられている。明治から幕末に活躍した土佐藩の郷士で、土佐勤王党にも在籍した池知退蔵氏の息子、池知春水氏がオーストラリアから乳牛を購入、高知市の高知公園内に「牧牛社」を設立し本格的に牛乳販売を始めた。「牧牛社」はその後高知市の市街化に伴い、高知市外梅ノ辻に移り操業をしていた。昭和10年(1935)には春水氏の息子速水氏が高知県畜産協会を設立するもうまくいかなかった旨の記録が残されているが、昭和20年(1945)の高知大空襲により消失したと伝えられている。当時の「高知県統計書」等の記録に見られるのはこの「牧牛社」のみであるが、その他にも「武藤牧場」「藝陽牧場」など、小規模な牧場が瓶に牧場名を入れ牛乳を販売していたものと思われる。

②王冠栓牛乳瓶(昭和2年～戦前頃)(図52 214)

明治33年(1900)頃になると大都市では機械栓が用いられるようになる。その後王冠栓が用いられるのは大正末頃であり、昭和2年(1927)に『牛乳営業取締規則(新庁令)』で法律により義務づけられた。ミルクプラントと呼ばれる近代的な工場方式で牛乳を生産する工場設備を備えること、王冠栓を以

3. ガラス瓶からみる近代の高知

て密栓することなどが定められたものである。本遺跡では機械栓の牛乳瓶は出土していないが、王冠栓の牛乳瓶には「香長ミルクプラント 電話一〇九番」のエンボスが見られる。この香長ミルクプラントは戦前に現南国市後免町に在籍した大規模な工場である。昭和17年(1942)に周辺の日章村農業会、岩村農業会、前浜農業会が合同で立ち上げたもので、高知海軍航空隊へ牛乳・食料等を納入する軍納組合が、残余の牛乳を香長ミルクプラントに契約送乳していた。戦争の激化や爆撃のため、昭和20年(1945)に一時送乳を中止するも戦後再開し、昭和25年(1950)に高知市棧橋通の高知ミルクプラントに移るまで操業された。⁽³⁾南国市の田村遺跡群でも「香長ミルクプラント」のエンボスを持つ王冠栓瓶(図54)が出土しており、当時の生産量の多さが伺える。

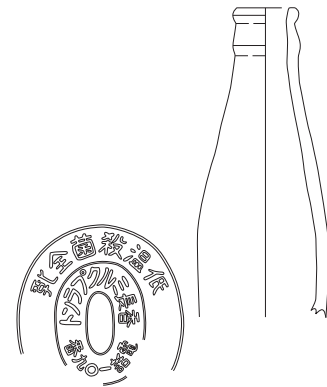
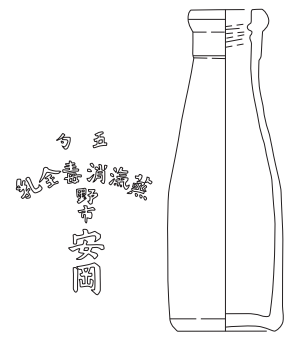


図54 田村遺跡群出土ガラス瓶
遺物実測図

③断面六角形広口瓶(戦後～昭和31年)(図52 215)

広口瓶は昭和の初めから使用されたが、断面多角形状のものは洗いにくい等の理由から次第に使用されなくなり、昭和31年(1956)『通産省令39号』により、牛乳瓶の胴は丸、180mlと定められた。また、ガラス瓶に直接商品名やメーカーが印刷されるACL瓶は戦後に登場する。215の広口瓶の生産者・販売者は不明であるが、高知では昭和28年(1953)

に香長ミルクプラントを運営していた香南酪農協が、高知市棧橋通に進出する。この高知ミルクプラントでは乳牛の増加に従い余剰乳の処置に困り、徳島へ汽車便で発送することになるが、品質管理等の問題が起きる。その結果、高知県に明治乳業が進出することとなる。これにより、新しく酪農を始めるものが増えたとの記録がみられる。⁽⁴⁾

④断面丸形広口瓶(戦後～現在)(図52 216・217)

計量法によって内容量を表記する正マークが用いられるようになったのも昭和31年(1956)からで、その後昭和45年(1970)に農林省が学校給食に供する牛乳の標準容量を200ccと定めた。これ以降180ccのものに替わって200ccの瓶が主流となる。「南海牛乳」は昭和23年(1948)に宇佐酪農産業組合と高吾牧場が合併し設立された。戦後の所謂酪農ブームに伴って規模が大きくなり、昭和27年(1952)に当時四国最新を誇る牛乳処理施設を整備し操業していたが、その後昭和48年(1973)に現「ひまわり乳業(株)」と合併した。一方「ひまわり乳業」は大正11年(1922)に「吉澤牛乳」として創立し、現在も高知県民に愛される地元企業である。昭和46年(1971)に「高知牛乳食品株式会社」から「ひまわり乳業株式会社」、同48年(1973)に「南海牛乳」と合併後、「ひまわり南海乳業(株)」へと社名を変更している。その後、再び同56年(1981)前後に「ひまわり乳業(株)」へと再び変更する。⁽⁵⁾

高知県の乳業は開始当初から全て牛乳販売社が自己の販売に必要な分を飼育する手法で、農家が飼育した農乳が中心である四国の他3県とは異なるものである。このことは戦後の高知の乳業界に大きく影響した。戦中、戦後間もなくは政府が行った飼料の配給が農乳を重視したため、農乳のない高知県への割当は少なく、戦後一時は生産量が著しく減ったと記録されている。その後、戦後の好景気や各組合の努力、明治乳業の参入などによって高知の乳業は目覚ましい復興を遂げた。

(2) 汽車茶瓶

次に、出土した汽車茶瓶より当時のいの町を思い描いてみたい。先にも述べたが、ガラス製の汽車茶瓶が流通したのは、大正11年(1922)から昭和4年(1929)の約8年間である。近世以降いの町では製紙業が盛んであり、材料や製品の運搬には陸路が利用されていたため、明治41年(1908)に高知伊野間で電車が開通していた。しかし、より多く物資や人員を運搬できる鉄道の開通は紙業関係者や近隣住民にとって悲願であった。大正4年(1915)には伊野商工会が鉄道敷設につき陳情を行ったとの記録も見られ⁽⁶⁾、同13年(1924)に念願の鉄道開通となった。陽刻にみられる「神戸鉄道局」の当時の管轄は、東海道米原以西、山陽線柳井津以东および関西線亀山以西、四国である。土讃本線多度津～須崎間が開通したのは昭和10年(1935)であり、それまでは高知県内のみでの運行であった。汽車茶瓶は流通期間が短く破損しやすいため現存するものが少ないといわれているが、本遺跡では、4点出土している(1点は破損)。開通したばかりの国鉄を利用し、購入した汽車茶瓶を持ち帰り後世まで大切に保存していたことから、当時の近隣住民が国鉄開通に際して活気を帯びていたことが伺える。

4. 枝川の変遷

「枝郷」→「枝川村」→「宇治村」→「枝川」へ

当地域、現いの町枝川は天正17年(1589)の『長宗我部地検帳』⁽⁷⁾によると「朝倉庄地検帳」に「枝郷」として記載がみられ、土佐郡に属していた。この朝倉庄の「枝郷」が「枝川」の由来になったとされる。地検帳の記述では長宗我部氏の直轄地で家臣給地となっており、屋敷は六十を数える。「江」「池成」「外池アリ」「池二成残り」など低湿地であったことが伺える記載があり、宇治川の氾濫原であったと思われる。元禄年間の『元禄地払帳』⁽⁸⁾によると本田861石余は御蔵地と生駒木工⁽⁹⁾の知行、新田193石は御貢物地と生駒木工などの知行、山内監物など二名の役知であった事が記載されている。

安永から天明年間(1772～1789)にかけて庄屋楠瀬六右衛門が治水事業を推進し、堤の改修や、井筋の整備を行ったとされる。これにより、収穫・石高も上がったとされるが、洪水時には本流に仁淀川の水位が上昇し、宇治川上流部に逆流する状況が続いた。

明治4年(1871)の廃藩置県により高知県に所属し、同22年(1889)に宇治村の大字となり、昭和29年(1954)から現在の「枝川」に変わる。

近代に入ると土佐電気鉄道伊野線が明治40年(1907)に枝川～伊野間、同41年(1908)に啞内～枝川間が開通し高知市升形～伊野間が全通した。翌42年(1909)には宇治村製紙組合を結成し、製紙業を盛んに行っていたが、第一次世界大戦後に不況となり、地元宇治村の農会技手であった深田駒次氏により山地での生姜、赤芽芋の栽培へと方向転換が行われた。大正5年(1916)に高知市福井から生姜を導入し、同7年(1918)より大阪天満市場に出荷、その後次第に産額を増し、大正12年(1923)には生産額が23万貫(約900t)となり、全国的に知られるようになった。同氏は、大正15年(1926)には園芸組合を設立し、生産から出荷、販売に至るまで指導を行った。氏の没後、昭和29年(1954)に功績、功德を称えて建立された碑が枝川地区の一角にある。W区から出土した「深田駒次」銘入りの杯(図版50)には「祝碑建立」と書かれており、昭和29年(1954)3月の碑建立⁽¹⁰⁾の際に配られたものと思われる。この地区が不況から再生し活気を帯びた頃の記憶を伝えている。

4. 枝川の変遷

注・参考文献

- (1)『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会(2000)
- (2)『ガラス瓶の考古学』桜井準也(2006)
- (3)『高知県酪農の歩み』高知県酪農研究会(1964)
- (4)(3)に同じ
- (5)ひまわり乳業株式会社公式ホームページ <http://www.himawarimilk.co.jp>
- (6)『いの町史』高知県いの町(2015)
- (7)『長宗我部地検帳－土佐郡下－』高知県立図書館(1957) 土州土佐郡朝倉庄御地検帳
- (8)『七郡本田新田地払帳』17世紀末(『本田新田地払帳』松本瑛子編集・発行1980年)
- (9)土佐藩二代藩主山内忠義の家老。上野総右衛門の二男が二代藩主忠義から生駒姓を賜り、生駒木工直綱(初代木工)と名乗った。
- (10)『伊野町史』伊野町(1973)

遺構計測表

遺構計測表1 E区SB

遺構名	棟方位	平面規模	総長(m)	面積(㎡)	柱間寸法(m)	柱径(m)	備考
SB1	N - 61° - W	桁行2間	4.53	13.59	0.82 ~ 2.94	0.10 ~ 0.15	中世
		梁行2間	3.00		1.06 ~ 1.78		
SB2	N - 37° - W	桁行2間	3.61	8.99	0.58 ~ 2.03	0.09 ~ 0.23	中世
		梁行2間	2.49		1.08 ~ 1.36		
SB3	N - 35° - W	桁行3間	3.33	8.96	0.82 ~ 1.33	0.12 ~	中世
		梁行2間	2.69		1.18 ~ 1.51		
SB4	N - 54° - E	桁行2間	4.74	14.79	1.18 ~ 2.79	0.09 ~ 0.14	近世
		梁行1間	3.12		3.10 ~ 3.12		
SB5	N - 50° - W	桁行1間	2.50	5.95	2.50	0.11 ~ 0.14	中世
		梁行1間	2.38		2.38		

遺構計測表2 E区SB1ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.61 (P2)	0.57	0.40	0.50	楕円形	-
P2	1.39 (P3)	0.35	(0.19)	0.12	円形	-
P3	0.85 (P4)	0.35	0.31	0.18	円形	-
P4	0.82 (P5)	0.20	0.19	0.14	円形	-
P5	2.79 (P6)	0.36	0.34	0.35	円形	土師質土器杯片1
P6	1.78 (P7)	0.33	0.31	0.51	円形	-
P7	1.06 (P8)	0.50	(0.42)	0.24	円形	-
P8	2.94 (P9)	0.29	0.24	0.20	楕円形	-
P9	1.59 (P1)	0.23	0.21	0.06	円形	-
P10	1.44 (P9)	0.25	(0.18)	0.15	円形	-
	1.35 (P5)					

遺構計測表3 E区SB2ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.08 (P2)	0.90	0.85	0.57	円形	土師質土器片1
P2	1.29 (P3)	0.63	0.57	0.36	円形	-
P3	0.81 (P4)	0.60	0.50	0.63	楕円形	土師質土器片7
P4	2.03 (P5)	0.39	0.35	0.56	円形	土師質土器片1
P5	1.36 (P6)	0.62	0.53	0.69	円形	瓦質土器片1
	0.58 (P9)					
P6	1.13 (P7)	0.81	0.49	0.23	楕円形	土師質土器皿片2・土師質土器杯片2
P7	1.18 (P8)	0.26	0.23	0.23	円形	-
P8	1.85 (P1)	0.33	0.25	0.14	楕円形	-
P9	1.24 (P10)	(0.45)	0.40	0.26	楕円形	土師質土器片(播磨型鍋)1
P10	1.17 (P11)	0.21	0.20	0.09	円形	-
P11	0.58 (P7)	0.40	0.31	0.39	楕円形	-

※柱間距離は()のピットまでの距離

遺構計測表4 E区SB3ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.23 (P2)	(0.30)	0.32	0.07	円形	-
P2	0.82 (P3)	0.32	0.25	0.12	楕円形	-
P3	1.24 (P4)	0.62	0.53	0.69	円形	瓦質土器片1
P4	1.18 (P5)	0.25	0.20	0.25	楕円形	-
P5	1.51 (P6)	0.28	0.17	0.19	楕円形	-
P6	1.09 (P7)	0.30	0.20	0.24	楕円形	-
P7	0.91 (P8)	0.20	0.19	0.15	円形	-
P8	1.33 (P9)	0.33	(0.17)	0.23	楕円形	-
P9	1.40 (P10)	0.33	0.27	0.43	楕円形	白磁皿(E群)1
P10	1.24 (P1)	0.24	0.22	0.18	円形	-

遺構計測表5 E区SB4ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	3.10 (P2)	0.31	0.28	0.16	円形	-
P2	1.89 (P3)	0.29	0.27	0.12	円形	-
P3	1.50 (P4)	(0.34)	0.29	0.18	楕円形	-
P4	1.18 (P5)	0.32	0.30	0.11	円形	陶器片1
P5	3.12 (P6)	0.42	0.40	0.17	円形	-
P6	2.79 (P7)	0.28	0.24	0.10	楕円形	-
P7	1.67 (P8)	0.33	0.30	0.29	円形	鉛玉1

遺構計測表6 E区SB5ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	2.38 (P2)	0.43	0.37	0.20	円形	土師質土器片6
P2	2.50 (P3)	0.32	0.28	0.25	円形	-
P3	-	0.39	0.33	0.13	円形	-

※柱間距離は()のピットまでの距離

遺構計測表7 E区SA

遺構名	棟方位	柱穴数	総長(m)	柱間距離(m)	柱径(m)	備考
SA1	N - 35° - 51° - W	9	9.47	0.68 ~ 2.38	0.06 ~	中世
SA2 - a	N - 23° - 35° - W	5	4.78	0.40 ~ 2.05	0.09 ~	
SA2 - b	N - 16° - W	4	6.12	1.12 ~ 3.12	0.10 ~	中世
SA3	N - 20° - W	5	4.43	0.63 ~ 2.00	0.13 ~	
SA4	N - 73° - E	4	3.13	1.00 ~ 1.08	0.10 ~	
SA5	N - 44° - E	5	4.59	0.96 ~ 1.32	0.10 ~	

遺構計測表8 E区SA1ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.05 (P2)	(0.34)	0.41	0.27	楕円形	-
P2	1.05 (P3)	0.52	0.46	0.44	楕円形	土師質土器片3
P3	1.03 (P4)	0.31	0.23	0.15	楕円形	-
P4	0.68 (P5)	0.24	0.20	0.35	楕円形	-
P5	1.13 (P6)	0.27	0.26	0.41	円形	土師質土器片1
P6	2.38 (P7)	0.23	0.23	0.23	円形	-
P7	0.90 (P8)	0.37	0.30	0.44	楕円形	-
P8	1.25 (P9)	0.21	0.16	0.08	楕円形	-
P9	-	0.29	0.27	0.10	円形	-

遺構計測表9 E区SA2-a・bピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	0.75 (P2)	0.27	0.22	0.27	楕円形	-
P2	0.40 (P3)	0.29	0.27	0.47	円形	-
P3	2.05 (P4)	0.22	0.20	0.33	円形	-
P4	1.58 (P5)	0.29	0.25	0.15	円形	-
P5	-	0.25	0.22	0.21	円形	-
P6	1.88 (P7)	0.37	0.29	0.48	楕円形	-
P7	3.12 (P8)	0.39	0.35	0.51	円形	土師質土器皿1・土師質土器細片3
P8	1.12 (P9)	0.19	0.16	0.15	楕円形	-
P9	-	0.35	0.28	0.33	楕円形	-

遺構計測表10 E区SA3ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	0.63 (P2)	0.35	0.28	0.39	楕円形	-
P2	1.00 (P3)	0.30	0.26	0.48	楕円形	-
P3	2.00 (P4)	0.63	0.40	0.60	楕円形	-
P4	0.80 (P5)	0.53	0.33	0.18	楕円形	-
P5	-	0.40	0.32	0.30	楕円形	-

遺構計測表11 E区SA4ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.08 (P2)	0.25	(0.22)	0.22	円形	-
P2	1.05 (P3)	0.38	0.30	0.44	楕円形	-
P3	1.00 (P4)	0.48	0.38	0.38	楕円形	-
P4	-	0.36	0.33	0.28	円形	-

※柱間距離は()のピットまでの距離

遺構計測表 12 E区SA5ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.32 (P2)	(0.24)	0.16	0.09	円形	-
P2	1.08 (P3)	(0.18)	0.17	0.11	円形	-
P3	1.23 (P4)	0.19	(0.09)	0.11	円形	-
P4	0.96 (P5)	(0.22)	0.18	0.15	楕円形	土師質土器片1
P5	-	0.25	0.20	0.05	円形	-

遺構計測表 13 E区SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N - 32° - W	0.26	0.18	0.20	楕円形	青磁碗1	中世
SK3	N - 60° - E	1.22	1.05	0.23～ 0.34	隅丸方形	-	-
SK4	N - 25° - E	0.66	0.58	0.12	楕円形	-	-
SK5	N - 51° - E	1.21	0.47	0.02～ 0.09	楕円形	陶器皿1, 陶器碗1, 磁器蓋1	近世18後～19c
SK6	-	0.88	0.84	0.29	円形	磁器片2	近世
SK7	N - 28° - W	0.78	0.76	0.12～ 0.16	隅丸方形	陶磁器片1, 砥石1	近世
SK8	-	1.17	(0.99)	0.08	不整形	土師質土器片10	中世
SK9	N - 71° - E	1.20	1.18	0.18	円形	土師質土器片1, 石臼1	中世
SK10	N - 52° - E	1.72	0.93	0.07～ 0.28	楕円形	土師質土器片2, 陶器甕1	中世
SK11	N - 77° - W	0.67	0.59	0.56	楕円形	土師質土器片1, 陶器片1	近世18c～
SK12	-	2.03	1.07	0.18～ 0.23	不整形	土師質土器皿1, 土師質土器片3, 磁器片6, 陶器碗1, 陶器皿1, 陶器片1, 銅製毛抜き1, 砥石2, 銭貨4	近世
SK13	N - 57° - W	1.12	1.10	0.02～ 0.09	隅丸方形	-	-
SK14	-	1.00	1.00	0.11	円形	-	-
SK15	-	0.86	0.82	0.31	円形	-	-
SK16	N - 59° - E	1.80	1.49	0.15～ 0.20	楕円形	土師質土器片1, 磁器片1, 陶器皿1, 陶器片2, 刀子1, 銭貨1	近世
SK17	-	1.25	(0.94)	0.04～ 0.10	-	磁器碗1	近世

遺構計測表 14 E区SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 58° - E	(2.12)	0.48	0.05～0.10	土師器片1, 土師質土器杯片2, 土師質土器細片2, 陶器片1	中世
SD2	N - 51° - W	(3.12)	0.20～0.32	0.04～0.09	土師質土器片4, 瓦質土器鍋1, 磁器片2, 銭貨1	近世
SD3	N - 45° - E	5.08	0.36～0.54	0.13～0.30	土師質土器片1, 瓦質土器片1	中世
SD4	N - 22～62° - E	(1.90)	0.22～0.37	0.05～0.17	土師質土器杯1, 土師質土器細片61	中世
SD5	N - 27° - W	(1.94)	(0.20)	0.09	陶器片1	中世
SD6	N - 44° - E N - 51° - W	(9.68)	0.26～0.90	0.08～0.31	土師質土器片5, 陶器搗鉢片4, 陶器片1, 磁器片3, 石製品1	近世
SD7	N - 36° - W	(6.51)	0.32～0.51	0.04～0.08	-	-

※柱間距離は()のピットまでの距離

遺構計測表 15 W区SB

遺構名	棟方位	平面規模	総長(m)	面積(㎡)	柱間寸法(m)	柱径(m)	備考
SB1	N - 77° - E	桁行3間	5.18	20.20	1.55～2.38	0.12～0.18	中世
		梁行1間	3.90		3.90		
SB2	N - 3° - E	桁行3間	4.65	13.02	0.94～2.03	0.06～0.20	〃
		梁行1間	2.80		2.72～2.80		
SB3	N - 76° - E	桁行2間	4.29	9.22	1.24～2.87	-	近代
		梁行1間	2.15		1.99～2.15		
SB4	N - 21° - W	桁行2間	5.11	16.45	1.92～3.15	0.26～0.44	〃
		梁行4間	3.22		0.89～1.23		

遺構計測表 16 W区SB1ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.55 (P2)	0.36	(0.29)	0.52	円形	-
P2	1.78 (P3)	0.39	0.33	0.44	楕円形	土師質土器細片3
P3	1.85 (P4)	0.53	0.51	0.76	円形	土師質土器皿片1, 土師質土器細片4
P4	3.90 (P5)	0.59	0.53	0.51	楕円形	土師質土器片9
P5	2.08 (P6)	0.27	0.23	0.34	円形	磁器細片1
P6	2.38 (P7)	0.48	0.41	0.63	楕円形	土師質土器皿片1, 土師質土器細片2
P7	-	0.25	0.24	0.18	円形	-

遺構計測表 17 W区SB2ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	2.80 (P2)	0.56	0.44	0.42	楕円形	-
P2	2.03 (P3)	(0.52)	0.42	0.58	楕円形	土師質土器片4
P3	0.94 (P4)	0.51	(0.37)	0.58	楕円形	土師質土器片2
P4	1.68 (P5)	0.34	0.30	0.61	不整形	土師質土器杯1, 土師質土器口縁部片3, 土師質土器細片7
P5	2.72 (P6)	0.52	0.38	0.31	楕円形	-
P6	1.78 (P7)	0.45	0.43	0.27	円形	土師質土器鍋片2, 土師質土器細片2
P7	1.15 (P8)	(0.33)	0.27	0.12	楕円形	-
P8	1.62 (P1)	0.52	0.46	0.28	楕円形	土師質土器片3, 土師質土器口縁部片3, 瓦質土器片1, 青磁片1

遺構計測表 18 W区SB3ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.99 (P2)	0.60	0.55	-	円形	-
P2	4.15 (P3)	0.61	0.57	0.37	円形	-
P3	2.15 (P4)	0.58	0.55	0.18	円形	-
P4	1.24 (P5)	0.61	0.56	0.16	楕円形	-
P5	2.87 (P1)	0.52	0.49	-	円形	-

※柱間距離は()のピットまでの距離

遺構計測表19 W区SB4ピット

遺構番号	柱間距離	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	3.08 (P2)	0.71	0.60	0.49	円形	-
P2	2.03 (P3)	0.82	0.74	-	円形	-
P3	1.00 (P4)	0.64	0.60	-	円形	-
P4	0.99 (P5)	0.90	0.77	-	円形	-
P5	1.23 (P6)	0.86	0.62	-	楕円形	-
P6	1.92 (P7)	0.66	0.55	-	円形	-
P7	3.15 (P8)	0.46	(0.43)	-	円形	-
P8	0.89 (P9)	0.67	0.64	0.45	円形	-
P9	1.04 (P10)	0.88	0.70	-	円形	-
P10	1.05 (P1)	0.75	0.67	-	円形	-
P11	2.06 (P4)	0.73	0.69	-	円形	-
P12	2.00 (P5)	0.65	0.64	-	円形	-

※柱間距離は()のピットまでの距離

遺構計測表20 W区SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N - 22° - W	0.85	0.92	0.10	楕円形	陶器片1, 鉄器1	近世
SK2	N - 29° - E	1.00	0.52	0.14	楕円形	磁器片1, 鉄器1	近世
SK3	N - 12° - W	0.95	0.74	0.11	楕円形	-	近現代
SK4	N - 37° - E	0.77	0.63	0.12	不整楕円形	-	-
SK5	N - 71° - W	0.79	0.75	0.15	円形	土師質土器片2, 磁器片2	明治以降
SK6	N - 11° - W	0.74	0.68	0.12	隅丸方形	陶器片5, 磁器片1	明治以降
SK7	N - 66° - E	2.41	1.33	0.48~ 0.55	隅丸方形	土師質土器片3, 染付1, 陶器挿鉢1, 陶器片14, 磁器片33	明治以降
SK8	-	0.79	(0.51)	0.41	円形	土師質土器片3	中世
SK9	N - 50° - E	1.14	1.02	0.05~ 0.14	不整形	土師質土器片2	中世
SK10	N - 56° - E	0.88	0.70	0.20~ 0.38	隅丸方形	土師質土器片2	中世

遺構計測表21 W区SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 82° - E	(3.20)	0.90	0.20	陶器火鉢片1, 陶器細片2, 磁器片10	近現代
SD2	N - 25° - W	(1.46)	0.16	0.12	磁器片3	近世

遺構計測表22 W区SX

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SX1	N - 61° - E	2.58	1.22~ 1.82	0.03~ 0.08	不整形	土師質土器杯片1, 土師質土器細片17, 陶器挿鉢片1	中世

遺物觀察表

凡例

1. 遺物観察表の法量は、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については()で記載する。
その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
土錘については全長・全幅・全厚、石製品及び鉄製品については全長・全幅・全厚の順にそれぞれ記載した。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
4. その他、備考には器種の分類、年代のわかるものについて記載した。
5. 中世の土器・陶磁器の分類については『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社1995, 貿易陶磁器の分類については『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁器』1993を参照した。

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
1	E区	P21	土師質土器 皿	(11.9)	2.0	-	明赤褐色 〃 〃	ロクロ成形, 回転糸切り。	近世
2	〃	P108	〃 小杯	-	(1.7)	(2.8)	にぶい橙色 〃 〃	ロクロ成形, 回転糸切り。ナデ調整。	
3	〃	P98	〃 杯	-	(1.2)	(5.6)	にぶい橙色 橙色 にぶい橙色	ロクロ成形, 回転糸切り。	
4	〃	SA2 P7	〃 〃	-	(1.4)	(7.8)	にぶい橙色 〃 〃	回転ナデ調整, 回転糸切り。外面底部の一部にタール痕あり。	
5	〃	P45	〃 〃	-	(1.8)	(5.8)	にぶい黄褐色 〃 〃	回転ナデ調整, 回転糸切り。	
6	〃	P112	〃 羽釜	(20.6)	(6.8)	-	橙色 灰褐色 橙色	播磨型。退化した鑊が付く。内面は丁寧なナデ調整。外面胴部下位にタタキ目。口縁部はナデ調整により内傾する面を成す。	
7	〃	P58	〃 鍋	-	(5.9)	-	橙色 褐色 褐色	体部上半にタタキ目が施される。下半全体に煤付着。内面はナデ調整。	
8	〃	P102	青磁 碗	-	(3.2)	-	灰オリーブ色 〃 灰白色	鎬蓮弁文。	
9	〃	P92	青花 〃	-	(2.2)	-	灰白色 〃 〃	外面にくずれた牡丹文が描かれる。	
10	〃	P79	陶器 皿	11.1	3.5	4.0	にぶい黄色 〃 にぶい黄褐色	唐津産。内湾気味に立ち上がり口縁部にかけて外反気味に開く。内面体部中位に稜ができる。内面から口縁部外面まで黄釉, 鉄釉により襷文が施される。見込み胎土目。	I期 (1580～ 1610)
11	〃	P65	〃 〃	(12.2)	(1.5)	-	黒褐色 〃 灰白色	唐津産。口縁端部を上方に摘みナデ調整を施す。全体的に鉄釉が薄く施される。	
12	〃	P55	〃 〃	(12.0)	(1.5)	-	灰オリーブ色 〃 〃	口縁端部を上方に折り曲げる。全体的に薄い灰釉が施される。	
13	〃	P110	〃 〃	(13.0)	(2.9)	-	灰オリーブ色 灰オリーブ色・灰黄色 灰黄色	内湾気味の体部から口縁端部は外方に摘み出しナデ調整を施す。外面体部下半は露胎。	
14	〃	P38	磁器 碗	(9.8)	(2.3)	-	灰白色 〃 〃	口縁内面に四条の圈線。	
15	〃	P89	〃 〃	(12.0)	(2.7)	-	明オリーブ灰色 〃 〃	筒形碗。外面に二条の圈線。	
16	〃	P93	陶器 播鉢	-	(10.2)	(14.0)	にぶい赤褐色 黒褐色 にぶい赤褐色	九条一単位の摺目。水肥した胎土。内面ナデ調整による段が顕著。	
17	〃	P84	土製品 土錘	全長 5.0	全幅 1.4	全厚 1.2	灰褐色 - -	管状土錘。直径5mmの円孔。重量6.3g	
18	〃	SB4 P7	鉛玉	全長 1.2	全幅 1.2	全厚 1.1	-	上下の継ぎ目が残る。重量7.1g	
19	〃	P19	石製品 砥石	全長 12.5	全幅 5.7	全厚 2.6	-	細粒花崗岩製。直方体, 四面使用。表面は仕上砥として使用し, 弧状にすり減る。裏面は矢柄研磨器状に深い溝が残る。重量270.0g	
20	〃	SK1	青磁 碗	-	(1.0)	(6.0)	オリーブ黄色 オリーブ灰色 灰白色	高台内面の一部まで施釉される。	
21	〃	SK5	陶器 皿	(10.2)	(2.6)	-	暗褐色 〃 灰黄色	尾戸窯。口縁部は僅かに外反する。全体に鉄釉が施される。	
22	〃	〃	〃 碗	(9.6)	(2.5)	-	灰オリーブ色 〃 灰白色	丸碗。全体に透明感のある灰釉が施される。口縁部外面には圈線状に釉が溜まる。	
23	〃	〃	磁器 蓋	(9.9)	(1.5)	-	灰白色 〃 〃	能茶山窯。濃い呉須により外面に梅文。内面に雷文帯が施される。	19c

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
24	E区	SK7	石製品 砥石	全長 7.2	全幅 6.0	全厚 2.8	-	流紋岩製。仕上砥。片面を使用し、弧状にすり減る。重量 156.0g	
25	〃	SK9	〃 石臼	全長 28.5	全幅 16.5	全厚 6.8	-	重量 4400.0g	
26	〃	SK12	陶器 皿	-	(3.9)	-	褐灰色 灰オリーブ色 にぶい褐色	白化粧土がハケ塗りされる。	
27	〃	〃	〃 碗	-	(6.9)	(5.0)	浅黄色 〃 淡黄色	高台脇より高台内が深く削り込まれる。全体的に黄釉が 施され、畳付は無釉である。	
28	〃	〃	土師質土器 皿	-	(1.6)	(6.2)	にぶい黄橙色 黒色 にぶい黄橙色	外面全体に煤付着。底部回転条切り。	
29	〃	〃	銅製品 毛抜き	全長 6.1	全幅 0.3	全厚 0.5	-	重量 3.0g	
30	〃	〃	銭貨	内径 (mm) 18.50	外径 (mm) 23.00	銭厚 (mm) 1.40	-	寛永通寶。 内郭外径 8.00, 内郭内径 6.00, 文字面厚 0.90(単位は全てmm) 重量 2.33g	
31	〃	〃	〃	内径 (mm) 18.50	外径 (mm) 25.00	銭厚 (mm) 1.15	-	銭種不明。 内郭外径 9.00, 内郭内径 5.50, 文字面厚 0.95(単位は全てmm) 重量 3.15g	
32	〃	〃	〃	内径 (mm) 19.00	外径 (mm) 22.00	銭厚 (mm) 2.40	-	銭種不明。 内郭外径 6.50, 内郭内径 5.00, 文字面厚 1.70(単位は全てmm) 重量 1.27g	
33	〃	〃	石製品 砥石	全長 3.8	全幅 5.9	全厚 1.8	-	流紋岩製の仕上砥。重量 62.5g	
34	〃	SK16	陶器 皿	(25.4)	(2.8)	-	黄褐色 〃 にぶい褐色	口縁部は上方に屈曲し、端部を外方に摘み出す。内面に 白化粧土による磨手。	
35	〃	〃	鉄製品 刀子	全長 14.0	全幅 2.0	全厚 1.1	-	重量 42.4g	
36	〃	〃	銭貨	内径 (mm) 19.50	外径 (mm) 25.50	銭厚 (mm) 1.40	-	寛永通寶。 内郭外径 8.00, 内郭内径 5.50, 文字面厚 0.85(単位は全てmm) 重量 1.94g	
37	〃	SK17	磁器 碗	-	(3.5)	(4.0)	灰白色 〃 〃	断面逆三角形の削り高台。見込みは全体的に釉剥ぎ。中 央は釉を残す。外面体部下半は露胎。	
38	〃	SD1	土師質土器 杯	-	(1.4)	(4.2)	橙色 〃 〃	ロクロ成形、回転条切り。回転ナデ調整。	
39	〃	SD2	瓦質土器 鍋	-	(3.5)	-	灰白色 〃 〃	口縁部は上方に立ち上がり、端部は内側に摘み、ナデ調整 を施す。	
40	〃	SD4	土師質土器 杯	(12.6)	(3.2)	(6.2)	橙色 〃 〃	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上 げる。回転ナデ調整。	
41	〃	I層	陶器 碗	-	(1.5)	(5.2)	黒色 暗褐色 灰黄色	瀬戸美濃系。高台内面まで施釉。畳付は無釉。鉄釉が施さ れる。	
42	〃	〃	銭貨	内径 (mm) 18.50	外径 (mm) 21.00	銭厚 (mm) 0.95	-	寛永通寶。内郭外径 9.00, 内郭内径 7.00, 文字面厚 0.60(単 位は全てmm) 重量 1.39g	
43	〃	〃	石製品 砥石	全長 22.5	全幅 6.5	全厚 10.4	-	細粒花崗岩製。一面のみ使用。被熱痕あり。重量 2350.0g	
44	〃	〃	〃 〃	全長 14.6	全幅 6.2	全厚 3.7	-	流紋岩製の仕上砥。三面が使用される。重量 372.0g	
45	〃	〃	〃 〃	全長 9.1	全幅 4.8	全厚 3.4	-	花崗岩製の仕上砥。三面が使用される。側辺に加工痕が 残る。重量 125.0g	
46	〃	Ⅲ層	陶器 皿	-	(1.9)	4.4	灰色 灰オリーブ色 灰白色	唐津産。灰釉が施される。高台は兜巾状に削る。砂目。	

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
47	E区	Ⅲ層	陶器皿	(12.0)	2.7	4.2	にぶい黄色 にぶい黄褐色 橙色	唐津産。口縁端部は上方に摘み上げ、内面は沈線状に凹む。内面体部中位に稜を成す。見込みは砂目痕、高台は削り出しにより兜巾状を呈する。	
48	〃	〃	〃碗	-	(2.2)	5.9	灰オリーブ色 〃 黄灰色	唐津産。全体的に青磁釉が施され、高台は無釉。見込みにハマ痕。	
49	〃	〃	〃皿	(12.4)	5.3	(5.4)	オリーブ黄色 オリーブ褐色 橙色	能茶山窯。断面三角形の削り高台。内面見込みは蛇ノ目状を呈し、白土をかける。外面体部中位まで鉄釉が施され、外面体部下半は露胎。	
50	〃	〃	〃	(12.8)	4.8	4.7	極暗赤褐色 〃 にぶい橙色	能茶山窯。内面蛇ノ目釉剥ぎ。外面体部下半は露胎。	
51	〃	Ⅲ-2層	〃碗	-	(6.6)	(5.6)	オリーブ黒色 黒褐色 黄灰色	唐津産。全体に褐釉が施される。内面見込みハマ痕。高台脇より高台内を深く削る。外底部に「C」の窯印。	
52	〃	Ⅲ層	〃壺	-	(1.6)	7.4	灰黄色 灰オリーブ色 灰白色	外面底部中央部がヘラ切りにより凹む。外底部は露胎。他は灰釉が施される。	
53	〃	〃	磁器大皿	-	(2.0)	(11.0)	明緑灰色 〃 灰白色	肥前産。外面と高台内に圏線が巡る。畳付釉剥ぎ、一部に砂付着。内面は草花文。	
54	〃	〃	陶器描鉢	-	(6.0)	(18.2)	にぶい赤褐色 〃 赤色	堺産。内面全体に条線が施される。	
55	〃	Ⅲ-2層	瓦質土器焜炉	-	(4.4)	(12.0)	灰白色 灰色 灰白色	「ハ」の字に開く高台。外面は刺突充填文。	
56	〃	Ⅲ層	銭貨	内径 (mm) 19.00	外径 (mm) 23.50	銭厚 (mm) 1.05	-	寛永通寶。 内郭外径 7.00, 内郭内径 5.50, 文字面厚 0.80 (単位は全てmm) 重量 1.56g	
57	〃	〃	〃	内径 (mm) 19.00	外径 (mm) 24.00	銭厚 (mm) 1.25	-	寛永通寶。 内郭外径 8.00, 内郭内径 6.00, 文字面厚 0.80 (単位は全てmm) 重量 2.06g	
58	〃	〃	石製品砥石	全長 16.7	全幅 5.2	全厚 8.9	-	仕上砥。泥岩製。剥片の一面のみ使用。重量 850.0g	
59	〃	〃	〃石臼	全長 (18.7)	全幅 (16.2)	全厚 6.5	-	上臼。細粒花崗岩製。すり合わせ部の溝は八分割。重量 2700.0g	
60	〃	〃	〃	全長 (13.7)	全幅 (13.5)	全厚 6.8	-	上臼。細粒花崗岩製。挽木の取り付け部は深さ 2.4cm の方形孔を穿つ。重量 1500.0g	
61	〃	Ⅳ層	土師質土器杯	(14.2)	3.6	(8.8)	橙色 〃 〃	回転ナデ調整。回転糸切り。	
62	〃	〃	陶器皿	(11.0)	(1.5)	-	浅黄色 にぶい黄色 にぶい黄褐色	黄瀬戸菊皿。内面に丸ノミ状工具により菊弁が施される。口縁部は外反し端部を上方に摘み上げる。全体的に黄釉がかかる。	
63	〃	〃	青磁	(12.2)	(2.1)	-	明緑灰色 〃 灰白色	稜花皿。体部は腰折れ、口縁部は外反する。口縁端部は丸ノミ状工具により抉りを入れる。青磁釉が厚く施され貫入が認められる。	
64	〃	〃	〃碗	-	(3.9)	5.4	明オリーブ灰色 〃 灰白色	C類。全面施釉、高台内は無釉。内面見込みに草文、外面に幅広の蓮弁文が施される。	
65	〃	〃	白磁皿	(10.6)	(2.2)	-	灰白色 〃 〃	端反皿 E 群。透明感のある白磁釉が施される。	
66	〃	〃	陶器描鉢	(25.4)	(4.2)	-	橙色 〃 にぶい赤褐色	酸化焰焼成。備前焼。口縁端部は上下に拡張し平坦な面を成す。	Ⅳ a 期
67	〃	〃	〃	(30.2)	(4.5)	-	灰赤色 〃 黒褐色	備前焼。口縁端部は上方に拡張し尖り気味に仕上げる。内外面ナデ調整。内面口縁直下は条線が施される。	
68	〃	〃	〃水屋甕	(17.4)	(5.5)	-	にぶい赤褐色 〃 〃	口縁部は内傾し外方に折り返し玉縁状に肥厚する。口縁直下に円孔を穿つ。	
69	W区	P41	土師質土器杯	(12.8)	(2.4)	-	橙色 〃 〃	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
70	W区	P34	土師質土器 杯	-	(2.2)	(4.0)	にぶい黄橙色 〃 〃	回転ナデ調整。内面にロクロ目を残す。コップ型を呈する。田村C類。	
71	〃	〃	〃 〃	-	(1.8)	4.7	にぶい黄橙色 〃 灰黄色	内底部にロクロ目。回転ナデ調整。回転糸切り。外底面全体に煤附着。	
72	〃	SB2-P4	〃 〃	-	(1.7)	(6.0)	橙色 〃 〃	回転ナデ調整。回転糸切り。	
73	〃	P28	〃 〃	-	(1.1)	(5.0)	にぶい橙色 〃 〃	内底部周縁にロクロ目。丸みのある底部で、切離しは不明。	
74	〃	P55	〃 鍋	(23.0)	(2.5)	-	橙色 〃 〃	播磨型。断面三角形の鐳が付く。口縁端部は平坦な面を成す。	
75	〃	P30	陶器 播鉢	(29.6)	(4.3)	-	にぶい赤褐色 〃 〃	備前焼。口縁部は内傾する。	IV a 期
76	〃	I 層	瓦質土器 焜炉	-	(4.5)	-	黄灰色 暗灰色 黄灰色	高台及び胴部は欠損する。ナデ調整。	
77	〃	〃	〃 火鉢	-	(4.6)	-	灰黄色 灰色 灰黄色	雷文帯。	
78	〃	〃	鉄製品 鐳	全長 8.1	全幅 7.9	全厚 0.6	-	重量 72.17g	
79	〃	〃	銅製品 煙管	全長 4.6	全幅 1.2	全厚 1.2	-	重量 80g	
80	〃	〃	〃 〃	全長 7.9	全幅 1.1	全厚 1.0	-	重量 13.3g	
81	〃	〃	銭貨	内径 (mm) 19.00	外径 (mm) 24.00	銭厚 (mm) 1.10	-	寛永通寶。 内郭外径 7.00, 内郭内径 6.00, 文字面厚 0.60(単位は全てmm) 重量 3.04g	
82	〃	〃	〃	内径 (mm) 19.00	外径 (mm) 22.00	銭厚 (mm) 1.30	-	半銭銅貨幣。(明治7～27年) 文字面厚 1.10mm, 重量 3.29g	
83	〃	III 層	土師質土器 皿	-	(1.6)	(5.2)	にぶい橙色 〃 〃	内面にロクロ目。回転糸切り。	
84	〃	〃	磁器 〃	-	(1.9)	(6.8)	灰白色 〃 〃	肥前産。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に崩れた五弁花文。高台は低く、畳付は釉剥ぎ。	
85	〃	〃	〃 碗	(11.0)	6.1	4.0	灰白色 〃 〃	外面網目文。内面は圏線が巡る。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に崩れた文様が入る。高台内は深く削り込まれ、畳付は釉剥ぎ。	
86	〃	〃	陶器 播鉢	(22.4)	(3.7)	-	明赤褐色 灰赤色 明赤褐色	備前焼。口縁部は肥厚し、外面に二条、内面に一条の沈線が入る。内面・口縁部と体部の境目には強いヨコナデ調整が施される。	
87	〃	〃	〃 〃	-	(7.1)	(14.0)	明赤褐色 にぶい赤褐色 橙色	堺産。	
88	〃	〃	銭貨	内径 (mm) 20.00	外径 (mm) 25.00	銭厚 (mm) 1.35	-	寛永通寶。 内郭外径 7.00, 内郭内径 5.00, 文字面厚 0.70(単位は全てmm) 重量 3.59g	
89	〃	IV 層	土師質土器 皿	-	(0.9)	(6.2)	にぶい橙色 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転糸切り。簀子状圧痕。	
90	〃	〃	〃 杯	(12.8)	3.5	(6.0)	にぶい黄橙色 〃 にぶい橙色	回転ナデ調整。回転糸切り。	
91	〃	〃	青磁 皿	(13.2)	(2.0)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	稜花皿。口縁部は外反し、端部は丸ノミ状工具により抉りを入れる。内面は二重界線が施される。	
92	〃	〃	土師質土器 羽釜	(20.8)	(3.2)	-	灰黄色 にぶい黄橙色 にぶい橙色	口縁端部は内傾する面を成す。鐳は三角形。ナデ調整。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
93	W区	IV層	瓦質土器 火鉢	(18.9)	(3.7)	-	灰色 〃 灰白色	口縁端部は内側に肥厚し、平坦な面をつくる。ナデ調整。	
94	〃	〃	石製品 砥石	全長 13.9	全幅 3.7	全厚 0.8	-	仕上砥。粘板岩製。重量 62.2g	
95	〃	表採	陶器 皿	(10.8)	2.3	(4.6)	灰黄色 〃 〃	ロクロ成形。底部回転糸切り。内面のみ灰釉が施される。見込みにハマ痕。外面にタール痕。	
96	〃	〃	〃 〃	(12.8)	4.8	(5.0)	暗灰黄色 暗灰黄色・にぶい橙色 にぶい橙色	ロクロ成形。ナデ調整。体部下位はケズリ。畳付内側を削り内傾する面を成す。内面から外面体部中位まで鉄釉。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、アルミナ砂を塗布する。	
97	〃	〃	〃 〃	12.4	4.6	4.6	黒褐色 〃 赤褐色	内外面とも鉄釉が施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、アルミナ砂を塗布する。畳付外側を削る。	
98	〃	〃	〃 〃	12.5	4.8	4.8	暗赤褐色 〃 暗灰色	能茶山窯。褐釉が浸け掛けされ、口縁部は鉄釉によりイッチン掛けが施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、アルミナ砂が塗布される。周縁に五箇所のハマ痕。	
99	〃	〃	〃 〃	-	(2.8)	5.2	明オリーブ色 灰白色 〃	肥前産。見込みに砂目積み痕。内面体部下半に呉須により二重圏線が施される。畳付から外底部は露胎。高台内面はケズリ、兜巾状を呈する。	
100	〃	〃	〃 鉢	(11.2)	5.0	4.7	灰白色 〃 〃	口縁端部は内傾する平坦面を成す。内面及び口縁外面まで灰釉が施される。見込みに目跡。削り高台。	
101	〃	〃	〃 小碗	7.0	3.9	2.7	淡黄色 〃 〃	全体的に黄釉が施される。外面鉄釉により笹文が施される。	
102	〃	〃	〃 碗	-	(4.5)	(5.0)	オリーブ黄色 〃 灰オリーブ色	全体的に黄釉が施される。細かな貫入が認められる。畳付は露胎。	
103	〃	〃	〃 〃	12.2	4.1	5.6	灰白色 〃 灰黄色	低い高台から内湾する。比較的器壁が厚い。透明感のある白磁釉を全体に施す。細やかな貫入と黒褐色の大きな貫入が入る。畳付釉剥ぎ。	
104	〃	〃	〃 〃	-	(5.4)	(5.0)	灰白色 〃 灰黄色	広東形碗。外面笹文。内面見込みに圏線、中央に五弁花が淡い呉須で描かれる。	19c
105	〃	〃	〃 〃	-	(4.0)	(4.8)	灰色 〃 暗灰色	高台脇より高台内を深く削り込む。全面に灰釉が施釉され、高台内は露胎する。見込みにハマ痕。	
106	〃	〃	〃 蓋	つまみ径 1.3	2.2	返り径 (7.4)	淡黄色 灰黄色 淡黄色	尾戸窯。外面灰釉が薄く施され、草の鉄絵が描かれる。内面に「□十才男」の墨書。蓋径 9.6cm。	
107	〃	〃	〃 行平鍋	10.5	8.4	5.3	暗赤褐色 〃 にぶい黄橙色	体部下半から底部にかけてケズリ。受け部は無釉。体部中位に飛鉋を施す。	
108	〃	〃	〃 片口鉢	20.8	14.0	(9.6)	オリーブ黄色 〃 灰色	外面口縁から体部下半まで施釉。底部は露胎。内面口縁部は露胎。体部から底部にかけて施釉。内外面回転ナデ調整。高台は削り出す。	
109	〃	〃	〃 燗德利	-	(23.1)	7.0	にぶい赤褐色 灰黄色 にぶい黄橙色	全体的に黄釉が施され、口縁部は鉄釉が二度掛けされる。底部は高台を削り出す。	
110	〃	〃	〃 火鉢	-	(3.9)	12.6	浅黄色 暗緑灰色 浅黄色	外面緑釉が施される。	
111	〃	〃	〃 壺	4.7	3.1	2.4	オリーブ黒色 〃 -	外面下半に沈線。高台内に「備前」が刻印される。	
112	〃	〃	磁器 丸皿	8.9	2.2	3.4	灰白色 〃 〃	白磁皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	
113	〃	〃	〃 〃	9.0	2.4	3.3	明青灰色 〃 灰白色	白磁皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	
114	〃	〃	〃 小皿	8.8	2.0	3.7	明緑灰色 灰白色 〃	肥前系磁器。透明感のある釉が施される。内面は格子文が巡り、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に蜻蛉が呉須により描かれる。	
115	〃	〃	〃 皿	9.6	1.9	5.1	白色 〃 〃	白磁皿。型打成形。見込みに「壽」字が線刻される。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
116	W区	表採	磁器 皿	10.2	2.0	4.8	白色 〃 〃	体部は腰折れ、口縁部は外反し端部はやや垂下する。見込みは松樹、牡丹と獅子が濃い呉須により描かれる。	
117	〃	〃	〃 〃	(11.6)	2.8	(6.0)	白色 〃 〃	外面高台内に「NagoyaSeitoshō」、王冠が描かれる。高台 畳付は無釉。口縁部は玉縁状を呈する。	昭和 (戦前)
118	〃	〃	〃 〃	-	(1.0)	(9.0)	灰白色 〃 〃	外面高台内に「・・URA & CO」・「・CHINA」・動物 が緑色の釉で描かれる。「MATSUMURA & CO」か。 底部は蛇ノ目高台風に仕上げる。乳白を呈する。	
119	〃	〃	〃 〃	(12.6)	3.6	5.0	灰白色 〃 〃	瀬戸美濃系。鮮やかな濃い呉須。内面簡略化した華雁 文。外面花文。	
120	〃	〃	〃 〃	-	(2.2)	(7.6)	灰白色 〃 〃	瀬戸美濃系。蛇ノ目高台。外面圏線、内面草花文。鮮やか な濃い呉須。	
121	〃	〃	〃 〃	(13.0)	3.6	8.2	灰白色 〃 〃	瀬戸美濃系。蛇ノ目高台。型打成形。陰刻菊花花卉文。内 面中央に人物文、周囲は菊花文が型紙摺りされる。五箇 所の目跡あり。口唇部は呉須塗りされる。	
122	〃	〃	〃 〃	13.0	3.4	7.5	灰白色 〃 〃	瀬戸美濃系。蛇ノ目高台。型紙摺り。内面見込み中央に松 竹梅文を配し周縁は楡垣文、体部は菊花文と菱文。見込 み五足のハマ痕。外面三友文と圏線。	
123	〃	〃	〃 〃	(10.2)	1.9	(6.2)	灰白色 〃 〃	銅板転写摺り。内面唐草文に菊花・桐文。口縁端部に褐 色釉が施される。	
124	〃	〃	〃 〃	11.0	2.4	6.0	灰白色 〃 〃	銅板転写摺り。緑色顔料による染付。内面見込み中央に 丸に桜の文様。周囲は斜格子状の文様。高台畳付は釉剥 ぎ。	
125	〃	〃	〃 〃	11.0	2.4	6.3	灰白色 〃 〃	銅板転写摺り。内面口縁部六方に桜文、中央に花文。	
126	〃	〃	〃 〃	12.5	2.5	7.2	灰白色 〃 〃	銅板転写摺り。内面唐花をモチーフとした文様が描かれ る。口縁部口鏽釉。	
127	〃	〃	〃 角皿	(16.2)	(4.1)	-	灰白色 〃 〃	能茶山窯。型打成形。外面区画内に源氏香、芙蓉手の崩 し、内面梅文、草文。	
128	〃	〃	〃 〃	-	(2.9)	5.5	灰白色 〃 〃	能茶山窯。見込みは八角体を成し、岩文と草木文が施さ れる。高台内は「茶山」の銘を持つ。	
129	〃	〃	〃 皿	18.4	2.7	11.7	灰白色 〃 〃	内面竹垣文(緑)、牡丹・花文(赤緑)が区画間に配さ れる。見込み牡丹唐草文(呉須)。外面崩れた唐草文、圏 線。	
130	〃	〃	〃 角皿	(29.2)	4.8	(16.6)	灰白色 〃 〃	見込みは八角体、口縁部はやや外反し、輪花状を呈す。内 面見込み周縁は雷文帯と矩形文、中央は草花文か。	
131	〃	〃	〃 大皿	(42.4)	5.2	(21.8)	灰白色 〃 〃	肥前産。呉須により内面扇子に山水文、外面花唐草文と 圏線が巡る。	
132	〃	〃	〃 碗	-	(4.0)	(4.8)	灰白色 〃 〃	能茶山窯。腰張型蓋物。外面多重格子文を巡らせ、笹文が 配される。高台内に角枠内「茶」銘を持つ。見込みは岩文。	
133	〃	〃	〃 〃	-	(6.5)	(4.8)	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面に鶴、草文と圏線。口縁部は多重圏線。見 込みに亀文。高台内に「茶」の銘あり。	
134	〃	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	灰白色 〃 〃	能茶山窯。見込みに宝文。高台内に「茶」の銘あり。	
135	〃	〃	〃 〃	-	(2.7)	4.2	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面草花文。見込みは崩れた十字花文。三箇所 にハマ痕。高台内は「サ」の銘あり。	
136	〃	〃	〃 〃	-	(2.8)	(4.2)	灰白色 〃 〃	能茶山窯。内面見込みに圏線と崩れた蝙蝠文が施され る。	
137	〃	〃	〃 〃	-	(5.1)	4.4	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面に草花文。見込みに圏線、中央に崩れた蝙 蝠文が呉須により描かれる。貫入が入る。	
138	〃	〃	〃 〃	-	(4.1)	(4.0)	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面に丸文が配される。見込みに亀文。高台内 には角枠内「茶」の銘を持つ。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
139	W区	表採	磁器 碗	-	(4.0)	(3.7)	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面草花文。見込みは宝文。高台内は「サ」の銘を持つ。	
140	〃	〃	〃 〃	-	(2.4)	4.9	灰白色 〃 〃	能茶山窯。広東形碗。高台脇に二重圏線。見込みに舟文が描かれる。外底部に「サ」の印。	
141	〃	〃	〃 〃	-	(4.9)	5.2	灰白色 〃 〃	能茶山窯。広東形碗。外面花弁文。高台脇に二重圏線。見込みは舟文が描かれる。外底部は「サ」の印が描かれる。呉須の発色は黒い。	
142	〃	〃	〃 〃	-	(2.8)	(6.2)	灰白色 〃 〃	能茶山窯。広東形碗。見込みに亀文。高台は欠損する。外底部には「サ」の印。	
143	〃	〃	〃 〃	11.0	5.7	4.2	明青灰色 〃 灰白色	瀬戸美濃系。型紙摺り。外面菊花文。花唐草文。内面圏線。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。畳付釉剥ぎ。	19後～ 20c前
144	〃	〃	〃 〃	10.2	5.8	3.7	灰白色 〃 〃	瀬戸美濃系。型紙摺り。濃い呉須。外面青海波地の区画文・草花文。内面環珞文。見込みは圏線内に三友文。	19後～ 20c前
145	〃	〃	〃 小碗	6.7	5.8	3.2	灰白色 〃 〃	鮮やかな濃い呉須。外面半菊風の文様が上下に配され、間に三友文を施す。内面二重圏線。	
146	〃	〃	〃 碗	6.5	6.1	4.0	灰白色 〃 〃	瀬戸美濃系。筒形碗。型紙摺り。外面青海波地に連子格子、菊花・菖蒲文の型窓絵。	
147	〃	〃	〃 猪口	7.5	6.0	5.4	灰黄色 〃 灰白色	能茶山窯。外面山水楼閣文、内面雷文帯。見込みは寿文。蛇ノ目高台。中央に「茶」	19c
148	〃	〃	〃 〃	7.4	5.5	5.7	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面山水楼閣文、内面見込み波頭文。口縁が施される。蛇ノ目高台。	19c
149	〃	〃	〃 〃	7.5	5.5	5.2	灰白色 〃 -	内面見込み波頭文、外面濃い呉須により細い線画で山水楼閣文が描かれる。蛇ノ目高台。	19c
150	〃	〃	〃 〃	8.0	5.5	5.2	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面山水楼閣文、内面波頭文。蛇ノ目高台。	19c
151	〃	〃	〃 〃	7.4	6.2	5.9	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面逆さ葡萄文と草、蝶文。内面四方襷文、見込み葡萄文。蛇ノ目高台。	19c
152	〃	〃	〃 〃	7.4	5.5	5.3	灰白色 〃 -	能茶山窯。外面松樹、磯辺山水文、見込みは米印文。口縁部にはやや歪みが見られる。	19c
153	〃	〃	〃 蓋	(10.0)	2.7	5.7	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面に山水楼閣文が細い線画で全体に描かれる。内面舟文。呉須の釉調は黒みがかったり。	
154	〃	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面草花文、見返しに宝文。つまみ内に「茶」の印。	
155	〃	〃	〃 段重蓋	返り径 (10.0)	(2.0)	-	白色 〃 〃	能茶山窯。外面圏線間に草の文様の染付が巡る。釉には細かい貫入が入る。蓋径12.0cm。	
156	〃	〃	〃 段重	11.4	3.9	9.6	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面底部は施釉。外面圏線間に草の文様の染付が巡る。釉には細かい貫入が入る。	
157	〃	〃	〃 〃	11.3	4.4	9.5	灰白色 〃 -	能茶山窯。外面底部は施釉。外面圏線間に草の文様の染付が巡る。釉には細かい貫入が入る。	
158	〃	〃	〃 〃	11.3	6.5	7.3	灰白色 〃 -	能茶山窯。「茶」の銘。高台脇に重ね痕。外面圏線間に草の文様の染付が巡る。下段は二条の圏線。釉には細かい貫入が入る。	
159	〃	〃	〃 鉢	(15.6)	7.1	(8.0)	明青灰色 〃 灰白色	高台から体部は内湾し、口縁部は外反する。内外面に網目文が施される。	
160	〃	〃	〃 〃	13.8	9.3	7.0	灰白色 〃 〃	見込み山水楼閣文。口縁部は草花文。外面菊花唐草文。高台に「九谷」	
161	〃	〃	〃 〃	25.0	8.9	11.2	灰白色 〃 〃	「肥前有田城岩」の印。内面大牡丹文が呉須と金、赤の彩色により描かれる。外面七宝文が呉須により描かれる。	明治 前期

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
162	W区	表採	磁器 小杯	5.4	2.6	2.0	白色 〃 〃	型打成形。口縁部は輪花風に仕上げる。外面は唐草文が 呉須により描かれる。高台内に「九谷」	
163	〃	〃	〃 〃	5.0	2.7	1.8	白色 〃 〃	外面に濃淡の呉須により交互に瓢箪が描かれる。	
164	〃	〃	〃 〃	7.0	3.3	2.6	白色 〃 〃	口縁部口錆釉。外面に印判手草文。	明治
165	〃	〃	〃 〃	(6.0)	3.0	2.1	白色 〃 〃	内面に山水楼閣文。高台内に「九谷」	
166	〃	〃	〃 〃	7.2	3.0	2.6	灰白色 〃 〃	内面に淡い呉須により松樹と州浜、塔と富士が描かれ る。高台はケズリ。	
167	〃	〃	〃 〃	7.5	2.9	2.8	灰白色 〃 〃	旭日旗と赤十字旗、「征露」の文字が描かれる。	
168	〃	〃	〃 〃	8.4	3.3	2.8	白色 〃 〃	旭日旗と日章旗、「征露記念」の文字が描かれる。	
169	〃	〃	〃 〃	8.1	3.5	3.3	白色 〃 〃	旭日旗と日章旗、「軸重兵」「記念」「満期」「細木」の 文字が描かれる。	
170	〃	〃	〃 〃	全長 5.8	全幅 5.4	全厚 3.2	灰白色 〃 〃	鬼面盃。外面は鬼面。内面は色絵が施されるが剥がれ落 ち不明。一端に穿孔があり、酒を飲むとビーという音が なる「うぐいす盃」。重量 38.9g	
171	〃	〃	〃 皿	8.4	1.7	4.5	白色 〃 〃	統制陶器。外底部に「岐 489」の統制番号が型印により 施される。	
172	〃	〃	〃 碗	9.0	4.9	2.8	白色 〃 〃	統制陶器。外面に椿が色絵により描かれる。外底部に「岐 126」の統制番号が呉須印により施される。	
173	〃	〃	〃 〃	(8.8)	4.7	2.8	白色 〃 〃	統制陶器。外面に丸文と圏線の淡い色絵が施される。外 底部に「岐 14 □」の型印。	
174	〃	〃	〃 〃	9.4	5.0	3.0	灰白色 〃 〃	統制陶器。外面に椿と鯛が色絵で描かれる。外底部に「岐 149」の統制番号が型印される。	
175	〃	〃	〃 〃	(10.4)	5.6	3.5	白色 〃 〃	統制陶器。外面体部下半から高台にかけて多重圏線。体 部中に松樹風の文様が淡い呉須により施される。外底 部に「岐 37」の統制番号が型印される。	
176	〃	〃	〃 皿	(12.8)	4.0	(5.2)	白色 〃 〃	統制陶器。足高の高台から体部は腰折れ、口縁部は端部 を外方に屈曲させる。外面口縁部直下に緑色の二重圏線 が施される。	
177	〃	〃	〃 碗	(11.2)	4.7	(4.0)	白色 〃 〃	統制陶器。口縁外面に緑色の二重圏線が施される。	
178	〃	〃	〃 急須蓋	6.8	3.1	返り径 5.7	灰白色 〃 〃	統制陶器。白磁釉が外底以外全体に施され、外面に鉄釉 と青・赤釉により梅樹が描かれる。蓋裏に「波 26」の 統制番号。	
179	〃	〃	〃 急須	-	9.6	6.5	灰白色 〃 〃	統制陶器。白磁釉が外底以外全体に施され、胴部に鉄釉 と青・赤釉により梅樹が描かれる。	
180	〃	〃	〃 碗	(9.8)	4.6	2.9	白色 〃 〃	子供茶碗。外面に旭日旗、千鳥格子、動物のモチーフ画が プリントされる。色絵と思われる着色は剥がれる。	
181	〃	〃	〃 〃	(9.8)	4.5	3.0	白色 〃 〃	子供茶碗。外面に電車のプリントが施される。色絵と思 われるが着色は剥がれる。	
182	〃	〃	〃 〃	8.8	4.2	3.4	白色 〃 〃	子供茶碗。外面に車両に乗る桃太郎と雉と犬がプリント されるが着色は剥がれる。	
183	〃	〃	〃 爛徳利	3.0	18.9	5.7	白色 〃 〃	銅板転写摺り。口縁部鋸歯文。松樹、鶴。	
184	〃	〃	〃 徳利	-	(14.2)	5.2	灰白色 〃 〃	外面色絵による草花・鳥の染付。高台内に「九谷」	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
185	W区	表採	磁器 瓶	-	(10.5)	3.4	にぶい黄橙色 灰白色	口縁部は欠損。頸部は藤花、胴部は梅樹、若松。高台は割り底で畳付釉剥ぎ。	
186	〃	〃	〃 仏飯器	4.9	6.1	3.5	明緑灰色 〃 灰白色	杯部は浅く、高さの1/2未満。脚部中位に稜を持つ。底部は削り出し、中央部が凹む。全体に青みがかった白磁釉が施される。	
187	〃	〃	〃 灯明皿	6.8	5.3	4.2	暗褐色 〃 灰オリーブ色	能茶山窯。台付灯明皿。ロクロ成形。底部脇まで鉄釉が施される。底部回転糸切り。	
188	〃	〃	〃 碇子	全長 4.6	全幅 6.7	全厚 2.7	白色 〃 〃	「Y.O.式 新案特許」の型印。重量 108.8g	
189	〃	〃	〃 〃	全長 3.6	全幅 2.8	全厚 2.8	にぶい赤褐色 〃 〃	玉碇子。2ヶ所の穿孔。中央に溝状の袂りが巡る。褐色釉を施す。重量 31.0g	
190	〃	〃	〃 〃	-	11.6	6.6	白色 〃 〃	四国電力（1951年創立）のマークか。	
191	〃	〃	〃 開閉安全器	全長 8.6	全幅 6.2	全厚 4.0	にぶい赤褐色・灰白色 にぶい赤褐色 〃	「特許」「高岡式」「10.A」「250.V」の型印。大正6～昭和10年に流通。重量 279.0g	
192	〃	〃	軒丸瓦	全長 35.3	全幅 14.6	全厚 1.6	暗灰色 〃 灰白色	右巻きの三巴文。瓦当に「□鳥田」の刻印。重量 1550.0g	
193	〃	〃	軒瓦	全長 32.4	全幅 (21.6)	全厚 1.7	暗灰色 〃 灰白色	棧瓦。橘文。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。脇区の刻印は「□王（もしくは玉）」重量 1860.0g	
194	〃	〃	〃	全長 10.0	全幅 10.0	全厚 1.4	灰色	棧瓦。橘文。「寶王（もしくは玉）」重量 120.0g	
195	〃	〃	〃	全長 5.0	全幅 9.6	全厚 1.8	暗灰色	棧瓦。脇区の刻印は「蒲林」重量 120.0g	
196	〃	〃	〃	全長 26.3	全幅 29.7	全厚 1.5	〃	棧瓦。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「岩入文」の刻印。重量 2,180.0g	
197	〃	〃	〃	全長 26.3	全幅 29.4	全厚 1.7	〃	棧瓦。中心飾りは二巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「蒲百」の刻印。重量 1,950.0g	
198	〃	〃	〃	全長 25.5	全幅 30.1	全厚 2.0	〃	棧瓦。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「佐川近藤長枝」の刻印。重量 2,400.0g	
199	〃	〃	〃	全長 26.0	全幅 30.5	全厚 1.9	〃	棧瓦。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「アキ□」の刻印。重量 2,490.0g	
200	〃	〃	〃	全長 25.7	全幅 30.0	全厚 1.7	〃	棧瓦。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「廣□」の刻印。重量 2,180.0g	
201	〃	〃	〃	全長 26.0	全幅 31.0	全厚 1.7	灰色	棧瓦。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「佐川田村亥太郎」の刻印か。重量 2,790.0g	
202	〃	〃	〃	全長 25.8	全幅 29.2	全厚 1.8	〃	棧瓦。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「天柳」の刻印。重量 2,200g	
203	〃	〃	〃	全長 26.9	全幅 30.7	全厚 1.8	〃	棧瓦。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「王仲」の刻印。重量 2,470.0g	
204	〃	〃	〃	全長 25.3	全幅 29.1	全厚 2.0	〃	棧瓦。中心飾りは三巴文。唐草は2反転で飛び唐草が付く。「佐川」の刻印。重量 2,500.0g	
205	〃	〃	平瓦	全長 25.9	全幅 30.0	全厚 1.4	〃	棧瓦。「柴□」の刻印。重量 1,720.0g	
206	〃	〃	〃	全長 25.3	全幅 29.4	全厚 1.8	〃	棧瓦。「アキ増」の刻印。重量 2,140.0g	
207	〃	〃	〃	全長 26.7	全幅 29.5	全厚 1.6	〃	棧瓦。「岩入文」の刻印。重量 2,040.0g	
208	〃	〃	〃	全長 26.1	全幅 30.3	全厚 1.7	暗灰色	棧瓦。「□政」の刻印。重量 2,200.0g	

写真図版



西浦遺跡遠景(北西より)



西浦遺跡全景(西より)



E区調査前状態(南西より)



調査区設定状態(北東より)



E区南部遺構検出状態(北東より)



E区北部遺構検出状態(南東より)



E 区遺構完掘状態(北東より)



E 区遺構完掘状態(東より)



E 区調査区西壁セクション(南東より)



E 区調査区北壁セクション(南より)



E区 P58土師質土器鍋(7)出土状態



E区 P79陶器皿(10)出土状態



E区 P93陶器播鉢(16)出土状態



E区 P84土錘(17)出土状態



E区 SK1青磁碗(20)出土状態



E区 SK12錢貨他(29~33)出土状態



E区 SK16刀子(35)出土状態



E区 SK17磁器碗(37)出土状態



E区Ⅲ層陶器皿(46)出土状態



E区Ⅲ-2層陶器碗(51)出土状態



E区Ⅳ層青磁碗(64)出土状態



E区SK5セクション(西より)



E区SK7セクション(北西より)



E区SK9セクション(南西より)



E区SD1セクション(南西より)



E区SD3セクション(南西より)



W区調査前状態(北東より)



W区近現代遺物出土状態(南東より)



W区遺構検出状態(北東より)



W区遺構検出状態(南東より)



W 区 SB4 検出状態(西より)



W 区 SB4 完掘状態(西より)



W区遺構完掘状態(南東より)



W区遺構完掘状態(北東より)



W区P41土師質土器杯(69)出土状態



W区P28土師質土器杯(73)出土状態



W区I層鉄製品鏢(78)出土状態



W区III層土師質土器皿(83)出土状態



W区III層陶器挿鉢(86)出土状態



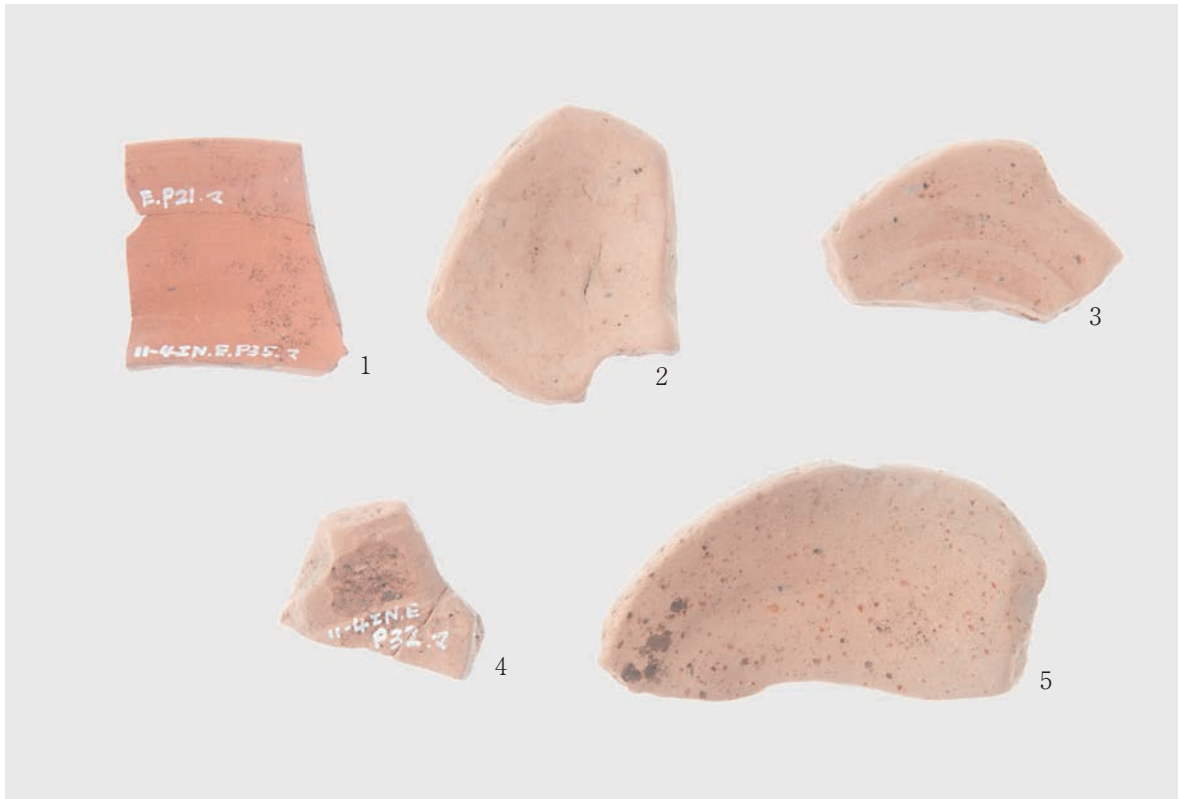
W区IV層土師質土器杯(90)出土状態



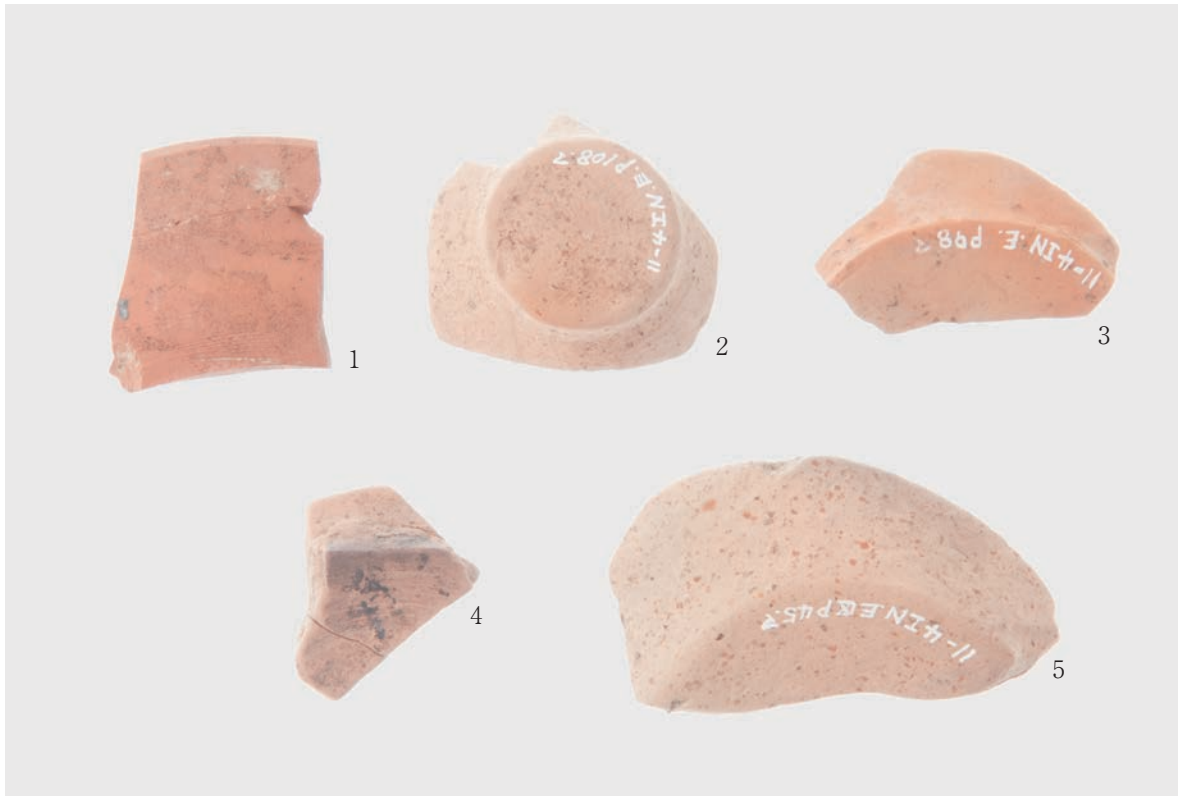
W区SK8セクション(北東より)



W区SK9集石検出状態(東より)



E区 P21 · 45 · 98 · 108, SA2 - P7 土師質土器(皿 · 小杯 · 杯) (内面)



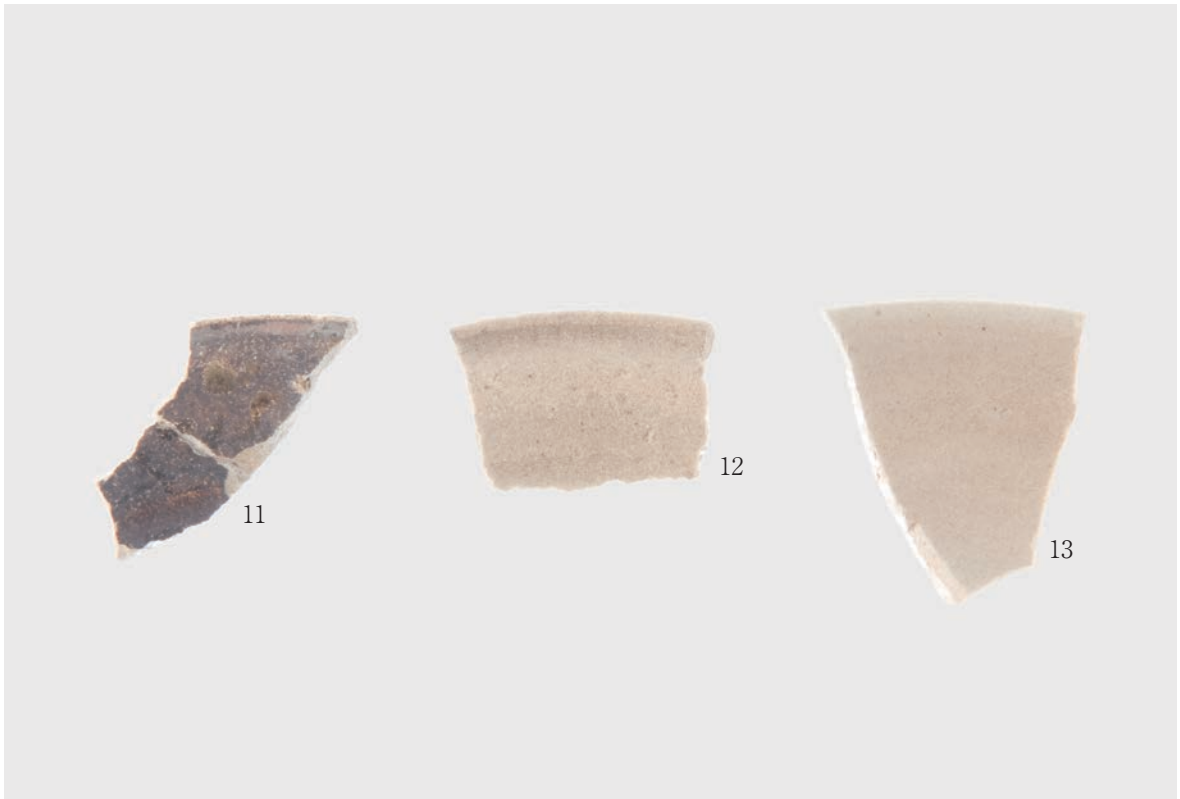
E区 P21 · 45 · 98 · 108, SA2 - P7 土師質土器(皿 · 小杯 · 杯) (外面)



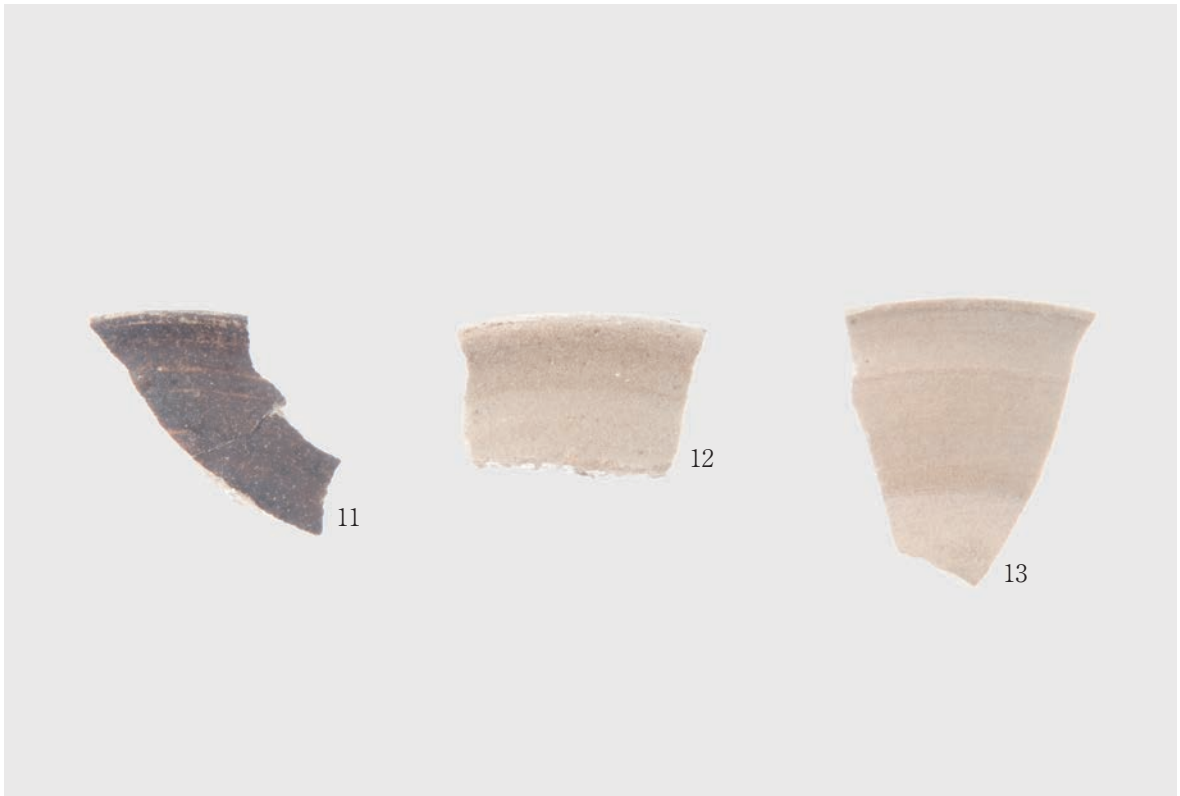
E区 P58・112 土師質土器(羽釜・鍋)



E区 P79 陶器(皿) (内外面)



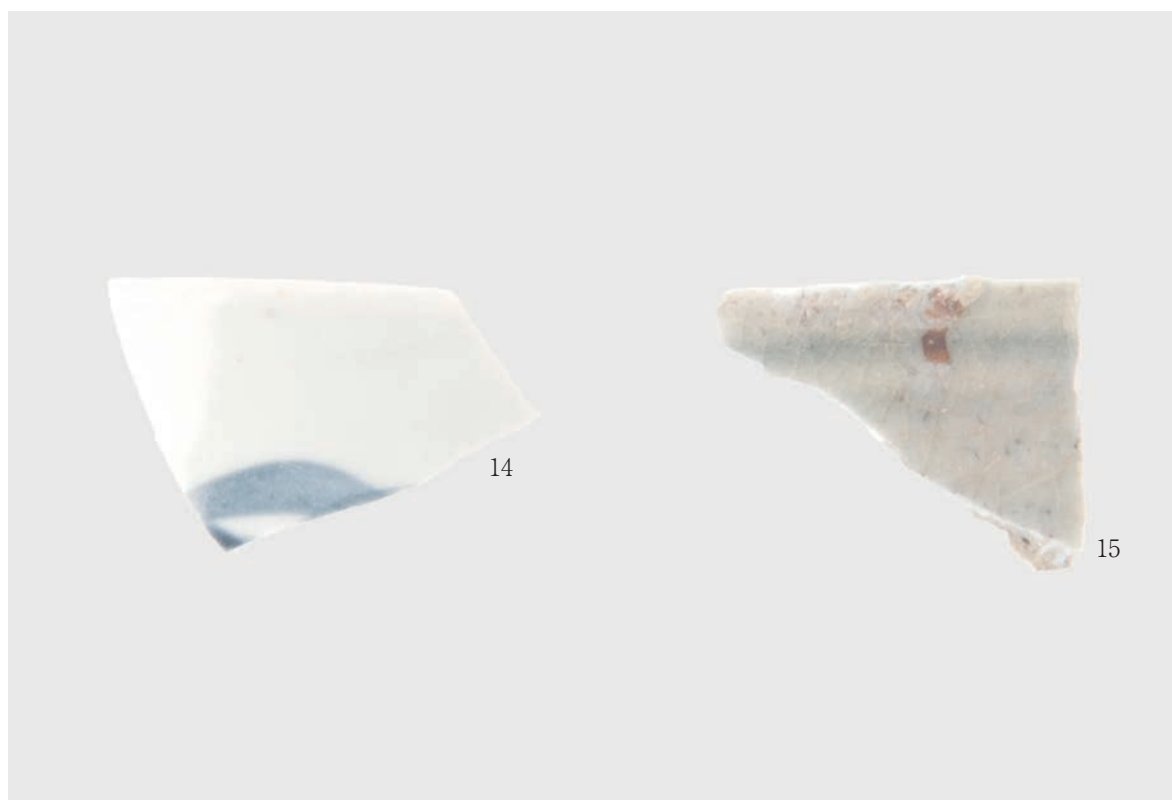
E 区 P55 · 65 · 110 陶器(皿) (内面)



E 区 P55 · 65 · 110 陶器(皿) (外面)



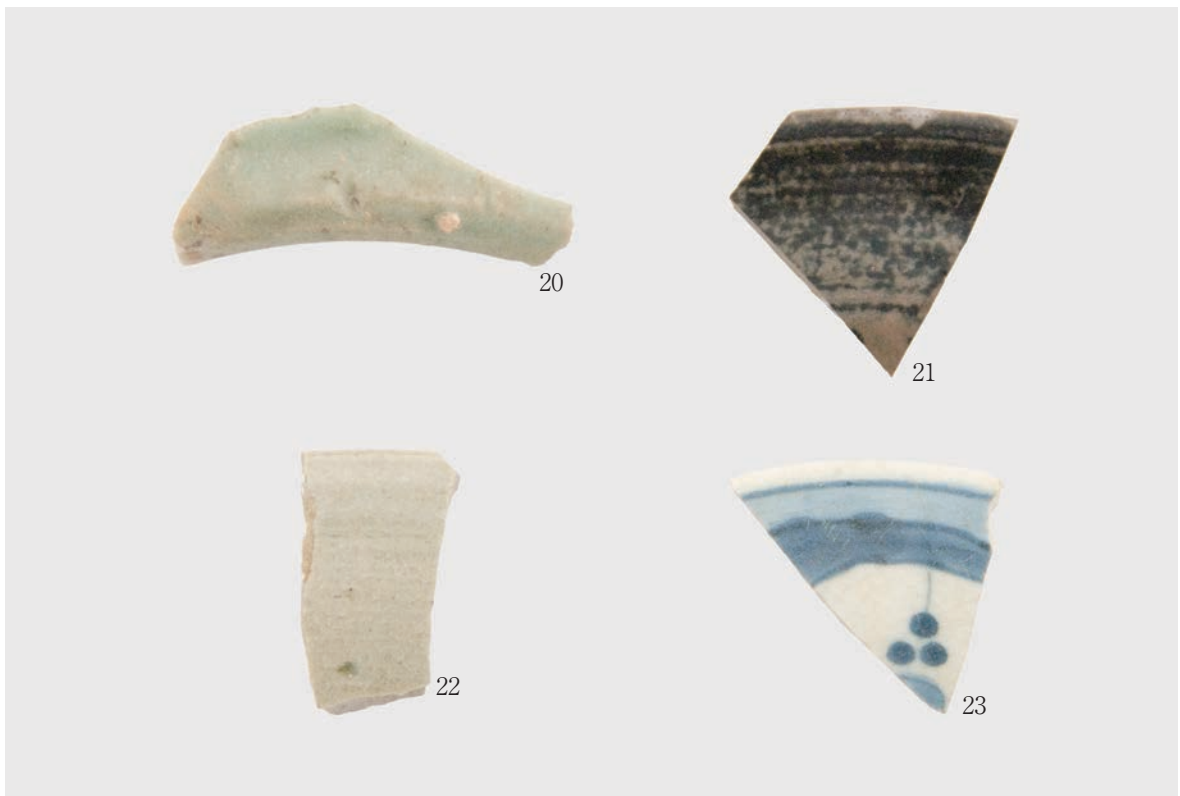
E 区 P38 · 89 磁器(碗) (内面)



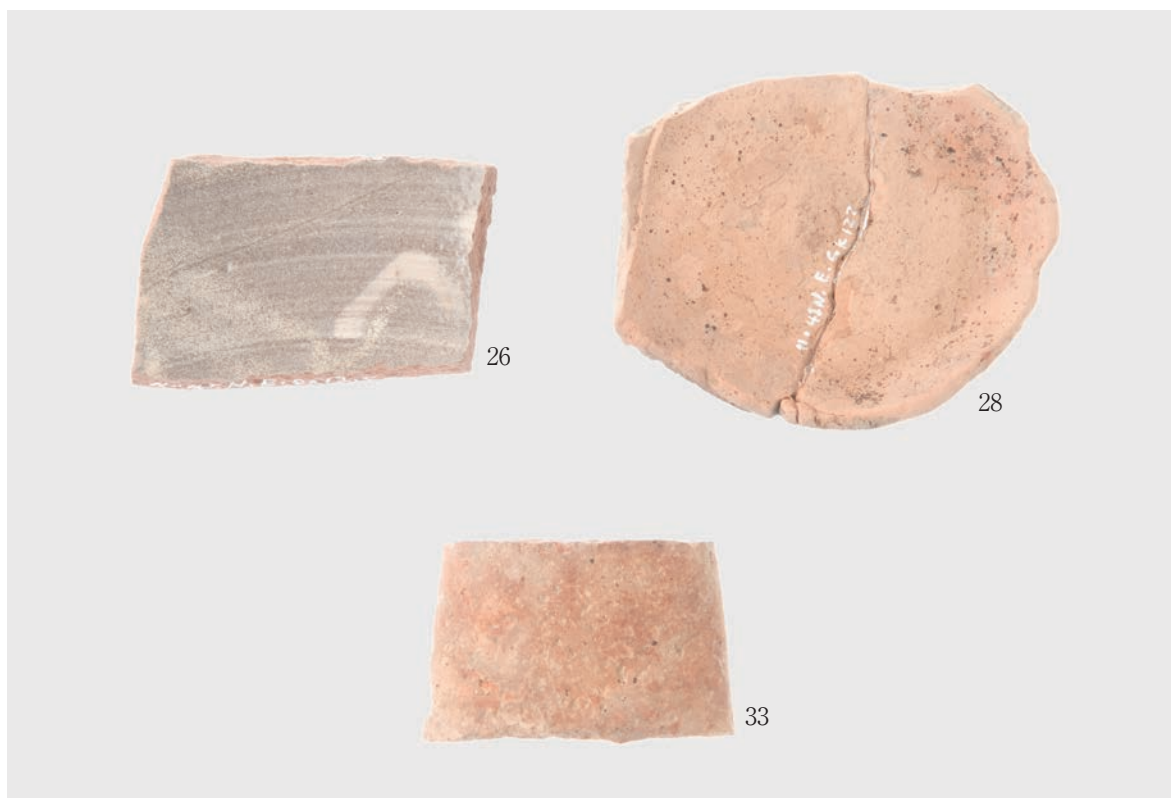
E 区 P38 · 89 磁器(碗) (外面)



E区 SK1·5 青磁(碗), 陶器(皿·碗), 磁器(盖) (内面)



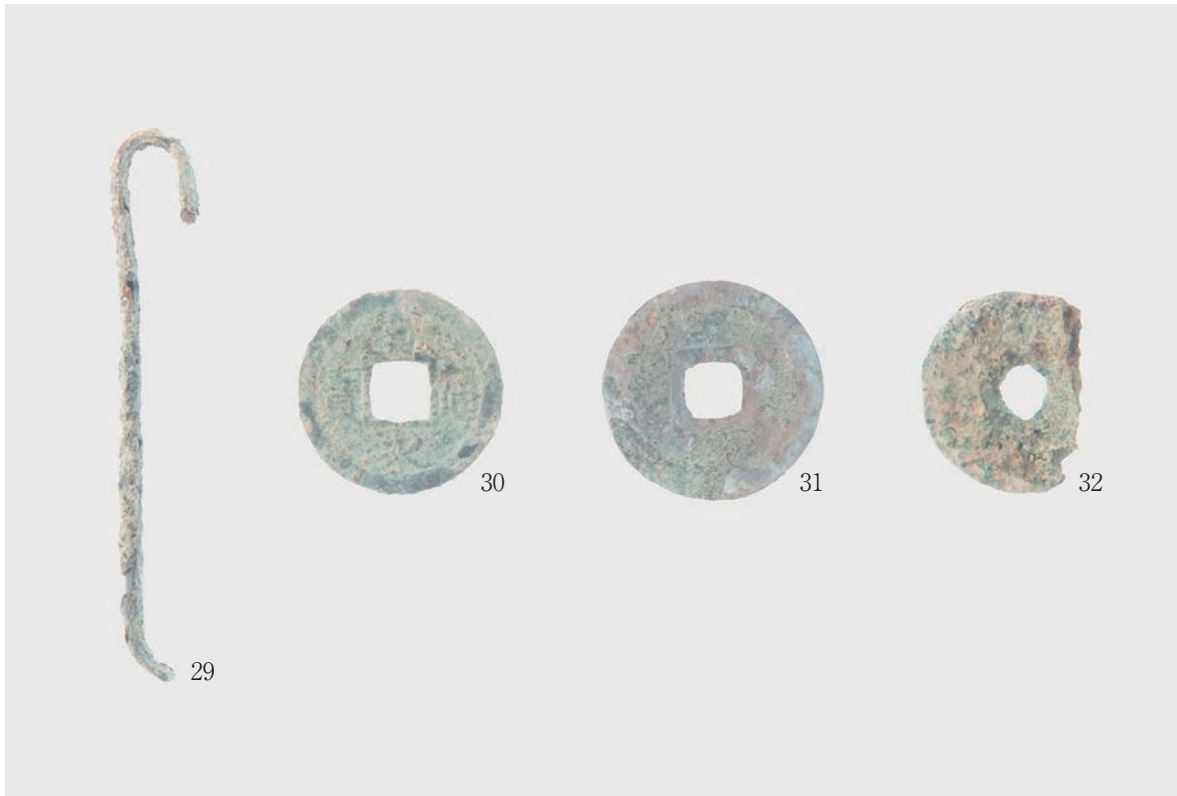
E区 SK1·5 青磁(碗), 陶器(皿·碗), 磁器(盖) (外面)



E区 SK12 陶器(皿), 土師質土器(皿), 石製品(砥石) (内・表面)



E区 SK12 陶器(皿), 土師質土器(皿), 石製品(砥石) (外・裏面)



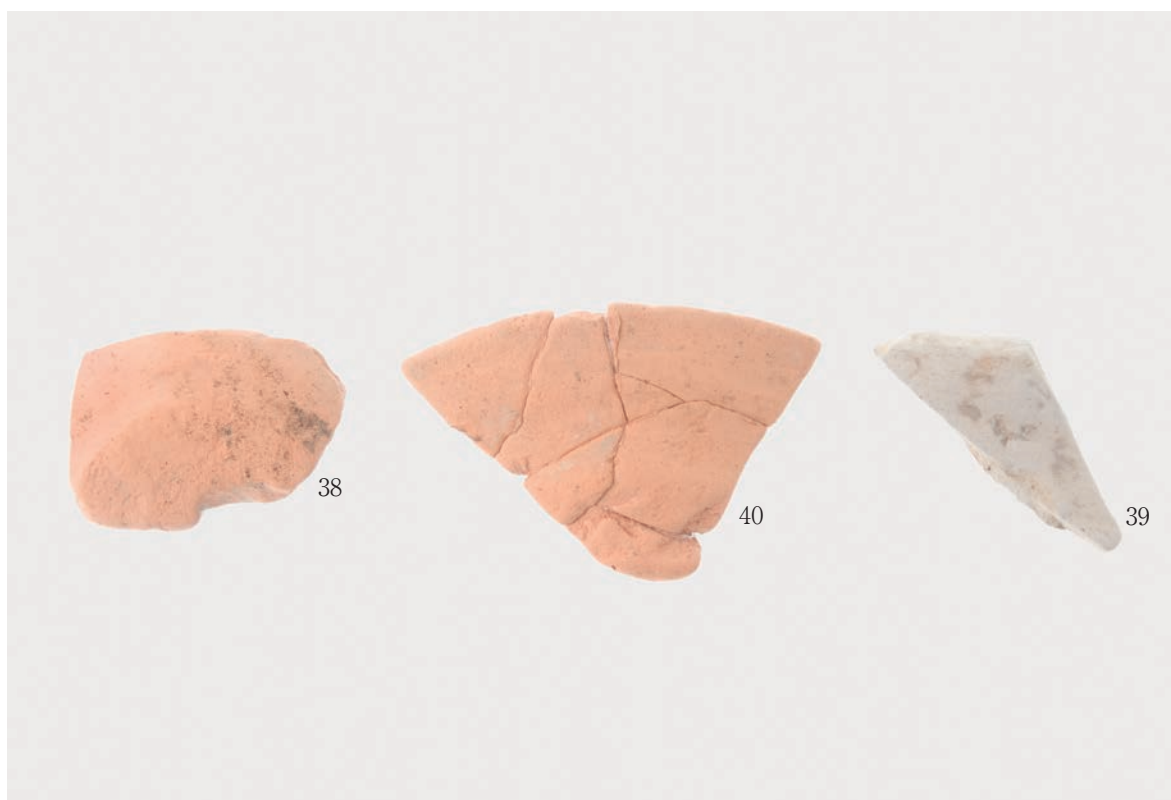
E区 SK12 銅製品(毛抜き)・銭貨



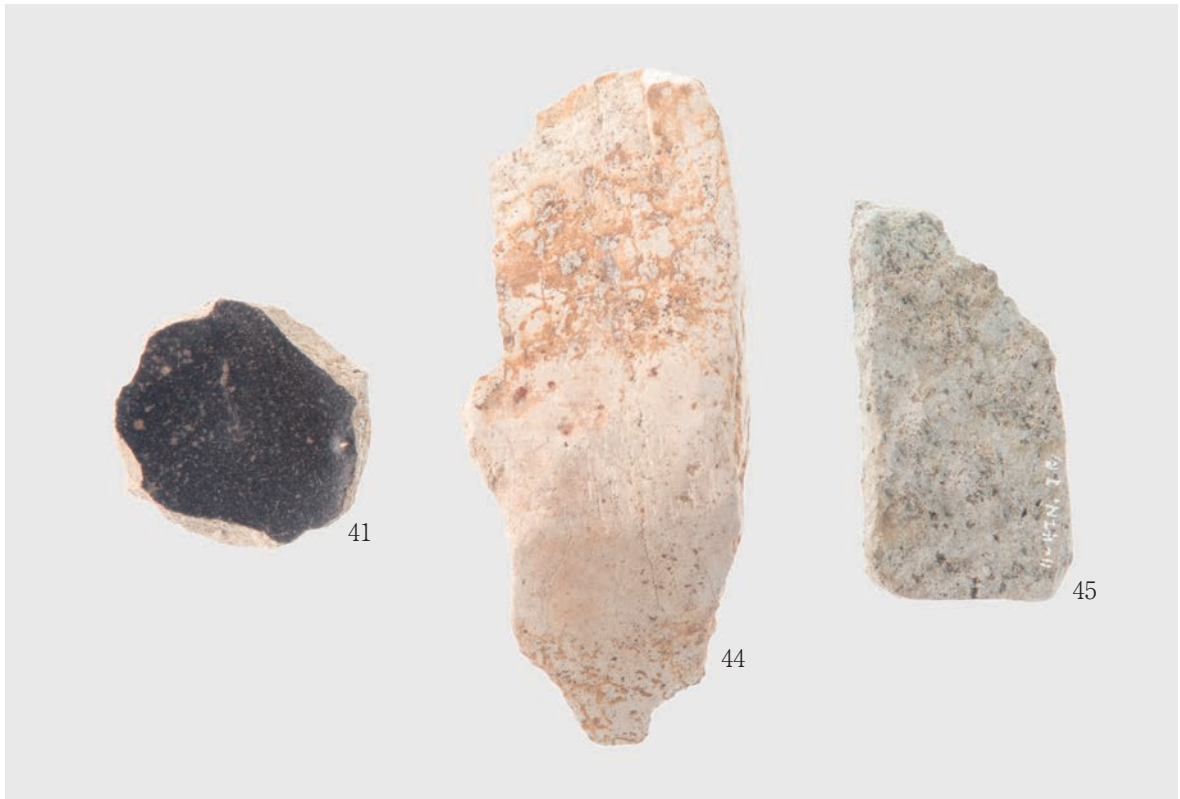
E区 SK16 陶器(皿), 鉄製品(刀子), 銭貨



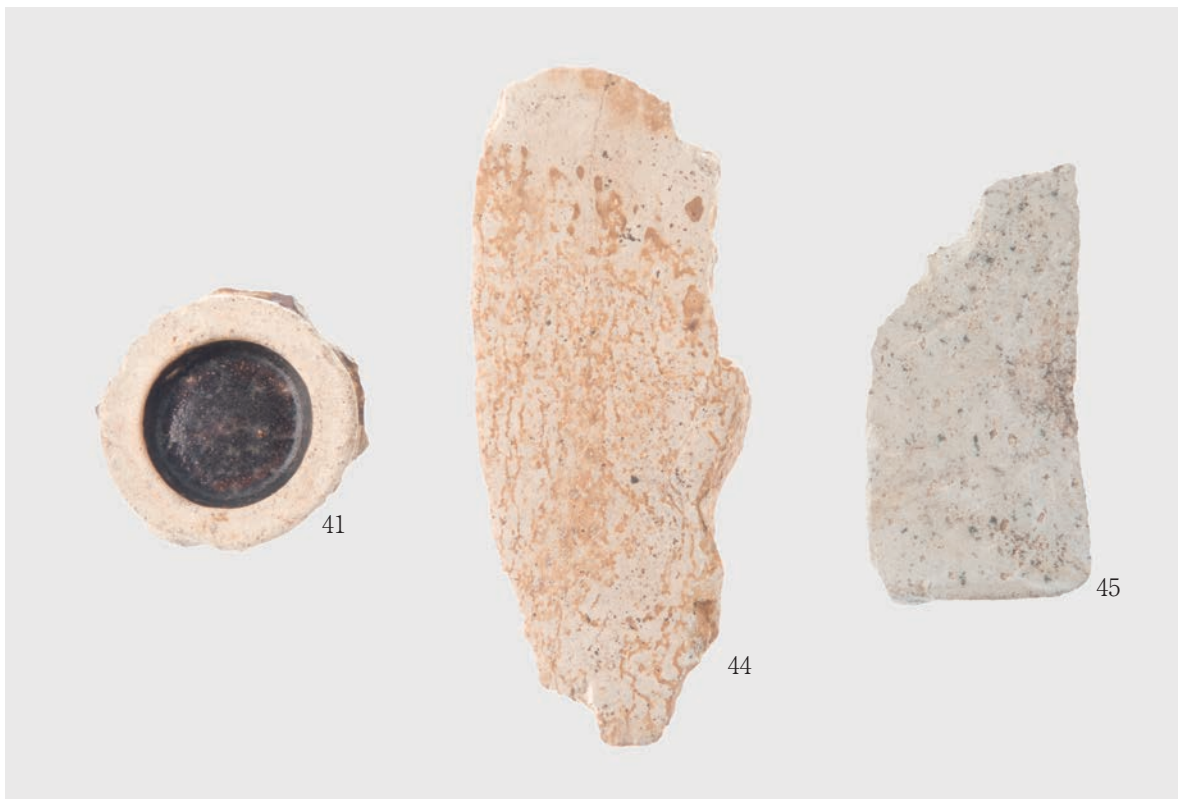
E区 SD1·2·4 土師質土器(杯), 瓦質土器(鍋)(内面)



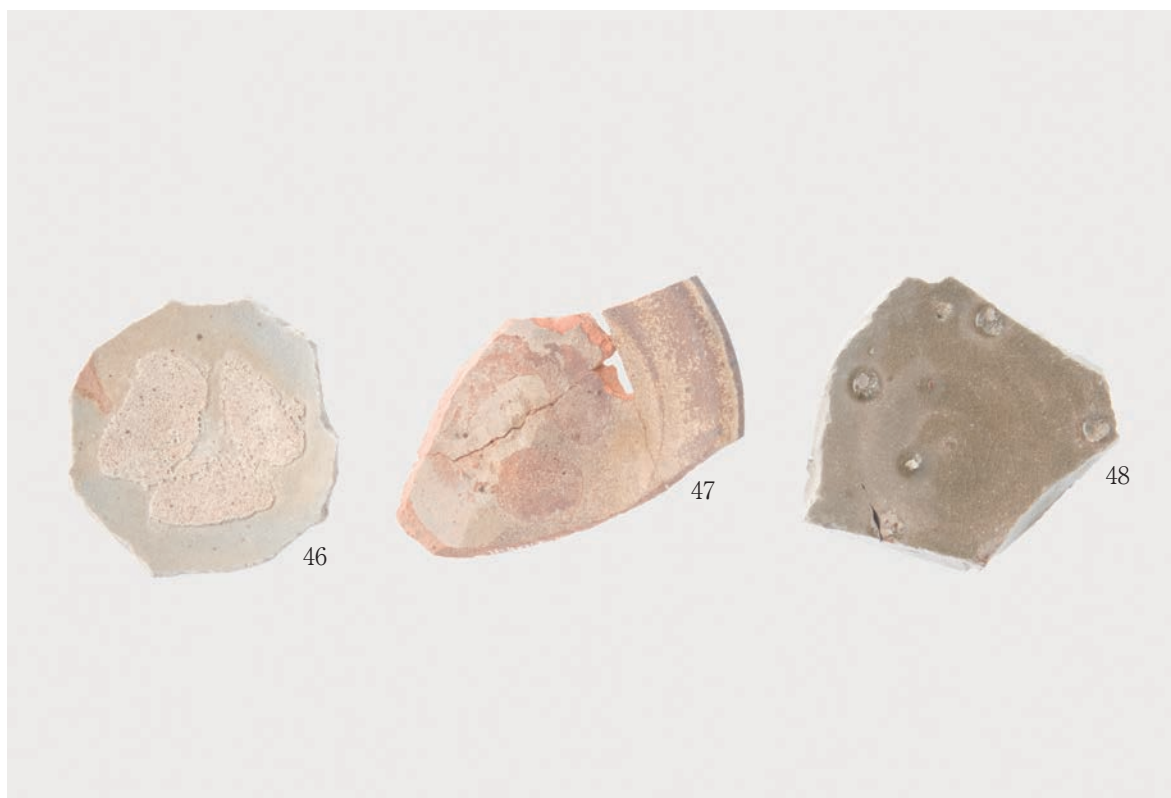
E区 SD1·2·4 土師質土器(杯), 瓦質土器(鍋)(外面)



E区I層 陶器(碗), 石製品(砥石)(内·表面)



E区I層 陶器(碗), 石製品(砥石)(外·裏面)



E区Ⅲ層 陶器(皿·碗) (内面)



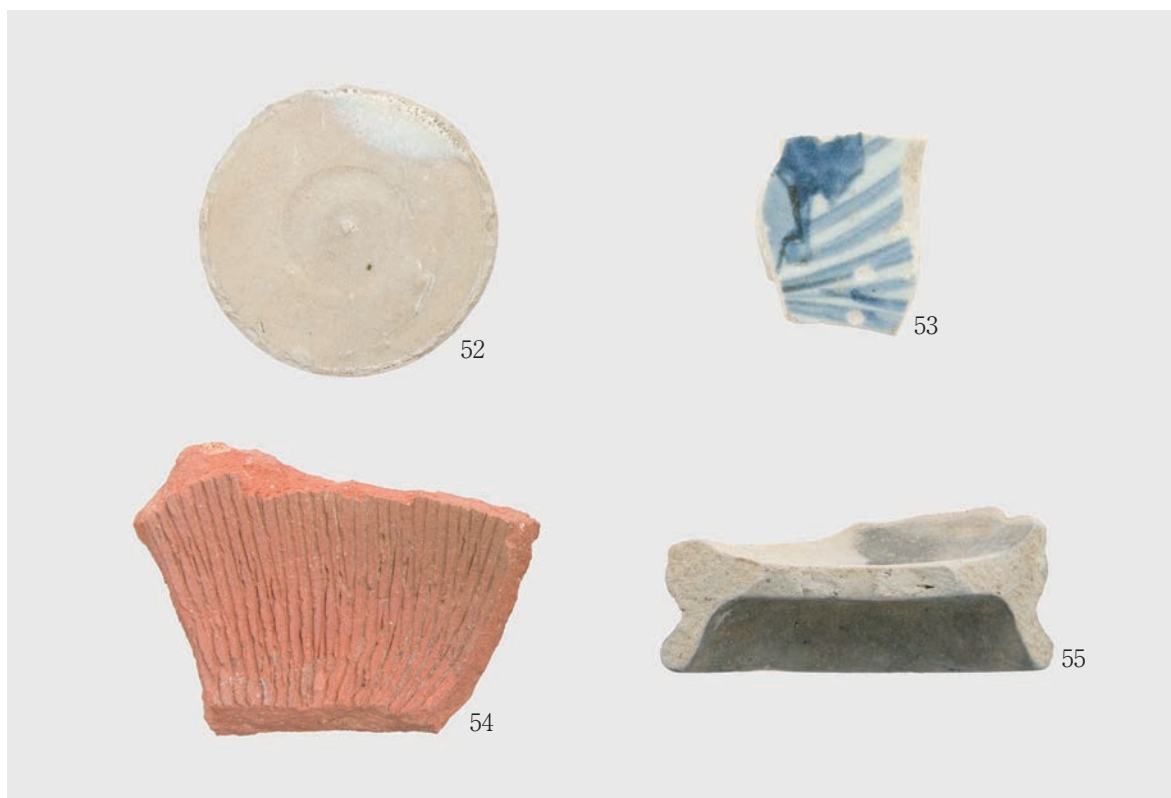
E区Ⅲ層 陶器(皿·碗) (外面)



E区Ⅲ·Ⅲ-2層 陶器(皿·碗) (内面)



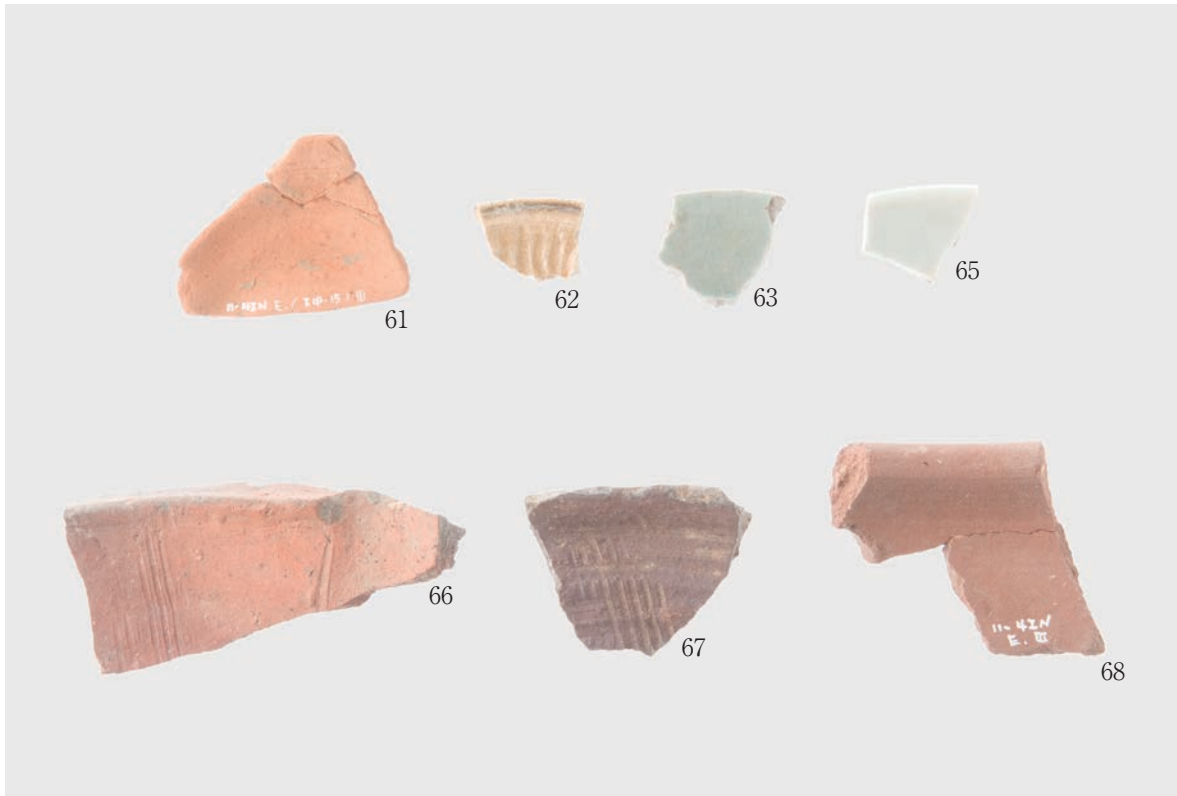
E区Ⅲ·Ⅲ-2層 陶器(皿·碗) (外面)



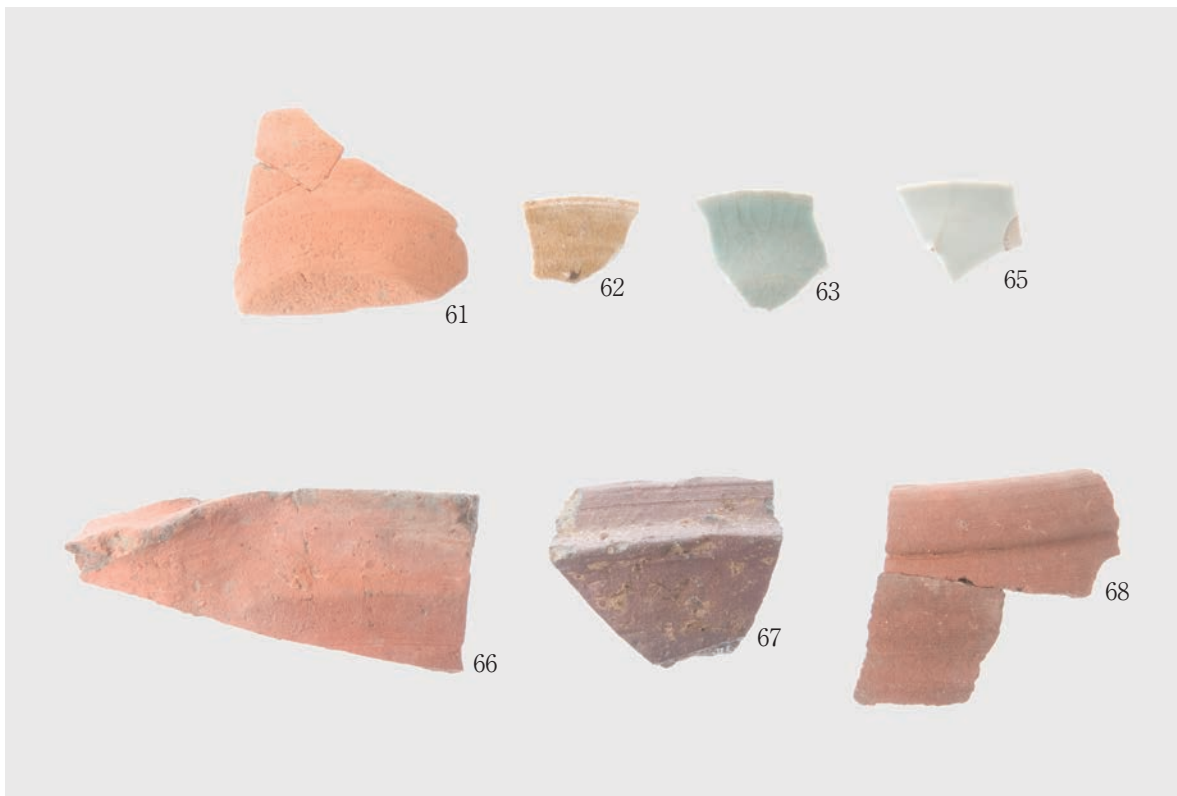
E区Ⅲ·Ⅲ-2層 陶器(壺·搗鉢), 磁器(大皿), 瓦質土器(焜炉) (内面)



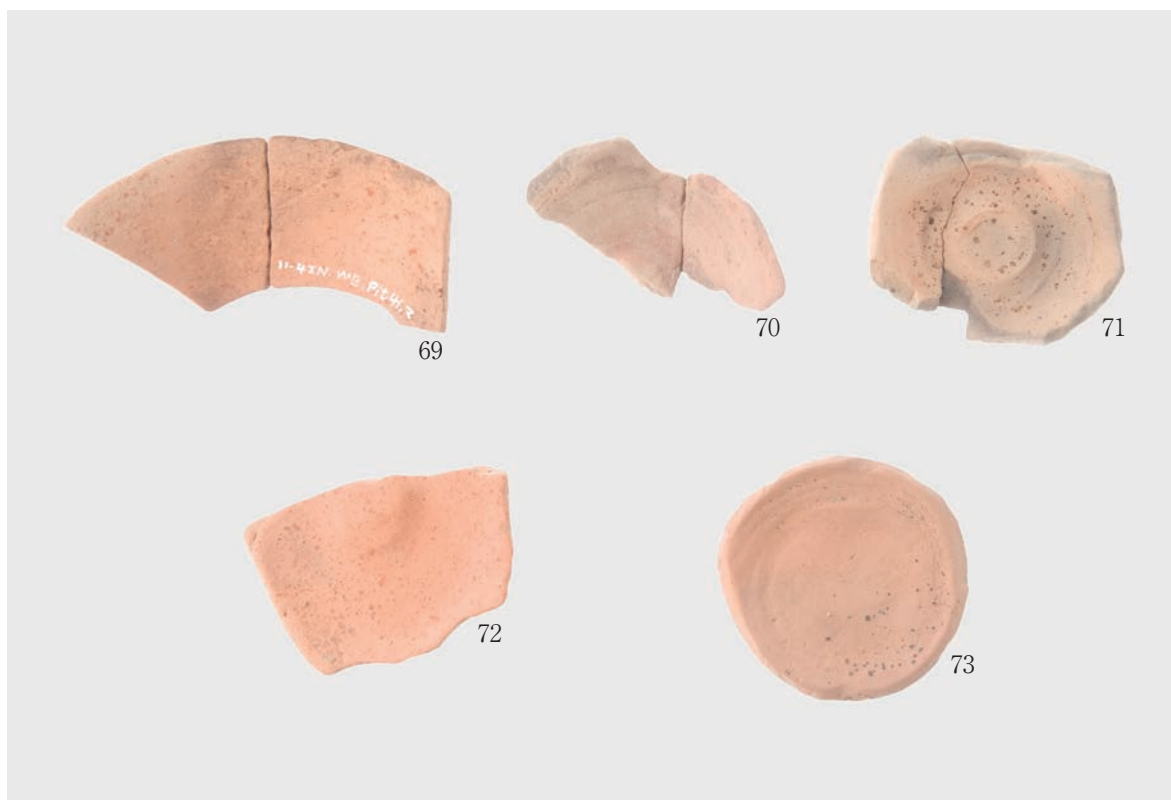
E区Ⅲ·Ⅲ-2層 陶器(壺·搗鉢), 磁器(大皿), 瓦質土器(焜炉) (外面)



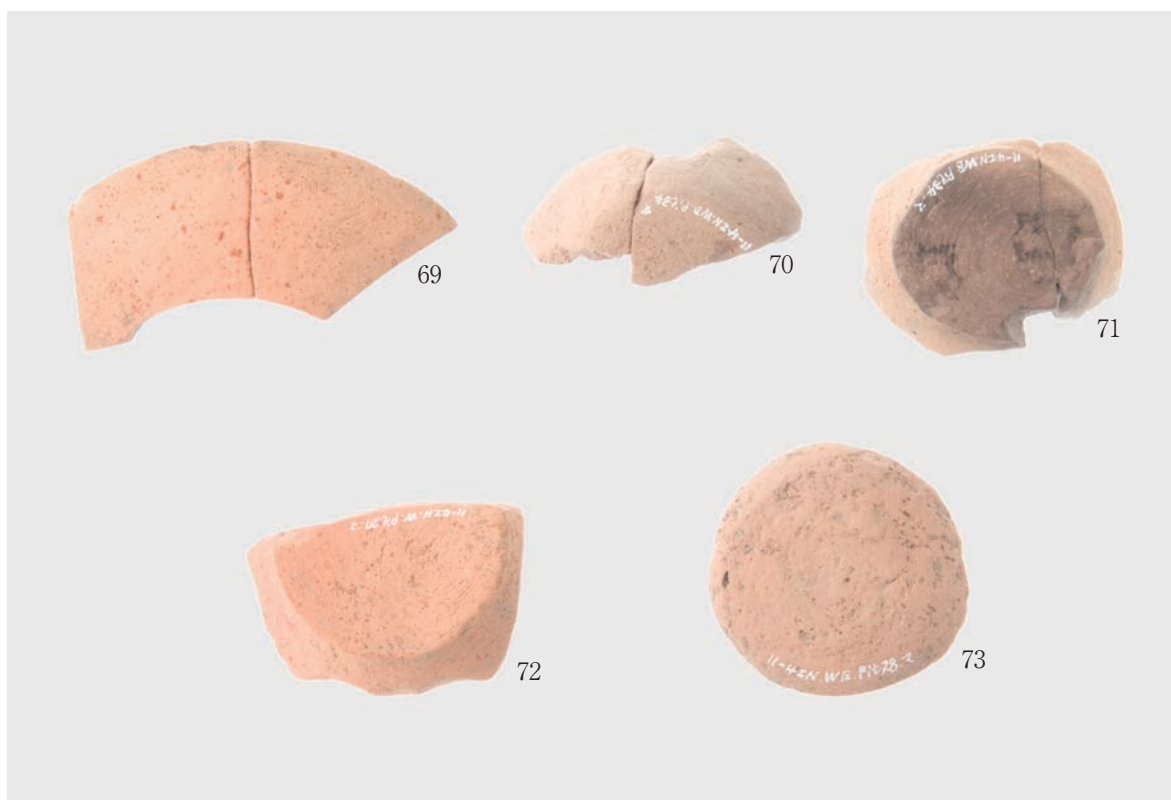
E区IV層 土師質土器(杯), 陶器(皿), 青磁(皿), 白磁(皿), 陶器(播鉢·水屋甕)(内面)



E区IV層 土師質土器(杯), 陶器(皿), 青磁(皿), 白磁(皿), 陶器(播鉢·水屋甕)(外面)



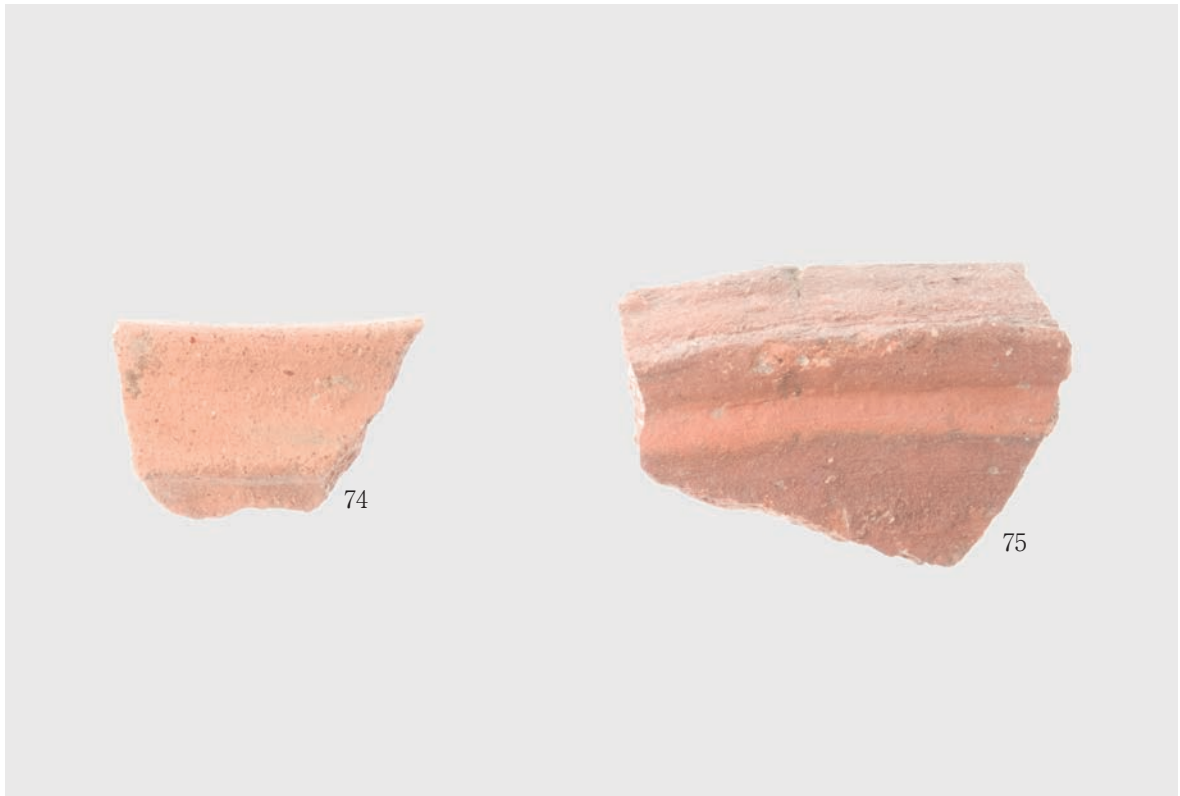
W区 P28·34·41, SB2 - P4 土師質土器(杯) (内面)



W区 P28·34·41, SB2 - P4 土師質土器(杯) (外面)



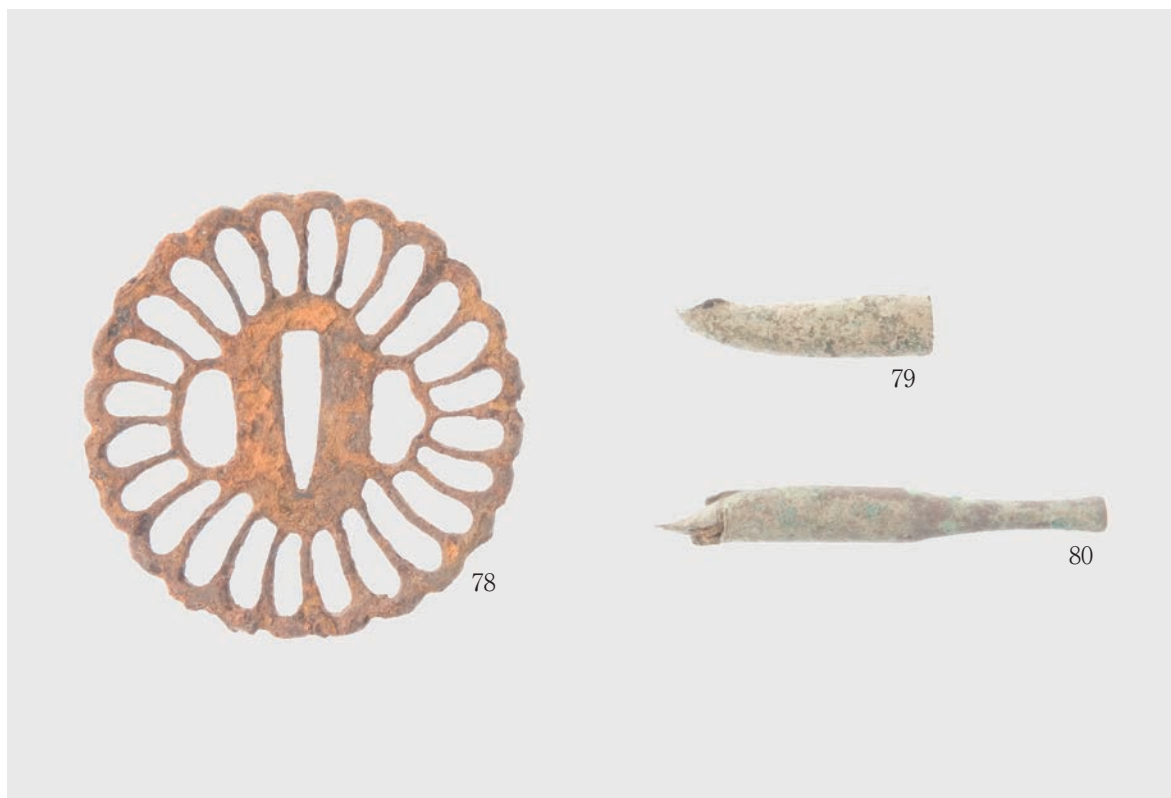
W区 P30・55 土師質土器(鍋), 陶器(播鉢) (内面)



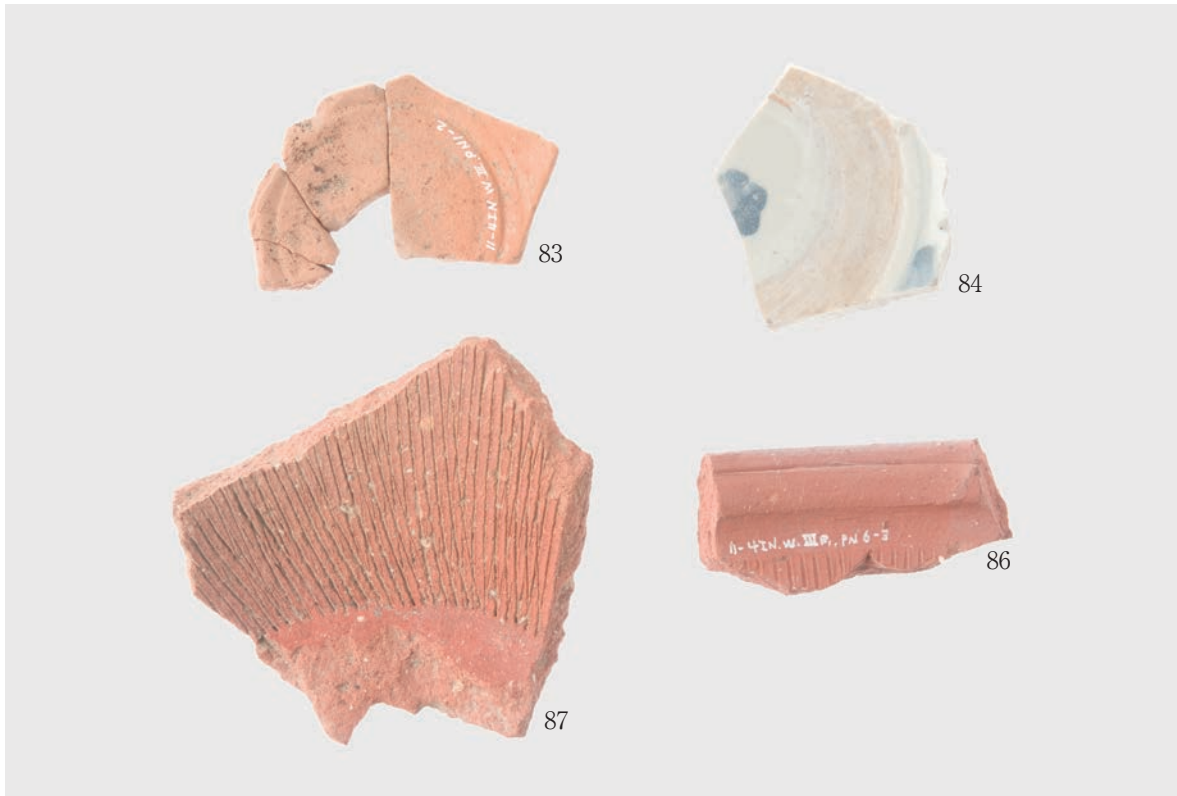
W区 P30・55 土師質土器(鍋), 陶器(播鉢) (外面)



E 区 I · Ⅲ 層, W 区 I · Ⅲ 層 錢貨



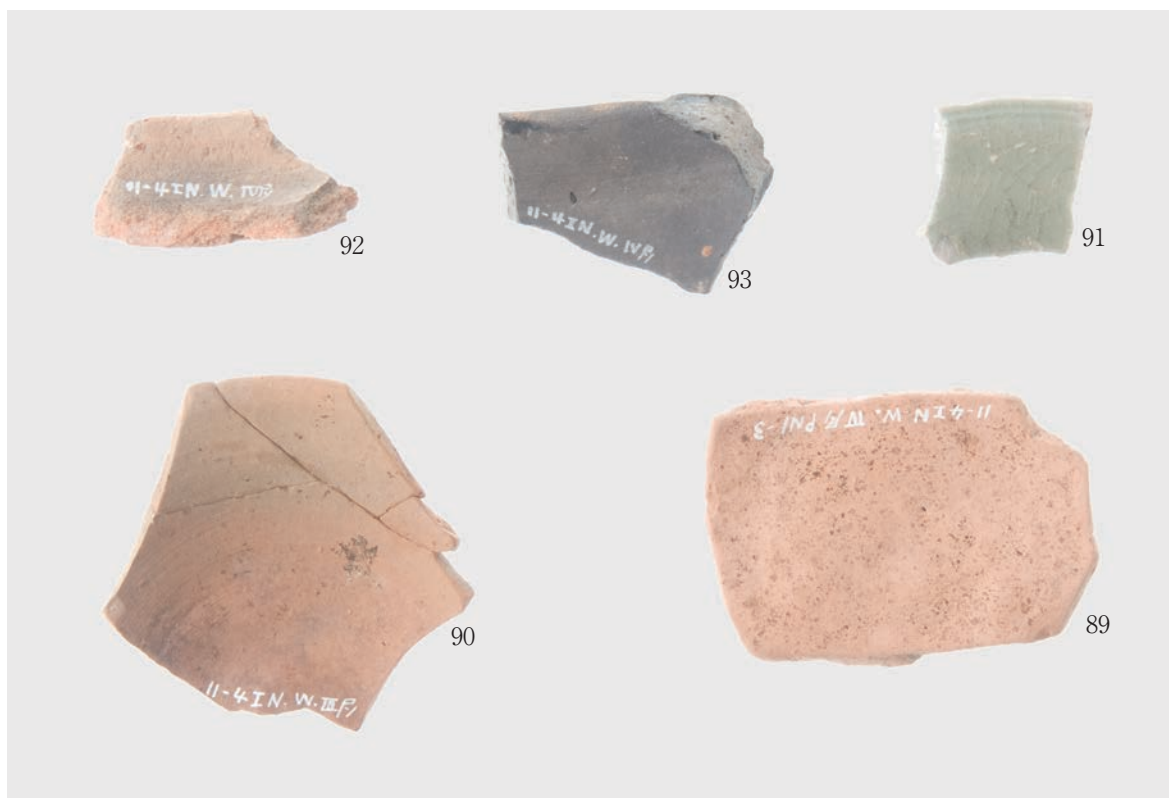
W 区 I 層 鐵製品(鏢), 銅製品(煙管)



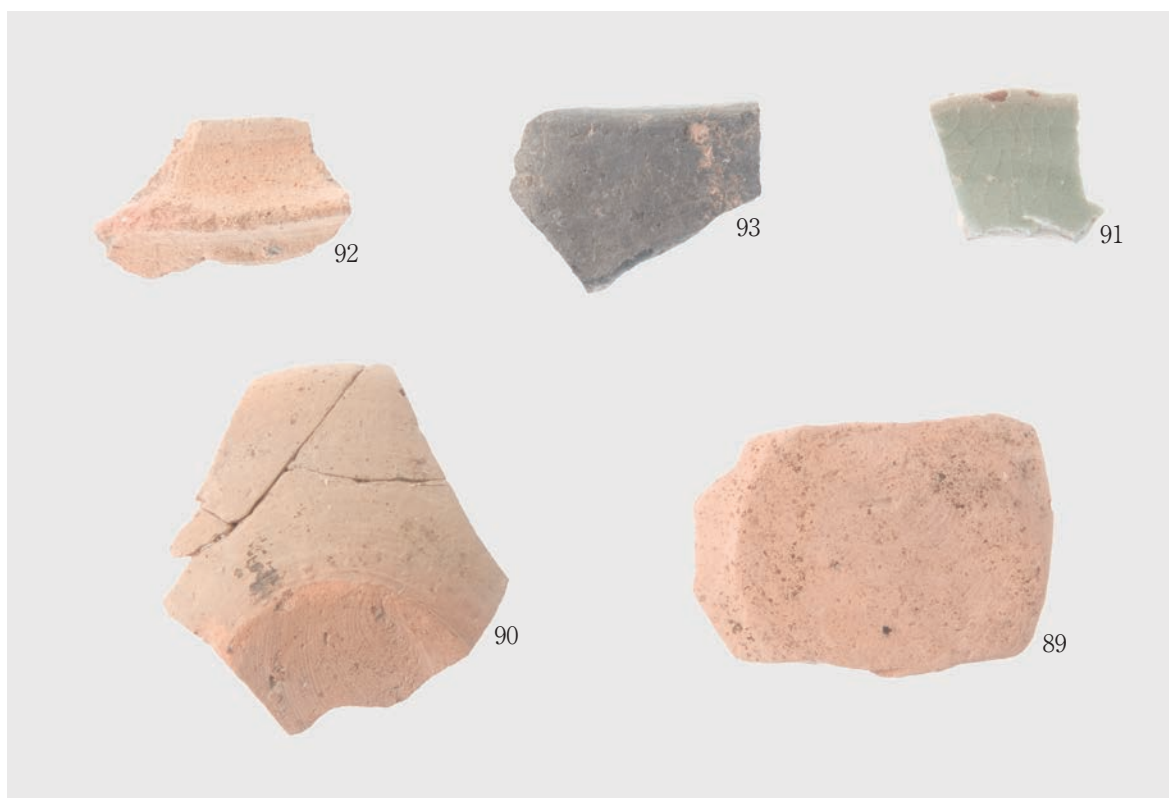
W区Ⅲ層 土師質土器(皿), 磁器(皿), 陶器(擂鉢) (内面)



W区Ⅲ層 土師質土器(皿), 磁器(皿), 陶器(擂鉢) (外面)



W区IV層 土師質土器(皿·杯·羽釜), 青磁(皿), 瓦質土器(火鉢)(内面)



W区IV層 土師質土器(皿·杯·羽釜), 青磁(皿), 瓦質土器(火鉢)(外面)



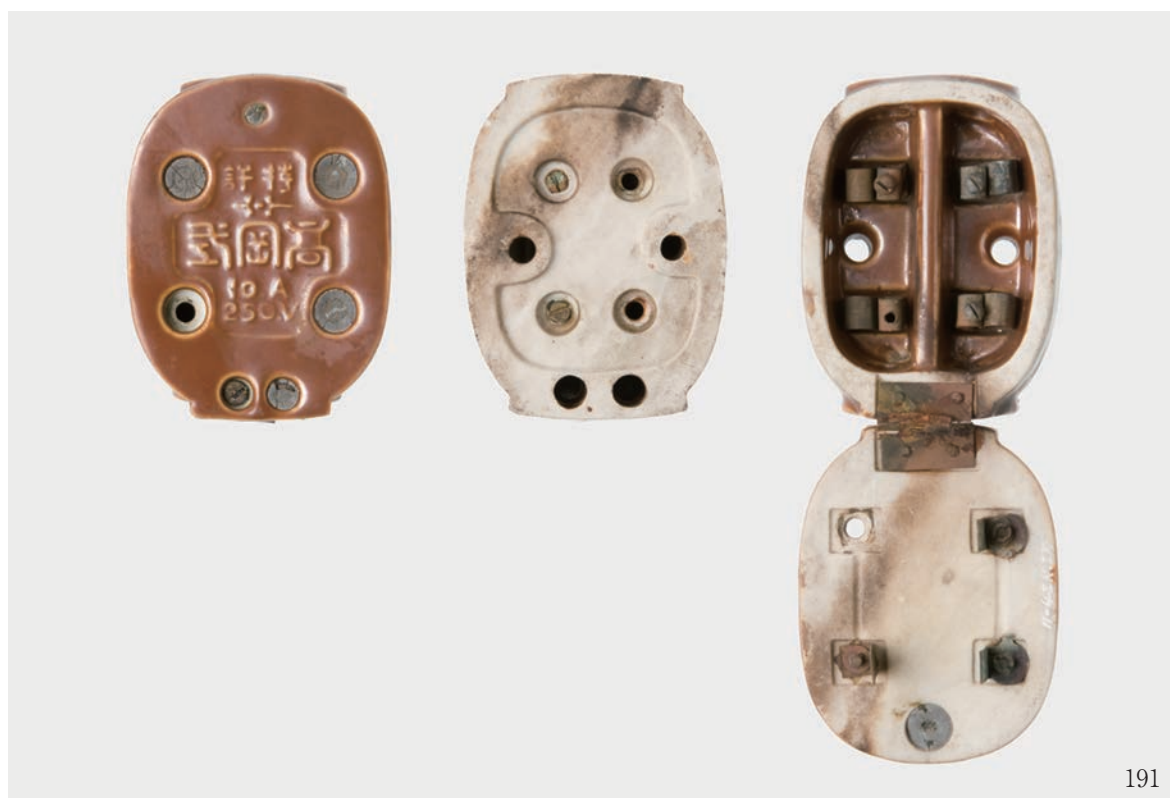
W区表採 磁器(猪口)



W区表採 磁器(段重)



W区表採 磁器(碍子・開閉安全器)



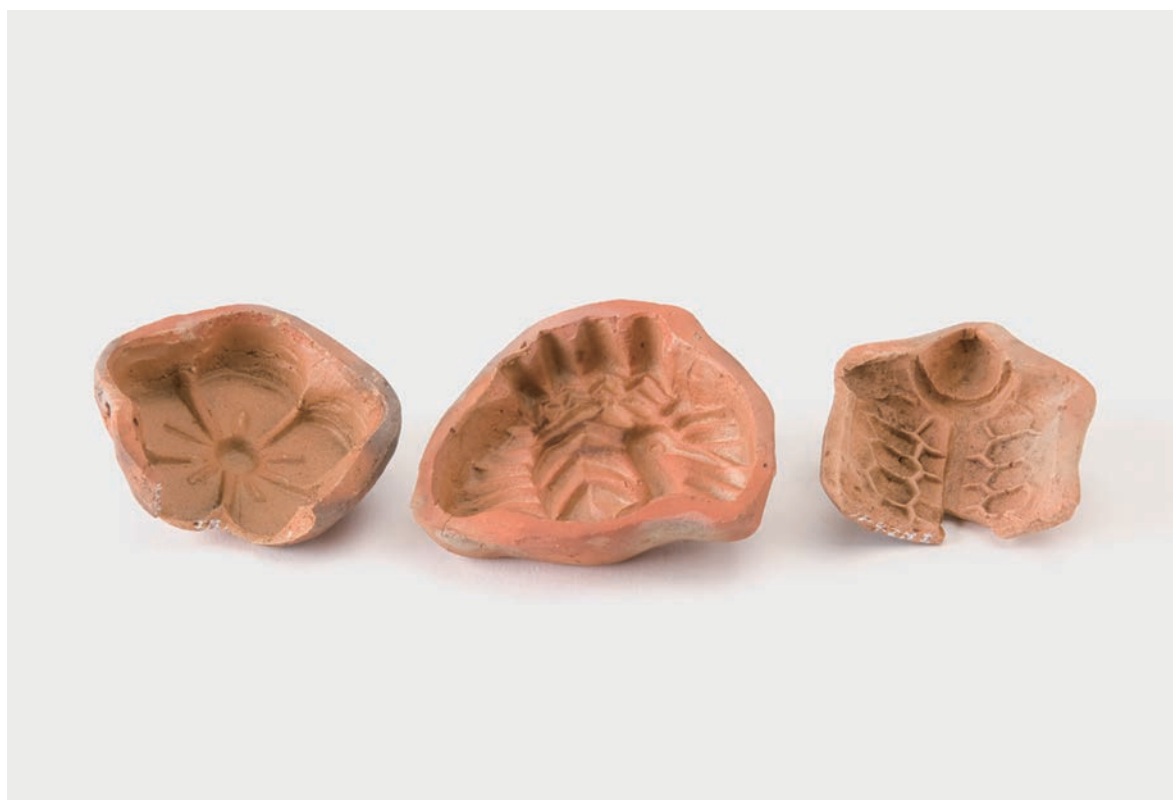
W区表採 磁器(開閉安全器) (表・裏・内部)



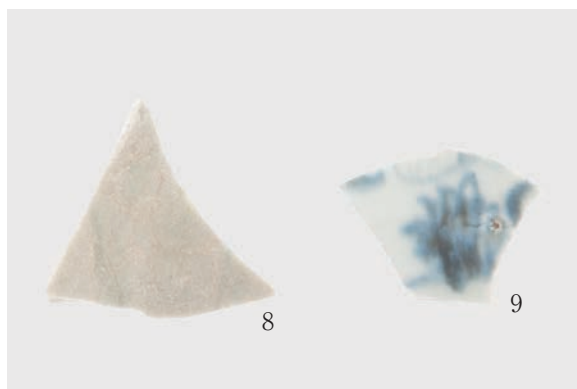
W区 牛乳瓶



W区 汽車茶瓶・蓋



W区表採 陶器(菓子型)



E区 P92・102 青磁(碗), 青花(碗)



E区 P79 陶器(皿)



E区 P93 陶器(擂鉢) (内外面)



E区 P84, SB4 - P7 土製品(土錘), 鉛玉



E 区 P19 石製品(砥石) (表裏面)



E 区 SK7 石製品(砥石) (表裏面)



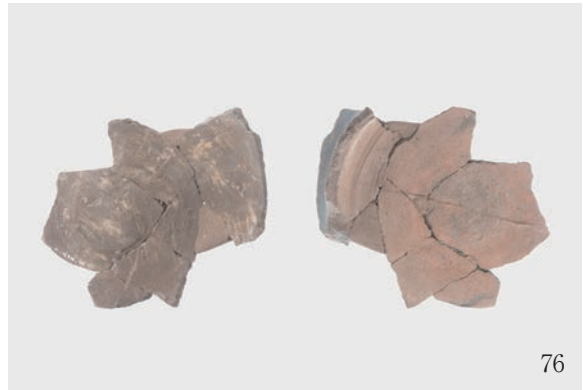
E 区 SK12 陶器(碗) (内外面)



E 区 SK17 磁器(碗) (内外面)



E 区 IV 層 青磁(碗) (内外面)



W 区 I 層 瓦質土器(焜炉) (内外面)



W 区 I 層 瓦質土器(火鉢)



W 区 IV 層 石製品(砥石)



25

E区 SK9 石製品(石臼)



43

E区 I層 石製品(砥石)



59

E区 III層 石製品(石臼)



60

E区 III層 石製品(石臼)



49

E区 III層 陶器(皿)



50

E区 III層 陶器(皿)



51

E区 III-2層 陶器(碗)



85

W区 III層 磁器(碗)



95

W 区表採 陶器(皿)



96

W 区表採 陶器(皿)



97

W 区表採 陶器(皿)



98

W 区表採 陶器(皿)



100

W 区表採 陶器(鉢)



101

W 区表採 陶器(小碗)



102

W 区表採 陶器(碗)



103

W 区表採 陶器(碗)



104

W 区表採 陶器(碗)



105

W 区表採 陶器(碗)



107

W 区表採 陶器(行平鍋)



108

W 区表採 陶器(片口鉢)



109

W 区表採 陶器(爛德利)



110

W 区表採 陶器(火鉢)



111

W 区表採 陶器(盃)



117

W 区表採 磁器(皿)



W 区表採 磁器(皿) (外面)



W 区表採 磁器(大皿)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(小碗)



W 区表採 磁器(碗)



W 区表採 磁器(猪口)



W 区表採 磁器(猪口)



W 区表採 磁器(猪口)



W 区表採 磁器(猪口)



151

W 区表採 磁器(猪口)



152

W 区表採 磁器(猪口)



159

W 区表採 磁器(鉢)



160

W 区表採 磁器(鉢)



161

W 区表採 磁器(鉢)



162

W 区表採 磁器(小杯)



163

W 区表採 磁器(小杯)



164

W 区表採 磁器(小杯)



165

W 区表採 磁器(小杯)



166

W 区表採 磁器(小杯)



167

W 区表採 磁器(小杯)



168

W 区表採 磁器(小杯)



169

W 区表採 磁器(小杯)



170

W 区表採 磁器(小杯)



172

W 区表採 磁器(碗)



173

W 区表採 磁器(碗)



174

W 区表採 磁器(碗)



175

W 区表採 磁器(碗)



176

W 区表採 磁器(皿)



177

W 区表採 磁器(碗)



178

179

W 区表採 磁器(急須蓋・急須)



183

W 区表採 磁器(燗德利)



184

W 区表採 磁器(德利)



185

W 区表採 磁器(瓶)



186

W 区表採 磁器(仏飯器)



187

W 区表採 磁器(灯明皿)



192

W 区表採 軒丸瓦



194

W 区表採 軒瓦



W 区表採 磁器(小杯)



W 区表採 磁器(紅猪口)



W 区表採 陶器(火鉢蓋)



W 区表採 磁器(火鉢)



E区Ⅲ·Ⅳ層 石製品(砥石), 青磁(碗), W区表採 陶器(皿·蓋), 磁器(皿·丸皿·小皿)



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129

W区表採 磁器(皿・角皿)



W区表採 磁器(角皿·碗·蓋·段重蓋·皿)



W区表採 軒瓦



W区表採 軒瓦・平瓦, 磁器(盃・湯のみ・茶碗)

報告書抄録

ふりがな	にしうらいせき							
書名	西浦遺跡							
副書名	高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第147集							
編著者名	吉成 承三 筒井 三菜							
編集機関	(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2016年3月4日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇'〃	東経 〇'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしうらいせき 西浦遺跡	〒781-2120 高知県 吾川郡 いの町枝川	39386	320048	33° 32' 55"	133° 27' 07"	2011.4.25 ～ 2011.8.9	1,500㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西浦遺跡	集落跡	中世 近世 近現代	掘立柱建物跡 柵列 土坑 溝跡 性格不明遺構 ピット	9棟 5列 27基 9条 1基 192個	土師質土器 瓦質土器 陶磁器 貿易陶磁器 鉄製器 銅製器 石瓦 ガラス瓶	南北朝期から室町時代の掘立柱建物跡などの遺構と、瓦質土器、貿易陶磁器が出土し、枝川地区では初めての発見となった。また、江戸時代前期の土地利用のあり方と、屋敷地として幕末から明治期、さらに近現代にかけて生活の営みが連続と続いている事が明らかとなった。		
要約	西浦遺跡は標高18～20m前後を測る丘陵及び谷部に立地し、丘陵の西側に開けた緩斜面地に南北朝期から室町時代にかけての掘立柱建物跡や溝跡など屋敷の性格を持つ遺構が検出された。江戸前期(17世紀前半)の遺物は旧耕作土中から出土し、幕末から明治期(19世紀)にかけての遺構が検出された事から、この頃に屋敷地として再編されるものと思われる。そして近現代に至るまで屋敷として存続している。							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第147集

西浦遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ

2016年3月4日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

